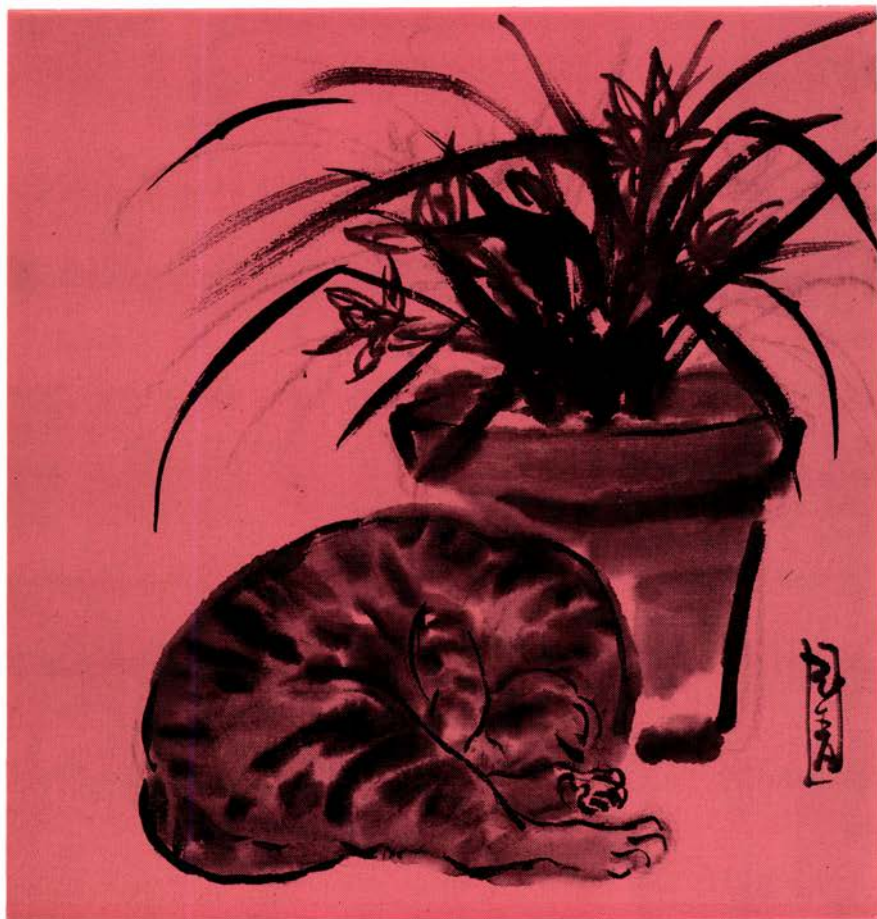


川柳塔

昭和四十一年一月九日 創刊
昭和六十一年二月二十五日 印刷
昭和六十一年三月一日發行 (毎月一日發行)
創刊大正十三年 通卷七〇六号



日川協加盟

No. 706

三月号

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5

尼緑之助句文集

生かされて

定価 二、〇〇〇円

送料 二五〇円

大矢十郎還暦記念句集

みかん船

頒価 二、〇〇〇円

送料 二五〇円

羽原静歩句集

足跡

頒価 二、〇〇〇円

送料 二五〇円

小西無鬼遺句集

わらじ酒

頒価 二、〇〇〇円

送料 二五〇円

■在庫少々あります。お申込みは本社まで。

川柳塔社

十二単

西尾 栞

一月十五日の新春おめでとう会は七十余名のご出席で、大変和やかであった。今年も当社顧問東野大八先生の御出席を得て、有益なお話をして下さって、一同満足して四時半にお開きになった。

それで、柳宏子さんと御一緒に、中島生々庵名誉会長宅へ新年のご挨拶とお見舞に伺った。ボタンを押したり、イヤホンで話したりしなければ入れないお城のようなマンションで、私のような頭の弱い者には、仲々憶えられないシステムであるが、さすが柳宏子さんはテキパキとして、十階まで上って、最後の関門

のイヤホンを押して、靴を脱いだ。何時もの玄関の間の応接セットが替って座敷の室へ通された。奥さんに御挨拶をして色々と話を伺った。

「この頃は、私をはなさないで困っていますの。先達っても、お風呂に入っているのに、呼ぶものですから、まだ入浴中だったのですが、お手伝いさんが「唯今浴衣を着ておられます」というて、その場を繕ってくれましたが、急いで病室へ行くと「遅いなア、十二単を着るわけじゃなし」などと冗談みたいなことを言うんですよ」

また「あの人は如何しておるんじやろか、この人はどうしておるんじやろか」と昔話をよくするのですよ。この間も、昔の女友達の話をするものですから「もう皆んな歿くなられたでしょう」と申しますと、「美人薄命というからね」と憎々

しそつに言うのですよ」

「奥さん、十二単の話も、美人薄命の話も、仲々面白い発想ですね。さすが川柳をやっておられた先生ですね」と。

柳宏子さんと異口同音に申して、まだまだ、元気な先生を喜ぶと、

「起きていますかしら」と言いながら病室へ二人を案内して下さいましたが、先生は、ものうげに臉を閉じておられた。奥さんは起そうとされましたが、「一人は」どうぞ起こさないで下さい」と言うて、南向きの明るい、暖かいお部屋を出た。

ともあれ、寝たきりで運動不足の先生を、不安な気持だったが、頭がしっかりしておられることが何よりと思つて、玄関を辞した。

先生の御快癒を祈つてペンを擲く。

座右の句

一步出ずれば我れ旅人となる心

(栗)

私の句

刑法は識らず鰯を焼く煙

仁部 四郎

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

十二単

婦人友の会の思い出

川柳塔 (同人吟)

自選集

■川柳太平記 (94) 川柳の群像 三笠しづ子

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (二十四丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

愛染帖

西尾 栗 … (1)

藤村 ♀ 女 … (2)

西尾 栗選 … (4)

東野 大八 … (30)

黒川 紫香選 … (32)

小出 智子 … (55)

宮 西 弥生 … (59)

橘高 薫風選 … (52)

婦人友の会の思い出

藤村 ♀ 女

私がすすめられて川雑婦人友の会に入会したのは三十一、二年頃だったか、路郎先生のお宅に寄せていただいた時、川柳の話が出て友の会にと潮花さんを紹介いただいたのがきっかけです。友の会三周年記念の少し前かなと思います。

川柳を作句してみようと思ったのは路郎先生のお稀祝賀会以来だったでしょうね。お勤めの帰りに本社句会へ出て兼題も席題もその場で作句して出し、時たま席題が入選一句でもあればよい方で、帰りは路郎御夫妻と宏子さんをまじえて法善寺横町で食事をし、車で先生宅まで見送り帰宅するのが月一回の私の仕事のようなものでした。

当時は作句どころか五人の子供と生活が精一杯で、大阪の街を東西南北走り廻っていた頃で友の会の金泥集にも平常は余り投句も出来なかったような有様でした。楽しかったのは新年句会で、遠く四国、岡山、篠山、京都から三十五、六人の集りで句会終了後の余興は大変でした。会場は浜寺の中島先生宅、鰻

女性アンケート 男が立派に見えるとき……………(56)

奥田みつ子・林瑞枝・西出楓楽・八木千代・藤田泰子

津守柳伸・奥山美智子・西山幸・宮西弥生・春城年代

1986年 新年おめでとう会……………(64)

初歩教室……………阿萬萬的……………(60)

「調子」……………行吉照路選……………(62)

一路集「削る」……………波多野五楽庵選……………(62)

「裏」……………木村はじめ選……………(63)

柳界展望……………(66)

本社二月句会……………(67)

各地柳壇(佳句地10選/吉川寿美)……………(71)

■3月各地句会案内 81 ■編集後記 83

座右の句

秋風の中で乞食に拝まれる

私の句

親切な人が説教してくれる

(豆 秋)

新 家 完 司

谷の病院の二階、大萬さん、西出一栄さんのお宅といつも出席させていただきました。宏子さんとレコードをさげて行ったものです。これは霞乃先生の踊りのレコードです。

踊りは霞乃先生初め小石、酔夢、一栄さんときさ子さんの民謡踊はとても素晴らしくお上手で、阿茶先生の歌沢も三味の音に乗ってうっとりときせられ、賑々しいのが民謡音頭の花奈女さん、篠山の富士子さんのデカンショ音頭、ついでとされて私いつか覚える事が出来ました。皆様お師匠さんについてられる芸達者な方ばかりでそれは楽しい句会でした。

只今のように毎月支部支部の句会に出掛けるのと違い、年一度か二度逢うだけでお名前もおぼえきれないまま一人減り二人減り結婚されると出席出来なくなったりで年々淋しくなっており、最後の西出さん宅では十五、六人だったと思います。一番盛んな頃は三十八年の路郎誕生祝賀川柳祭のあった頃でしょう。十周年で終止符を打たれましたが、北極星で盛大な句会と懇親宴を友の会がお世話させていただきました。

振返ってみれば私も四十歳を出たばかりで五人の子供をつれて生活に追われていて、これという思い出がありませんが、人との出会いを大切に今日迄生きて来ました。これからもうありたいと願っております。



西尾 葉選

和歌山市 西山 幸

いつも人よりゆくりうたう世過ぎ唄
逃げてゆく足音がする砂時計
寒卵少しうぬばれ過ぎないか
甘酒をしみじみ吹いて亡父恋し

女のなかの嘘とまことの絡み合い
糸底へあまりことばを閉じ込める

岡山県 土居 耕花

一枚の賀状と恋の物語り
地動説成る程僕も肩が凝る

秋の夜は独りまどろむ物でない
聞き流し感情線が承知せず

支払いの事で夫に囁かれ
夕焼けに逢いたい人が一人出来

八尾市 高杉 鬼遊
好きなことできて今年もお水取

人恋し郵便受を何度見る
年金が背伸びして買う雛人形
わたくしの足音を聴く退職日
下町に住んで地蔵と仲がよい
助平なこと考えて乗りすごし

松原市 谷垣 史好

苦言聞く酔牡蠣つるりと胃の中へ

またしてもテレビドラマはめしを食い
肉ジャガが好きかそれなら信じよう

口ついて出たは腹にもない言葉
足どりや陛下も母も老い給う

竹原市 小島 蘭幸

戴いた指輪に似合う服がない
母に叱られ父に叱られあねいもと

セールスが気合いを入れてくる団地
間違え電話の人と話していた三歳

勝負勝負と妻が花札出してくる

桜井市 岩 本 雀踊子

菩提樹のかけで雀餌を拾う

三度目も騙されてやる母として

三ヶ日帰る故郷のない飯場

子宝のひとりに積木崩される

うつくしいままで別れる寒の月

倉敷市 野 田 素身郎

すこし派手妻が手編みのカーデイガン

総合病院妻は胃腸科僕は外科

二次会へ行ったばかりに風邪をひき

新しい入歯が馴染まない雑煮

間違いでよかった元日の電話

松原市 玉 置 重 人

年金でパチンコ仲間飲み仲間

薬ぶとん兵の眠りは深かった

お歳暮の不覚下戸とは知らなんだ

ヘンなとこ痛み走ったガン保険

ミナミまで足をのばした残り福

兵庫県 遠 山 可 住

新築の窓風は春 風は緑

高圧線の誇りまっすぐ山を越え

相変りませぬ賀状に過去が詰め込まれ

お水取り今日から春が動き出す

旅の終りはシルクロードにしておこう

米子市 林 瑞 枝

来る来ない少女は指先から熟れる

夕ぐれて恋の白鳥朱に染まる

風止んでめつきり瘦せる雪おんな

たった一人の遅れを庇ってきた仲間

揺り籠に詩あり父の樹が揺れる

出雲市 原 独 仙

新年の抱負ひたすら安楽死

今日もまた安全地帯の炬燵抱く

それぞれに轍残して人生路

亡妻の分まで生きて三回忌

傘寿まだ食欲色欲あると言う

大阪市 中 川 滋 雀

古く良き大正だった雪月花

大正のメガネで測れぬ日が続き

朝星夜星の苦労は語らぬことにする

後遺症むしろ励みの種にする

風や遠い故郷は雪の下

岡山県 嘉 数 兆 代 賀

天に星 地に花 わたしに五人の子

生きていくのつべらぼうの貌つくる

口下手な人が力になってくれ

ニンゲンの裏がみたくて旅に出る

刺身のつまになって余生を丸う生き

堺市 高 橋 千 万 子

おめでとうおめでとうから飲み疲れ

私より母の祈りはなせ長い

座敷中ひろげて二十の新春となる

校長の家だ南国旗出してある

ご趣味など問うて問われて見合すみ

豊中市

安藤 寿美子

生きている事は楽しや寒の水

ビニールの毯藻可愛くあほらしく

あの時はあれが本音でありました

森消えて魑魅魍魎はどこへ行く

よかつたらうちへこないか小鳥さん

八尾市

宮西 弥生

シクラメンの世界で別れた過去に会う

あたたかい風向きにするシクラメン

北国の生れで男も酒も好き

若者と暮らす今日は毒になる

足音がリズムカルなり早春譜

倉敷市

小野 克枝

老境をなぐさめ合うて姉妹

三十年尻尾を出さぬ妻と居る

財産を貰う気のないかたつむり

実年の父は天皇様が好き

雪の下水子地蔵に逢いに行く

富田林市

岩田 美代

涅槃まで行かねばならぬ脚である

行きも良い帰りも良いという怖さ

薄情な噂にコーヒー熱くする

きれぎれの記憶をつなぐ雪の朝

ややセンチに雪の情緒のおもい入れ

堺市

河内 月子

一気飲みばかりしている不幸者

訳あって昔ばなしは止めておく

あなたにはいつも感謝をしています

冬の陽の中で老後のはなしなど

子供にも事情があつて問い詰めず

富田林市

藤田 泰子

心中考雪に埋れて睡りたし

關病記美しすぎる夫婦愛

厳しさに立ち向つてこそその虎

冬將軍に話してならぬ窓の隙

花置いて窓辺に春を呼び寄せる

倉吉市

奥谷 弘朗

へいちゃらで出来る若さが羨まれ

耐え忍ぶことはシベリヤから学び

町内に調子男というが居り

相槌を打つて話の裏を読み

あきらめも少し混じつた夫婦の和

島根県

堀江 正朗

春すでに躍動してる皿の味

餅さえ返らぬ意地と知りながら

地球儀の速さとまどう白い杖

大切にされて淋しさにも出会い

見当が狂つて指をまた泣かす

島根県

堀江 芳子

戦盲をどこかへ夫の笑い声

食欲は胃袋もたぬ夫が勝ち

おかげさまおかげさまとて春がくる

白杖といっしょに夫の背を押す

方程式解けば夫婦の和が揺れる

近江八幡市

前川 千賀子

京は風花ブランド連れの嬌声と

春を待つのはきりんと象とわたくしと

鬼よりも豆ぶつきたい人ひとり

井戸ひとつ村の宝の国想う

青春の脆さ樹氷は輝きぬ

大阪市

津守 柳伸

掃除機がママの気分で唸り出す

腹立てぬたつた三日の松の内

正夢を信じて女走り出す

土曜日の妻香水をつけて待つ

七三の三の情にすがりつく

寝屋川市

稲葉 冬葉

アルバムの子から貰う鈴の音

ああ夫婦遠い昔に拗ねている

もうひとり子が欲しかった片手鍋

女だてらの器用さに隙がない

糸屑を払うてやって構えられ

米子市

林 荒介

影武者も影の重さに耐えている

棧橋が氷ってわたしも凍るわかれ

じつくりと昆布にふくます絆かな

停止線に止まれば遮断機も上がる

頬杖は童画の森を出て来ない

大阪市

江城 修史

セールスマン素顔は家に置いて出る

愚痴のんで吐いて日銭追う暮し

満ち足りた余生の人には距離を置く

倅せは定め命生き貫きて

どちらかが投げたらあかん夫婦坂

大阪市

本間 満津子

母の齢越して屠蘇の香身に渗みる

黒豆の縁起祈りを込めて煮る

誕生日別にめでたいこともなし

浮浪者の横通り抜け宵戎

小正月やつと片づく冷蔵庫

和歌山市

福本 英子

揚げ底の軽さで届く部下の義理

水子地蔵を拝む女子高生を見てしまっ

定刻に運ばれてくる三分粥

九十余歳知恵袋ごと母が逝く

小さくてとても大きい老母の死

熊本市

有働 芳仙

神様はどなたか知らぬが手を合わし

四つ目の絵馬に合格賭けてみる

人生の裏道だって花は咲き

口論の果ては海鳴りだけ聞え

孝行という字が消える世の流れ

尼崎市 春城年代

おくびにも出さず炎を沈めてる

たとえばのはなしに針が潜んでる

相槌が上手になつて慕われる

人間が好きでひとりも亦好きで

日向からうらみがましく猫が去る

尼崎市 春城 武庫坊

終焉に笑える為の日を重ね

実年の終業式は未だ来ない

睨む瞳が無いまま達磨年を越し

七草を終えて気ままな風に会う

たとう紙あれこれ開けて妻の刻

兵庫県 辻 文平

泣くやつがあるかとセンチも泣いている

真実を言わせてしまふ血の絆

逢うときの涙は上手に出してやる

ときめきを抑えかねてる足袋の白

もう泣いておれぬ女の裁ち鋏

唐津市 浜本 久仁於

君が代を人さまぎまの歳で聞く

屠蘇愉し我に一男三女あり

ふんわりと足の裏から寝正月

春待たず親が気にする授業料

軍刀が似合う総理で初詣

奈良市 宮口 笛生

他所の娘になつて正月帰省する

娘夫婦がぬくい正月しに帰る

三ヶ日うまい物つて何だろう

老夫婦だけの兩戸を早く閉め

すき焼きが煮えて娘のこと思う

西条市 片上 明水

平泳ぎばかりで泳ぐ定年後

ひと賞める指でありたい人差指

故里の母冬の土産は重いもの

占いは桜の頃のことを聞き

餅の数祖父は達者でございます

柳井市 弘津 柳慶

兄が母と同じ元旦に死亡

母と兄元旦に逝く西の旅

強情な孫へ強情が許さない

古里の駅前明るく変つて居

途中から出席した男がよく喋り

ボタン一つぶら／＼と春の風

出雲市 園山 多賀子

昭和還暦植物学がお好きです

みぞおちに溜る女の懺悔録

喜びと悲しみ点綴の句集編む

能のない女も春の台詞持つ

以心伝心でんでん太鼓夫が購う

大阪市 西出楓楽

胸底をふる里行きの汽車が出る
実年のあたりで夢はモノクロに

幸せでときどき大きなあくびする

三月のドラマは頬をゆるませる

両の手に余る言葉を抱いて寝る

平田市 久家代仕男

盲愛の覗く眼鏡は何時もずれ

中年の夫婦で磨く艶布巾

玄関で年始帰るの帰さぬの

憶測の話だんだん気が減入り

立春が過ぎて和らぐ石の耳

島根県 小砂白汀

さんさんと万両ルビーの耳かざり

飛び石を跨ぐにさえも舞の足

口開けぬざくろ鴉もふり向かず

とてもとてもと自信を仄めかし

伊丹市 樫谷寿馬

成人の宴へビール進む

甘酒へ払う小銭の冷たかり

ワカサギは釣り上げられしまま凍り

薄端の松一本に神宿る

島根県 西村早苗

雪が降る春とはなりぬ風の中

伊勢暦信じ愚かとも思ふ

三月はデートがダメと伊勢暦
同郷のホステスいつも側に来る

仙台市 川村映輝

古い二人先ず健康初日の出

老人に問えばゲートボールしています

日本列島南は桜北は雪

雪の朝新聞少年だけ走る

大田市 藤田軒太楼

名刺見たとたん敬語に改まり

うば桜ふつと襟元に艶を見せ

戦友会戦話しも遠くなり

写経する正座へ仏の息吹知る

弘前市 波多野五楽庵

弔詞言うここに波乱の男あり

鍵穴を覗くマイクの無礼講

虎齢の六十ほども積もる恥

犯人と一歩差がつく及び腰

竹原市 森井菁居

表彰は付録と思ふ楽になる

早春のジャンプへ充電しておこう

セールスが続ける限りの坂である

横道にそらさぬ妻の綱さばき

桜井市 河合茂雄

かぐや姫馬鹿な男に騙される

バラ色を重ねて夫婦の城にする

旅先で食うから美味しい五平餅
僕の名を「あなた」と覚えた九宮鳥

橿原市

岩井 本蔭棒

乱気流ですよびくびくしなさんな
お囃しもはずむなんきん玉すだれ
価値観がまるきり違う妻と居る
いのちもて護らん国は汚れすぎ

高槻市

辻 白溪子

立読みの隣があつさり買うて去に
暖をとる飯場仲間は話好き
くつしやみを残して散髪から戻る
コーヒーのアベックニュースは見ておらず

京都市

松川 杜的

七草粥七草みんな同じ味
書架楽し句集一つずつ増えていく
メモがわり日めくり大きい方がよい
目玉焼三つ親娘三人恙無し

京都市

山本 規不風

言いたくても言えぬ俵せ猫は持つ
有難う素直に席を譲られる
健康の秘訣を言えは笑われる
酒の上の恋に本音も入れてある

倉吉市

渡辺 独歩

日本を叩く日本語習ってる
瞑想を人は痴呆というけれど

子育てはショパンブームの消えぬうち
歳の暮四十七士はまだ死せず

米子市

小西 雄々

亡母恋し冬日短かし洗い張り
フルムーン妻の甘えも久し振り
無に還る出発までのスケジュール
口裏を朝から合わせ重い靴

米子市

石垣 花子

ロボットよ人情話はわかるまい
其の道の鬼は勲章欲しがらぬ
時々斜めに割れてみたい箸
飽食と飢餓と地球の裏表

米子市

菅井 とも子

我慢する度にふくれる座りだこ
家中の毛糸編む指末だ老いず
CT検査(二句)

CTの結果待つ間の祈りかな
CTパス急に食欲湧いてくる

米子市

青戸 田鶴

今年からうろこ一枚ずつ剥がす
どの窓も覗いてみたい春の雲
鐘の音に誘われてゆく石の道
いつまでも土にかえれぬいちよの葉

米子市

政岡 日枝子

片方は花が絶えない比翼塚

一族の訛の中にいる蛙

雨の日に紙人形は胸を病む

素裸にされても泣かない紙人形

岸和田市 福浦勝晴

離職者のあしたにつづく海の色

まぐわいのあとでじくじと読む聖書

襟足のきれいなよそのご寮はん

蓄財はならず実年老い易し

岸和田市 古野ひで

欲得もなく病床の冬籠り

今朝も無事ひとり舞台の幕をあげ

長雨に雀の声聞く安堵感

そこそこの夢をまだ抱く老いの新春

岸和田市 原さよ子

冬休み孫で賑わう隠居部屋

打ち込める仕事があつて夫達者

孫達へいろいろ案じ疎まれる

風上げの親子へ風も味方する

西宮市 林はつ絵

ふるさとの水おろそかに飲んだ罪

みがかれた言葉へ返事ずっこける

ざわめきにすこし春めく枯山水

大寒が過ぎてチヨッキが編みあがる

西宮市 草刈墮駄

行先の同じ切符で皆他人

山頭火酒より水の旨さ知り

老いぬれば水に流せぬ事ばかり

左遷から妻が歩んだ別の途

西宮市 西口いわゑ

新しい足袋元旦の顔にする

銀婚へ堪忍袋修理する

友達になりたい人が敵にいる

プロボーション考えながら餅を焼く

西宮市 奥田みつ子

お正月トイレタオルも新しく

AもOもなし若者の血はたぎる

友達のためにも頼むと子の帰省

五十肩治療に社交ダンスなど

和歌山市 若宮武雄

恐ろしいのは王様の間抜け顔

家族とや持てあましたり縄つたり

芽に触れてびっくり寒の移植鏝

いい事もない安泰を願う齡

和歌山市 堀端三男

教え児へ年賀の返事三ヶ日

恵方など言わず車の置ける杜寺

水たまりひとつ越すにもある個性

キャッチフレーズみどりが多いニュータウン

和歌山市 松原寿子

哀しみを瞳のやさしさに掬われる

もひとりの私が春と擦れ違ふ
風花や愛のはかなき痛いほど
近道をビスのゆるみが赦さない

和歌山市

内 芝 登志代

カレンダーへ記す行事の多い幸

人生は嘘も方便ゴマもする

転んでも前へ転んで期待され

防災の訓練担架でてれている

和歌山市

中 島 正 博

南国に積もった雪で詩になり

贈られて贈って差引零の位置

ぎこちなく包み直した贈り物

閑散と宝石売場にある誇り

和歌山市

神 平 狂 虎

春三月男は姿勢立て直す

真ん中に置くと無口になる小石

時間さえあれば私は水を汲む

ボールペンよお前の話聞いてやる

和歌山市

細 川 稚 代

二人居てパントマイムで日が暮れる

休火山いつか燃える日溜めている

催促の出来ぬ返事が年を越し

捨て切れぬ誇りが傷を深くする

和歌山市

福 井 桂 香

やわらかい光が好きなスイートピー

誘い水のようなドラマが疎ましい
恋人に見えて影絵に嫉妬する
けだるさの中で言い分聞いてやり

和歌山市

山 川 克 子

も一人の私がとてもいい返事

将来を見抜いた部下の意見かも

特別の配慮信頼してよいか

性懲りもなく火傷のもとを育ててる

和歌山県

天 満 三千代

ハイハイと重ね返事の重い腰

出したものの全部荷にして娘等帰る

この先を問えば友情あやしなる

一歩ずつ惚けが近よる置き忘れ

大阪市

天 正 千 梢

心崩るる音聞えたり貯金帖

イチカラット光る指だよ何つかむ

大きなタクトでポプラ風をうけ

肩書きの立場でものを言いすぎる

大阪市

河 井 庸 佑

上司には上手に負ける腕を持ち

自分だけ良い子になっている孤独

愚痴言えば自分が負けたことになる

なまじっか知ったばかりにする苦勞

大阪市

西 森 花 村

地下鉄に真田の抜穴ふと思ひ

新年のかしわ手明治の男なり
令夫人飼われて狎に似て来たり
一人っ子風邪が直れば春だろう

大阪市 神夏磯 道子

カーネーション松の固さをやわらげる

新しい暦大事にめぐりましょう
鍋物がつづき横着だと思ふ

犬二匹拾われたのにいばつてる

大阪市 北 勝美

三ヶ日もたれる腹をもて余し

ふる里は素麵干しの寒すだれ
掃除夫の拝む朝日はビルの窓

ウインドに写る姿勢に齢を知り

大阪市 鈴木 節子

猫のような寅の賀状がほほ笑まし

旅に来てやっぱり早起き朝の市
数えうた唄えばふる里近くなる

宝くじに当るより余生健やかに

大阪市 大塚 節子

待合室専門用語のクランケで

斑鳩の御寺にシャツの干してあり
にらむ程人氣のあがる団十郎

夜の道靴音びつたりついて来る

大阪市 中西 兼治郎

お互いが過去語らない釜ヶ崎

老婆と今日も終った灯をともし
出世頭故郷へ遠く住んでいる
手違いで命拾った空の事故

唐津市 仁部 四郎

それなりの子へそれなりの父の酒

柔かい女のカネは借りられぬ
趣味の会道を説かれてうろたえる

分別が右手なら義理が弓手です

唐津市 久保 正敏

風流な雪は南の国に降る

カラオケの音符に女の飢えがある
身を守る棘があるとき邪魔をする

絆とはお遊戯会のカメラアイ

松江市 恒松 町紅

良縁が今年は欲しい絵馬を買う

うす味に馴れて婦唱の箸をとる
朝の雪踏んで健気な剣道着

親馬鹿の見本のような一人っ子

松江市 柳 楽鶴丸

川柳馬鹿毎日逃げ水追っかける

翔んでいる女の中に妻もいる
大ギャンブルと言った妻と二十五年

実年の意地で踊ったオールナイト

松江市 舟木 与根一

三ヶ日やらせ番組ばかり見る

湯どうふの哲学庶民にもわかり
川の字に孫の一人をあてがわれ
知恵熱が出て縫いぐるみ離さない

八尾市

山下みつる

あきらめの決断つかずくじの列

松の内目出度い振りをして暮らす

除夜の鐘なつて集金まだ残る

浪人の息子がいます静かです

八尾市

宮崎シマ子

冷戦を解くきつかけは春の風

恩人に押しつけられたがいい嫁で

男にも営業用の笑い声

座ったら長くなるがと上つて来

鳥取県

林露杖

水たまり一つ跳び越え年が明け

古稀の新春開く日記の一頁

迎春の床複製の虎を掛け

なずな粥戦友会の通知くる

鳥取県

川崎秋女

三時には三つ私の鳩時計

孤に籠るじじとばばとのものがたり

石女の悲哀をきいたばたん雪

雪が降る昨日をかくす雪が降る

鳥取県

中原颯人

ふんばって歩く地球のふたりづれ

人間いきいきとして風のふところに
欲望の眼鏡ひとの和のみ透す
肋骨の一本さらい花いちもんめ

鳥取県

中原汲香

ルンルンの心をこめて若松活ける

嫁二人大輪見せて春明ける

嫁ふたりならべて寅の春となり

虎の威は借りない寡婦の日めくりよ

鳥取県

新家完司

みそしょうゆ好きでこの国すてられず

泰平の今年も白い雪が降る

忠臣蔵好きなわたしも日本人

どの墓も平等の雪いただいて

鳥取市

森田熊生

野心ある日の発言に刺があり

時計コチコチ名案がまだかくれてる

苦勞もう忘れていびきやわらかい

良心を信じて春の風を待つ

寝屋川市

江口度

吸殻を数えて禁煙また流れ

初詣で鎮守の森の白椿

雪景色見てる真っ赤なシクラメン

濃い目の茶いれる企みあるらしい

寝屋川市

柴田英壬子

鵝色の情熱抱いている毛染め

還暦へ期待を込めて着る茜

福引きで当たった旅はひとり行く

スランプのまんま暖房利いた部屋

東大阪市 森下愛論

正月のねずみもおとりした動き

雪の朝はぐれ雀か飛び立たず

アクセルをふかしてしゃだんきにらんでる

無駄話しに來たでない十二月

東大阪市 斎藤三十四

初詣で賽銭十円たんともつ

年金は糖尿病と縁が切れ

点滴でゲートボールの足かるい

ハレーすい星陛下も観測台に立ち

東大阪市 崎山美子

ナツメロが好きで涙もろい父

大好きな酒が命をおびやかし

後指に耐えてる女のわび住居

一服の茶に二人の距離が近くなる

倉敷市 小幡里風

ドカ雪の続く列島沈みそう

牛だれ虎健脚をもてあまし

ウイスキーボンボン嘗めつつ賀状読み直し

先ず妻の所為にして探しもの

倉敷市 稲田豊作

酒呑みのオヤジの息子が酒を断つ

年寄りが今日も貸してる世故の知恵

親思うひと言老いの鬱暗らす

逢うたんび馬鹿を言い合い笑いあい

羽曳野市 塩満敏

森林にあこがれ盆栽三つ買う

一合を紅生姜で吞む男

童貞のままで死んだ兵の墓

すぐ寝つく妻よお前は幸せか

羽曳野市 中村優

晩酌のリズムで湯豆腐踊り出し

晩鐘の余韻が耳に老いふたり

拍手しよう正義の味方になるいじめ

御勝手に推理なさいとシルエット

羽曳野市 榎本吐来

春の雨迷いを一步深くする

言い訳も聞いてくれます春の雨

春の雨夫婦のいきさ長びいて

ふる里に母まだ在わす春の雨

羽曳野市 田中隆二

プレゼント義理を秤に掛けてみる

自問自答重ねて闇は深くなる

冬苺話相手を待っている

割り切れぬ数字は妻が持っている

岡山市 川端柳子

夢競う風のない日の吹き溜り

水に流すその勝手さをすぐ使い
ライバルが姑とは世間せますぎる
番犬に説教をする千鳥足

岡山県

時 末 一 灯

悲しみの果てはかすかな笑み浮かべ
片えくぼ女の坂の歴史変え
水鏡ゆっくり行けと雲が言う
豊作の匂い農水省慌て

綾瀬市

大 山 と 金

年賀状来ぬは電話で問合せ
傘に姿隠して踊り去る

勿体ないもったいないで屑を貯め
春来たる芽ぶけよ芽吹け春来る

東京都

増 田 次 章

離れてから見えてきた景色
ぜいたくを言うなよ戦争ない日本
旧交は病氣と孫の話から
生きがいは仕事と小さな声で言う

笠岡市

松 本 忠 三

宮中の参賀テレビで畏まり
総入菌酸いも甘いも噛み分ける
どنگりの組に入ってほっとする
口先で言う降参に脈がない

島根県

錦 織 文 子

ぬくめたい心私にやさしい人達と

抜き衿の女の目立つ初詣
若水を汲む嫁にして華やけり
自分史を書けば私の夜が長い

河内長野市

井 上 喜 醉

電卓で勘定してる串カツ屋
終電で忘れた傘がおでん屋に
段取りがつかず断り考える
鼻声で延ばす子連れの里帰り

美祢市

安 平 次 弘 道

核家族へ届かぬ祖母の子守唄
非課税枠に満たぬ貯金で中流で
雑学を大事に老いの知恵袋
図書館で昼寝暖房完備です

今治市

矢 野 佳 雲

たつぷりの皮でオコゼの鰓だらけ
いじめっ子気にすな青い空がある
赤飯の炊けない嫁でケーキ買う
殺生をしたタコ壺が飾られる

名古屋市中

越 村 枯 梢

泣き寝入りするには邪魔な衣の音
壁に貼ったヌード写真に笑われる
投書狂に少し嫌悪のボールペン
檜山から速達便の雪便り

新宮市

川 上 溪 水

お金までジツとする間の無い師走

太陽にかわりはないが初日の出
初詣去年ぐらいの幸願う

それなりの頭今年も風邪をひき

運勢は大吉金運ままならず

三が日半身不随に似たくらし

孫の絵日記俺のひたいはしわだらけ

他人様には良いお人だと妻の愚痴

金柑を一枝つけた窓明り

婿さんを貰う気こぶし咲く頃に

愛すでに冷えてる滝の音を聞く

海に出る乏しき頭脳満たさんと

せめて心美しく老いる一里塚

甘酒と豆炭温し初詣り

白岩文衛氏を悼む

にこやかな丸顔残して又一人
軟座席最初の最後となった人

ほどほどの嫁で気兼ねのないくらし

同居しても老後の事は言い切れず

失敗はわたしもあつた嫁の歳

吊し柿正月迄に大分減り

諫早市

原田メイシユン

弘前市

田中

売家ありかつて聞こえていたピアノ

給料が上がリ組合費も上がる

教育上悪いテレビを子と見てる

時間まで出口のそばで飲んでる

つながれた犬はえあつてラブコール

知つていて知らぬふりする京なまり

制服の胸のふくらみ夢を秘め

座をはずし心しずめる初扇

童顔が浮かんだ賀状だけの友

調子良い時は大きく見える的

妻捨ててまでもと思う血の絆

物干しも嫁さんが来た色になり

七輪の湯豆腐囲む趣味の会

負けて勝つ男となつて五十路過ぎ

少しずつ絆がずれて子が育ち

その昔貧農搾取城の跡

守口市

羽原静歩

七尾市

松高秀峰

山本テルミ

山口美穂

富田林市

田形美緒

矢部市

平田実男

箕面市

坪田紅葉

平田市

田中

弘前市

田中

七尾市

松高秀峰

守口市

羽原静歩

寂聴の瞳に桜咲き桜散る

神々の流浪出雲にも大和にも

サングラス昨日の嘘が見え隠れ

ふりかえる誤植だらけの人生よ

宝塚市 丸山 よし津

お年玉一気に殖える預金高

風当り避けて寡黙な水中花

ティーカップ朝の片付け済んだ部屋

吊革のおしゃべり続く暖房車

姫路市 人見 翠 記

葬式と法要だけの緑の顔

小春日の犬の寝ざまをよけて行く

置炬燵読むもの編むもの左右にあり

一人寝の電気毛布は味方なり

玉野市 小谷 仙 山

コーヒーも愚痴聞いている冷えている

帳尻は雑費で合わす事にする

負けて勝つ教え守って風邪を引き

差引きをしても男と女の差

尼崎市 西村 かすみ

写楽だとはどほどに聞く流れ雲

納得のゆかぬ爪先石をけり

いっぱいの酔いがおくれ毛かき上げる

鉄橋を渡ると思慕がなおつる

大和高田市 岸 本 豊平次

三ヶ日雨戸の開かぬ部屋もあり

姑と丸くいつてる団子鼻

口元が母に似ている片えくぼ

大和路の冬陽をぬうて老夫婦

豊中市 田中正坊

ひとり棲む男の窓に射す冬日

無職にはやはり無職のスケジュール

温故知新歴史マンガを読んでいる

白岩文衛君を悼む

パレットに色を残して君は逝き

松原市 佐藤 藤子

正月も三日おむすび焼いている

日本酒と湯どうふ二人だけの新春

怒らせたのでしょとかきみの標準語

許すとは言わずストーブに火をつける

浜田市 中川 幸一

銀狐案外安い魚買う

仮面でも紳士の貌は苦しいな

原点に戻ると睡くなる会議

毎年の冬の寒さも愚痴の種

倉吉市 広本文子

雪起こし鳴る夜哀しい愛を絶つ

スカーフの赤が憶えている出逢い

尾を振らぬ犬が一匹輪の中に

風が聞くくぼんだ道の人いきれ

高知県 松岡三吉

正月やたった三日の顔かいな
寝返りをうてる一人の床でよし

膨れても女あしたの米を研ぐ
台所わたしパーマをかけただけ

吹田市 茂見よ志子

梅一輪あしらい祝いの膳とする

陽溜りの廊下取られて並ぶ鉢

初詣で娘よ安産の鈴を振る

正月の付けが露わに体重計

大阪市 黒田真砂

又一つ年を重ねた春の膳

のぞかれ度くない私生活春の雷

風邪の子の視界に母が居る安堵

大阪市 長谷川春蘭

御交誼が何時まで続く年賀状

絶対と力を入れた内緒ごと

ぬきんでて仲間はずれの憂き目見る

大阪市 藤田頂留子

片づけてしまうと寒い一人部屋

亀で良い牛歩でも良し負けおしみ

三月にあるきびしさとあたたか味

大阪市 吐田公一

皺の一つ一つを語る喜寿の母

胎動へ夫は父の顔になる

裏話何より好きな老いの耳

大阪市 松尾柳右子

使い途もう決めていたお年玉

貝割れにかつおで朝が動き出す

一日をハンドクリームなぐさめる

大阪市 鍛原千里

冬に聞くおとぎ話は暖かい

エレキバン張ったまま街に出る

日だまりでみんないい顔しているよ

大阪市 山根いつを

こせこせはすまい巨きな日がのぼる

あと押しの頃がよかった夫婦なか

高いビル誰もが高給とりにみえ

大阪市 坂本仙吉郎

瀬戸内の旅

瀬戸内の霧の難所に橋架ける

房總の旅

手を打てばこたえて集まる鯛の浦

地震封じ香取の宮の要石

大阪市 岡田ふみ

しみじみと我が子は良いなと風邪の床

ほどほどの息子で事が頼み良い

「おばあさん」に振りむく自分に苦笑する

大阪市 町田達子

予報通りおだやかなりや三ヶ日

小春日の墓前で愚痴の初詣り
栄転も單身という落し穴

大阪市

板東倫子

夜廻りの有志は老人会の人
幸福の基準を下げて満ち足りる
実年はチャンネル権を妻が持つ

大阪市

北山悟郎

家計簿があぐらかき出したお正月
虫けらが燃えれば怖いことをする
O型で僕の間評価され

大阪市

塩田新一郎

説いたとて腹の虫には耳が無い
豪雪を越えても葉書四十円
母恋いてイエス娶らず冬の雨

島根県

榊原秀子

お手製のこんにやく貰う年の暮
雪見障子から冬の景という炬燵
冬を愛すのは雪女かも知れぬ

島根県

榊みどり

長生きへガン検診を受けに行く
カレンダーへ丸して明日の夢しるす
じわじわとつんば棧敷へ波をよせ

島根県

石田清泉

髪染めて一步踏み出す古稀の春
年賀状思い出せないのが一つ

無神論病気でや々と神に遇い

島根県

松本はるみ

青りんご兎角片意地張りたがり
引きずった過去は語らぬふところ手
水仙にわらわれそんな愚痴を吐く

島根県

藤原鈴江

飼い主に似て名犬の歩きぶり
よき友に巡り合えたをかみしめる
余生いくばくされど歩幅をゆるめない

島根県

北川民子

山茶花の白さへお茶を淹れ替える
相談に来たのが意見をjして帰り
美しい思い出ばかり友が逝き

島根県

松本文子

再出発今さら気分のこと
引出しの亡夫が時々顔を出す
忘却の旅想い出を連れ帰る

島根県

大屋秋峰

産油国のクシヤミがひびくドラム缶
血の絆よく似た孫の低い鼻
羽づくろう女はすでに脱けがらか

島根県

岸本輝水

自縄自縛私も秋の風の糸
内孫も外孫もなしお年玉
白黒の写真のならぶ家に住む

神戸市 山片紀雄

海の幸凝つて長寿の干し鰯

印相の良い印判で借りている

元旦の誓いは松がとれるまで

米子市 田中亜弥

嫁となり先祖を守る花買いに

一途な鳩で手品の種につかわれる

ハトマメマス時の流れを噛みしめる

米子市 寺沢みどり

南天の朱に満たされた初春の床

身構えて筆の穂先にそむかれる

冬空のうすら明りを信じよう

米子市 沢田千春

みかんうれ祭りばやしがなりやまぬ

今年こそ背すじ伸ばして歩こうよ

観光のざわめく街に昼の月

米子市 光井玲子

まっすぐに歩きすぎたか落とし穴

少しだけあけて我慢の通る道

結納を迎える裾に春の雪

米子市 茂理高代

悪者が一人も見えぬ銀世界

新聞の世相が悲し春一番

迷いからさめると深い海に出る

岸和田市 清野こう

姉妹が揃えばはずむ話の輪

ボシエットを掛けて年始に孫が来る

寝込まれた嫁に戸惑う台所

岸和田市 芳地狸村

夫婦でも欲はそれぞれ違う彩

ちよつとした知恵でおさまる仲たがい

宝恵かごきれいどころで街が酔い

鳥取県 清水一保

顔洗う明日は二十一世紀

川柳の鬼で成仏する覚悟

耐えるだけ耐えて語らぬ雪の竹

鳥取県 金川満春

喜寿の新春九十点の老妻という

無意識にドッコイショーが口に出る

世界から見れば日本は活火山

鳥取県 森田布堂

注連つけたまま轢き逃げが捕えられ

へそくりは造花を挿した壺の底

宝石も偽 鑑定書も偽 鳥取県 森山盛桜

それからの日本は知らぬミコト達

流れのままに遊んだ水の空しさよ

一億のあなたも中の上ですか

鳥取県 中原みさ子

白寿までふんばってほし父の背な

カクテルに騙されている恋ゲーム
恋ゲーム真つ赤なバラで許されぬ

鳥取県

土橋 螢

去年今年あしたも確かあるいのち

蛇の目傘ボンと開けば雪が舞う

三尺の雪に愛憎積みかさね

西宮市

朝山 千世子

雪だより美景に酔えど住むつらさ

かたづけて探しもの出てホツとする

年賀状筆持つことが愉しくて

西宮市

藤村 宏子

利き足のほうからさぐり入れてみる

耳よりな話に手仕事倦んでくる

三面鏡の正面とだけ妥協する

寝屋川市

宮尾 あいき

数の子が好きな娘でまだ産まぬ

うちに年男三人います虎の新春

風邪引いてまんねん今年寝正月

寝屋川市

平松 かすみ

邪魔者はいらぬカップを二つ置き

真直ぐに張った切手を信じよう

セコハンでいつも我慢の次女三女

寝屋川市

堀江 光子

追いかけて追いかけられて十二月

鳴り出して話とぎれる除夜の鐘

逝く年を惜しむ酒熱くして

寝屋川市

岸野 あやめ

あんなことつられて言うた軽い悔い

引き返す勇気があった探検記

逆うて見たい日もある生き字引

岡山県

岩道 博友

既製品買うから悲惨な顔になり

恐ろしいエイズが許可なく上陸す

六甲おろし忘年会をしめくくり

岡山県

二宗 吟平

生きざまを語れば尋問受けるよう

孫が手をとって走らす青信号

ワープロが欲しくて年始についてゆく

姫路市

松浦 輝月

銀杏舞い石仏莞爾として在す

決めかねて鶴の一声恋しがる

小雪やみ真赤に光る万年青の実

姫路市

大原 葉香

奥さんと呼ばれ農婦は背をのぼす

音もなく刻は流れて去年今年

マンガ本意外と本音ついている

姫路市

丁坪 サワ子

古里の宮今年も鯛焼く母子連れ

初詣近くの宮ですます老い

元旦の抱負は年毎小さくなり

岡山市 井上 柳五郎

古稀の初春まだまだ夢をふくらませ

雑煮餅に義齒の冠脱がされる

南天の厄除け箸も初詣で

岡山市 行吉 照路

つまりて初心忘れた踏絵なり

黄昏になるセールの重い靴

カラオケに眼鏡忘れあわてとり

岡山市 花田 たけ志

面当てにやさしくやさしくお返しし

順番が狂えば蛇が出る鬼が出る

門前の業者を殺す仏達

西宮市 野呂 鶴汀

古い佗し小さき蟹と戯れる

北の旅一駅ごとに冬が増し

髪形変えれば気性まで変り

西宮市 津山 冬子

世相など気にせぬ余生日向ぼこ

中流をくらべ女の隙間風

冬木立律義な風が吹いている

唐津市 田口 虹汀

煤払い心の煤は忘れがち

芋がゆに雹の音もまじるなり

虎の威をかりた狐が街へ来る

唐津市 浜本 義美

若水を汲んだ昔のはね釣瓶

松の内TV機敷の妻太り

草臥れた病ごっこの老夫婦

出雲市 板垣 夢酔

ごまかしは出来ぬ笑いが先に立ち

不幸の手紙それさえ来ない老い孤独

ナナハンを買って与えた親が泣き

出雲市 吉岡 きみえ

寒ブナをさげて仲間が飲みにくる

まだ若いもう若くない両天秤

お互いにねじを掛け合う老いの日々

高知県 赤川 菊野

クラス会石女一人浮き上がり

還暦を生きて片眼がやつと開き

見るだけのつもりへまたも買わされる

高知県 曾我部 裕

また妻が炬燵を弱にしてみました

枕裏返して昼間を忘れようとする

こな雪が飛ぶバス停の待ち呆け

尼崎市 伊藤 春子

こんな日が前にもあった橋の上

出直すときめた家裁に菊香る

濡れ衣のいつかは晴れる冬の空

尼崎市 角野 かず子

泥水を知らぬ金魚の華奢な息

反戦のバッジをつけた大男
包丁の予感あしたは逢えるだろう

倉吉市

渡辺 菩句

人の流れにほんやりと流されてみる
神殿のここだけ時間止まってる
貴重な冬の青空目に溜める

倉吉市

野中 御前

目に耳に囁き消えてゆく小雪
石路の花黄八丈も派手になり
北風をまともに受けるトップの座

豊中市

上田 登志実

今さらに言うこともなし我はわれ
春の雪佳人の傘に落ちて消え
ほろ苦い山菜の味母の味

豊中市

奥田 満女

紙一重狂院でするお正月
淀駅にまた負けました顔揃う
式場が殖えて離婚もふえている

神戸市

仲 どんたく

芳紀八十電池の切れたように逝き
排ガスへ我が家の取り柄の透き間風
揚げ幕へ吸われて入りぬ武蔵坊

倉敷市

藤井 春日

不惑まだロマンの夢に酔うており
リハビリの窓から桜の芽吹きを見

男には涙をかくす酒もある

京都市 都倉 求芽

母病んでいよいよ赤し寒椿
新聞がたまつて四、五日世に遅れ
封筒に入れる札束の無口なり

今治市 越智 一水

恋心六十にしてまた燃える
金魚鉢おもたし不意にくる孤独
妥協する齢へさみしさこみ上がる

羽曳野市 佐野 白水

嫁の名がとっさに出ずに挨拶す
女医だから言えるタバコも酒もよせ
新年の挨拶抜きで告別式

浜田市 佐々木 裕

苦い酒愛のパズルが解けぬまま
三ヶ日過ぎれば夫婦もライバルだ
どんでんの返しをねらう策の策

和歌山県 寺田 裕美

鯛食べてしまえばひよっこり客が来る
挨拶も寒い寒いで松がとれ
向い風ばかりでないとと言う背中

芦屋市 竹中 綾珠

どのチャンネルひねっても風邪薬
返事来ぬ賀状病気かと案じられ
糸電話で遊んだ頃の孫の声

三ヶ日テレビの守りの置炬燵

貝塚市 行 天 千 代

初雪と七草粥で誕生日

見送れば同じ思いか振り返る

奈良県 宮 川 古都路

橋筋に女がおう春おぼろ

エメラルド今日はうれしいイヤリング

ゆくのか行かへんのか風呂さそう

枚方市 稲 葉 星 斗

釣り宿で釣果も書いた年賀状

初釣りを祝う小舟に注連飾り

七色の水も見事に出初式

高石市 浅 野 房 子

ノラ猫は年金ぐらしなど知らぬ

コマージュナルチャネル変えても追ってくる

想い出が折り重なっている老後

吹田市 園 田 文 子

千成瓢箪わくわくおどる待合わせ

留守の間の犬の頭をなでてやり

鍵かけて花瓶の水をおもい出し

和泉市 岡 井 やすお

お師匠さんもおきばりやつしや事始め

正月の医者おめでとぅとは言わず

鳩ブルース雀トロット踊ってる

町田市 竹 内 紫 鏑

失語症めいた賀状が増えつつけ

道真の歌を讀えて予報官

配属は専門馬鹿になる職場

高槻市 竹 内 花代子

惚けてないだけが救いの母米寿

ホーム炬燵親娘の足が他人めき

レモンティ梅見の指切りして別れ

松江市 竹 内 寿美子

冬火花わたしのころ追いかける

人恋えばわが手に溶ける春の雪

逢えるまでじっと待ってる雪うさぎ

大阪府 坂 口 公 子

さいころの数が出過ぎて上がられぬ

奥様！でころりOK出しました

二重まるつけてあしたを送りたい

境港市 細 木 歳 栄

逢える日は爪の先までバラ色に

逢って来た余韻がゆるるイヤリング

よろめいてみたい日もある紅椿

枚方市 二 宮 山 久

人生のゴールへ妻という味方

倦怠期らしい夫婦語りごと

ふる里の母も見ているおぼろ月

餅一つ減らして老いをいたわれり
堺市 柿 花 紀美女

水を買う都会で水の味知らず
初鏡皸もきれいに写されて

福岡県 横地雅風

子はいとしされど余生に金が要る
子が好きで日課がふえた犬の世話
税逃れ鉢の預金を確かめる

川西市 松本ただし

放つとけに女の業が彩に出る
バーゲンに並び美容院ではチツプ
仏像も冬眠している古都の雪

松原市 小池しげお

ゴキブリは可愛い顔で死んでいた
子沢山母の匂いのするふとん
羽毛ふとん明治の父はよう寝ない

羽咋市 三宅ろ亭

もう一つの顔に出会った雪の朝
判ったような顔で鏡獅子を観る
もしやあの人と思う顔汽車にいる

守口市 野呂右近

盆梅の手入も楽しやがて春
やさしさがあって女は女神なり
中流の下と自認して満ち足りる

和泉市 西岡洛酔

雲の峰明日は神に成る心
妥協する積りピエロの面かぶる

定退から夫婦太鼓は軽く打ち

兵庫県 藤後実男

ふる里の秋を一家が食へに行く
双生児同じ笑顔の夢を見る
捨て犬と又会う師走の風の中

和歌山市 玉井豊太

独り暮しを本気にさせる白い指
鬼の下駄揃えて男遠ざける
指にダイやお酒ばかりが強くなる

島根県 城角鶏生

ヘソクリの出来ぬ財布を預けられ
マネキンの裸でミンクのコート着る

大阪府 古川美津枝

寒げいこ小さな唇一文字
しらふではあきまへんなど新春の爛

倉吉市 淡路ゆり子

大安を父は虚しく酒をくむ
誕生は未来へ遺す死の扉

高知県 小澤幸泉

年新たされど職場の同じ顔
寅さんのうたが聞える初春の街

岡山県 直原七面山

豆秋の遺書美しく麗しし
無理をして罫に落ち

自選集

水粉千翁

哀歎の歩幅でつづれ織生きる

感情の外で大海原歩く

愚を悟るべからず円満居士となる

一粒の米の重さに弥陀おわす

知足常樂いのちあふれるばかりなり

米澤 曉明

七草をつんだ風情も粥の味

大阪弁金にこまつた声でなし

バスの旅樂しお茶目があちこちに

外は雪鍋を囲んだ久しぶり

お土産のねうちはやそにない土産

高橋 操子

有りがたい世にありがたく生き伸びる

血圧が感じ取ってた今朝の雪

仏さまに聞いて見なさいもめる寺

思い出す幼き頃のホウキ星

ハレー彗星不吉な予感きいてくる

八木 千代

泣かないで漕がねば凍てたぶうらんこ

千代紙を折る雪の日もやすまない

見おとしてしまふ真昼の水たまり

聞き捨てにしよう昆布がうま煮えたから

雪だるまうす陽に甘えなくなつた

小出 智子

春が来るといふから窓を開け放つ

健気にも福沢諭吉読んではる

病院へ憎まれ口を聞きにゆく

球根が芽を出すきのうの傷のあと

いやな予感で一日早く髪を切る

月原 宵明

ふくれ面して左手でめしを食い

節約と義理しか知らぬ坐りだこ

靴べらと一緒に握っている謀叛

愛もまた三寒四温ある如く

ネクタイを結んだ後で面を撰る

金井文秋

とほけても善人の目はすぐ笑い
気がかりをみくじの吉が少し消し
正直なペンで自伝を飾れない
中流と思いなさいよ自由です
愛情の不足で枯らす植木鉢

尼 緑之助

冬の風 緑樹毅然と立ち向う
さざめ雪炬燵ごもりの松の内
女の子既に受け継ぐ長電話
おぎなりのテレビだらだら松の内
子供部屋世紀の夢を取り散らし

藤村 女

苦勞した人生淡い彩に溶け
顔色に出さぬ苦勞を母が持つ
人間になじめばおれもしわがより
時は金なり音もなく迫る老い
追憶の涙はみんな真珠色

川口 弘生

三月はサンゴの赤と水の青
行間は読めても紙背まで見えず
戦争具と女が巨利を還元し
長在庫逸品なれどはかされる
炎天と寒風葬を深くする

正本水客

責任のない對話ならまだ続く
ケラケラと木の葉が笑うたら凄からう
ひと言がその鼻先で風化する
仲良しの雨の支度もして出掛け
禪寺を出てレモンティ熱し

小林由多香

根性ももらいのれんを分けて出る
苦手意識相手も持っているらしい
熟年の女ずるさも身につける
緊張の国境越えて鳥が着き
策を練るコーヒーをのん気に見られ

黒川紫香

汗匂う父お人好しだと思ふ
口下手がいつも見舞いに来てくれる
階段を少し上って噂聞く
パツと散る雀へ声をかけてやる
名指しした奴がライバルとは憎い

市川 鱗魚

試行錯誤まだ坂ばかり生きる道
春の寒さで母にささくれ目立つ指
雀百まで踊る男のふところ手
人に非をそしるともうい梅もどき
コッペパンいくさごっこはもうしない

本田 恵二郎

さすが年輪花を持たせるコツを知り
ふんわりととぼけることも社交術
逆境で逆境利用法見つけ
無駄骨がメリメリメリと音をたて
売りものにせぬ明るさが売れに売れ

児島 与呂志

今迄の努力にしばらく沈黙静観す
欲の無い日々がこんなに楽しくて
だんだんに足代高いから疎遠
生き残り又俺を知る戦友が逝く
善人のつもりで旅などするものか

工藤 甲吉

御名御璽六十年はめでたけれ
男にもオイオイと泣くときがある
養虫の家より寒い隙間風
温め合う相手のいない冬寒し
雪国の人あきらめて雪の下

大矢 十郎

愚夫なりや妻のセットへ気がつかず
鏡台に嫁いだ後の不用品
どちら向いても壁で社長の廻り椅子
億の話聞かせて千の情なし
年金はありがたいなり安いなり

野村 太茂津

守銭奴もお通しですか仁王さま
悪役の見本を俺はひけらかす
貸したことあった悪知恵借りにくる
道草を食って拾うた実が熟す
ひと歩きしたら出遇うた春の神

長野 文庫

小児科が泣き止ませるも得意技
内科外科ほかにも医学評論家
健康で利発農家にむこがない
正月号二カ月前に書いたらし
コネのある男にひや飯食わされる

山内 静水

旅久し妻と寛の水の音
酒になる竹原の寒の水
筆洗うわれながら吾れながら
居てほしい去んでもほしい孫送る
一筋に生きありがたし芳名簿

藤井 明朗

虎のよにゆかぬ景気の低迷す
百寿まで夢ではないと喜寿の艶
うぬぼれの顔は一矢の的になる
健康で陽気詩が舞う喜寿祝
小説のように喜寿やと幸せをもらう

川柳太平記 (94)

川柳の群像

三笠しづ子

東野 大八

裏の裏その闇に咲く花があり

しづ子

拭わるる涙をもって逢いに行く

〃

もの書けば遺書めく胸の白き風

〃

幻を見澄ましたさに眼をとぢる

〃

言いさしてから恐しい眼に気付き

〃

あまつさへ涙は女の武器などと

〃

こともなくけさもかきあげられた髪

〃

太陽に甘やかされて眠いかな

〃

太陽と月の遠さに憧れる

〃

血の色のひと色白に勝ち誇り

〃

これらの句は、すべて因襲封建的な重い殻

を纏った、大正期から昭和の初めにかけての

一女性の川柳作品である。今から正しくは六

十年も昔だ。この人の名は三笠しづ子。

「永原」の田中五呂八は『新興川柳論』の

なかで『先駆する人々』の章で彼女をとりあ

げ「女性的な見方をいつもしっかり掴んでいる

異才である」と激賞し、彼女はいつも恋を

恋しているのではないか」と言っている。ま

た「川柳人」で木村半文銭は「歌壇の与謝野

晶子の如く、女らしさの聡明と、何ものも灼

きつくさずば已まない情熱とがある。出色の

個性作家だ」と推賞している。

「川柳はよく言えば通人。悪く言えば遊蕩

児のように思っていました。一九二二年集

と井上信子様の句を拝見してびっくりいたし

ました。その十七字のどの一字も皆生きて動

いているように見えました。同じ十七字の俳

句としてこれだけの深味は持てません。一つに

は私が同じ女性であるからでしょうが、信子

様にすっかり惹きつけられ、こうした川柳な

らば私も作って見たいと思ひ込んだのが、私

の川柳に入る動機です。俳句には昔も今も大

分女流がみえますが、川柳には殆んど川柳作

家がないことは淋しきかぎりです。これは

多くの婦人が古川柳のみをみて、今日の新た

しい川柳を知らない結果だと思ひます。私は

一人でも多くの婦人の方に、私達の行きつつ

ある川柳を見て頂きたいと願っています。」

（『大正川柳』大正十四年一月号『年頭所感』

三笠しづ子『要約』）

三笠しづ子は、昭和7年10月13日死去した。

享年51。遺族の手になる『三笠しづ子川柳集』

がある。この死去によつて「川柳人」は昭和

7年12月号を『三笠しづ子追悼号』とし、十

一頁にわたり特集を組み、井上剣花坊以下夫

人信子、半文銭ら十人が心からの悼文を寄せ、

追悼吟四十三句を添えている。

『麗人三笠しづ子の死』と題し、剣花坊は

四頁にわたり次の追悼文を書いている。（以下要約）

「本名は丸山貞子。弁護士丸山長渡君の夫

人である。明治十五年の誕生で、享年五十一歳であるが、晩年には三十台に見え、ほんとの年齢をきく者、誰しもびっくり仰天、反りかえざる者はない。その容貌の美しくきはかりでなく、才操の豊かなのみにあらず、自づから中心にこもり満ちたる柔情芳心の、詩歌と為り、音楽となり、その全人格をつくつた。

女史は大正十二年ごろ島田雅楽王君を経て川柳作家となったが、これに先だつ関東大震災によって、避難先の渋谷猿樂の親戚の家へ雅楽王に伴われ女史が見舞にみえた。かくてこの二客と僕と信子の四人で袋返しをした。女史がこのことを本誌二百号記念の紙上に

「これがそもそも先生のお教えをうつける第一指で、それから翌年八月に枕鐘会が成り立ち、私もその末席に置いて戴きました」と書いておられる。はじめて大正川柳（本誌前名）の創作欄に女史の句を見たのは、大正

十二年十二月号、即ち震災復刊第二号目だ。

かくてはじめて川柳に身を入れ、死の前九カ月間まで、約八年間の川柳生活に、詠する所は数千句である。女史は多くの令妹をもち長姉の責任にたったが、女史は終生子を産まなかつた女の常として、兎や犬に人形を好ん

だのでそうした句に佳吟が多い。なお、懊惱や憧憬、煩悶とみる句は、女史ほどの麗人にして当然と思われるが、それが仮托であるか事実であるかを云々することは、故人に對しみだりに口にすべきことではない。」

「しづ子さんのお名前に触れたのは、大正十二年七月の大正川柳誌上であつた。当時女性作家といへば、東京に在つては完全に自分一人の孤軍奮闘の時代であつたから、自分の内心の喜びと気強さは非常なものであつた。

その後、枕鐘会をつくり、回覧法を作つて相互の真剣な批評をよせあい、先輩の批評指導をうけた。やがて、吉田茂子さんにしづ子さんと私たちの三人の提携は益々固くなり、その後二、三の女性も誘ひ川柳人誌上にはじめて「婦人欄」を作つた。楽しい日々であつた。しかし、いましづ子さんを失ひ新興川柳も寂しくなつた。あとに続く女性たちと大きな座を組む日はいつであらうか」（井上信子悼文）

「〇美くしい眼では、笑みを使いわけしづ子。この人は「氷原」「影像」の新興川柳誌にも活発な投句をされてゐた。閨秀柳壇のナンバーワンたりししづ子さんを失うことは柳壇はもとより、私たち婦人たちにとつても一大痛恨事でありませう。女性に女性同士で手

をとりあい、そして誰も手をつけたがらない川柳というすばらしい詩をこの世におしひろめ、瘦土に花をいっばい咲かせたい。み魂よ久遠にわが川柳詩を護り、花開かせ給へ」（吉田茂子悼文）

「〇美しいものから先に夜がくる

あなたは、あなたの正しさを身を以つて私達に教えて下さいました。私はあなたが五十一歳だったときいても佳人薄命という言葉が思われてなりません。「お人形さんのところへ行けば、いつでもしづ子さんにお目にかかれるそんなことを言つたことがありますね。

〇飛んでゆく風船玉の赤い風

あなたの美くしい句を誦しながら、私は永遠に飛び去つた風船玉の行方を、寂しく考えます」（中島国夫悼文）

★次号は「小林不浪人」

近畿文字放送作品募集

題 「人形」 森中恵美子選

締切 3月10日（3句）

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい。

〒540 大阪市東区谷町2丁目36番地

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

俳風柳多留廿六篇研究 (二十四丁)

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
石田 普一・南 得二・小野 真孝
本多 正範・石田 成佳・多田 光

故岡田 甫

398 桃林で蛤のなくのとやかさ

大屋 雛祭なので、花瓶にそれこそ桃林とでも
もいたいほど桃の花を掛け、雛段の下
の段には蛤を供えて雛飾りができている。
鉄瓶の湯も沸いて蓋が小さな、蛤がなくとも
いいような音をたてている。まことにのど
かな雛の日の午後だ、くらしい意味では
ないかと考えた次第。「蛤のなく」がよ
くわからな
いのでアテズッポウなタロウ解です。
八木 「蛤のなく」は不明だが、台所に
生きた蛤を置くと鳴くような音がする。

ひなの間ふけてはまくりの声

という句もある。

童的的 四・31

石田晋 雛段前での貝合せと解しております
が。

岡田 難句。

399 大へひに売ハ玄関の扇子箱

大屋 年礼には年玉を贈るのがしきたりだが、
大体において扇や鼠半紙、貝杓子など粗末な
ものが多かった。これを受ける扇箱を玄関に
置くが、無雑作に積んであるのは、まるで横
柄に扇箱を売っているように見える。

八木 玄関に積んである扇子箱を横柄に扇箱

買いに売るとい句。扇箱買は正月十五日過
ぎから来た。

本多 八木説賛。『続飛鳥川』に「弘扇箱、
松過より来る、今は二日より来る」とあり、
すでに元日早々から買いに来たらしい。
多田 賛。

玄関で扇売つてもげびぬなり

岡田 八木・本多説に賛。

天六・十一・一五

400 かう向きなさひと花嬢をすはらせる

大屋 婚約がととのうと、黄道吉日、大安の
日をえらんで嫁入りとなる。すっぱり顔を

つむように「綿ほうし」をかぶっている花嫁の手をとって、新婦の席へ導き、「サ、こゝ向きなさい」と花嫁を着座させる仲人の所作を詠んだ句。

八木 賛。

口上にしたが嫁はうごくなり

一五・21

多田 賛。回りの人のいいなりに行動する。

岡田 賛。

401 孝行ハ霞と霧におやに逢

大屋 年二回の藪入りに、親孝行な奉公人は親許へ帰って元氣な顔を見せて親を安心させようこぼせる。

藪入りの奉公人は、おおかた芝居見物か吉原へ行くのだけれど、親孝行な奉公人は親にあうということで、「ハ」の字のはたらきに注意すべき句だということになります。

岡田 賛。

402 生酔のいびきの上を毛虫はい

大屋 花の山であらう。酔っぱらってクダをまいていた男が、木の根にゴロリとなつて、そのまま寝入ってしまう。酔つての眠りは急に深い。折から毛虫がスーツと枝から下つて

来て、酔っぱらいの顔の上をモゾモゾと歩く。「軒の上をはい」というのはまさに川柳である。

花の枝もつて風雅なたわむれもの 八・40

多田 賛。

岡田 同。

403 山吹を出す頃傘をかつぎ出し

大屋 太田道灌と山吹の故事を詠んだ句。

道灌が夕立にあつて、農家へかけこんだ時分、道灌の城にいた家臣どもは、そら夕立だ殿の許へ傘をお届けしろと、傘をかつぎ出したことだろうの意。

どふ考へても山吹初手解せず 二九・8

山吹の花だがなぜと太田いひ 二三・17

多田 賛。

岡田 同。但しこの説話は作り話。道灌は相当の歌人でした。

404 暮の嫁二棹二月下旬来ル

大屋 暮の持参嫁の句。

暮の嫁なんじを呼ハ金の事 五一・9

暮の嫁耳ハ揃へど目ハ不足 八二・13

西原柳雨は「川柳風俗志」でこの句をあげ「雑道具か」と頭注をつけている。

鈴木 難だけで二棹もあるだろうか？

石田晋 難分けの句か。

多田 二棹が二月下旬でなくて、三棹が三月上旬でもよいのだろうが、「フタサオニガツ」で中七にうまく合い「ゲジュンクル」で下五に合うからではないか。

岡田 難です。持参嫁だから二棹。

405 あみださまにくひはゾアへ爪はじき

大屋 「にくひはゾア」は「憎い婆々ア」である。

嫁のアラをさがし、近所のアナを触れあるくのが何よりの楽しみのような憎体の婆々アが、アミダ様の前でなにやらフツブツとお願いごと。何もかもお見通しの阿弥陀さまは、胸のあたりに手をあげ、親指と人さし指で輪を作つて、つまり爪はじきをするようなお手つきで黙っておられる。傍から見ると阿弥陀さまが、この業つく張りの婆々アを爪はじきしているように見える。

八木 あみだ様は吉原の朝日如来、にくいはばあは遣り手としては。

多田 礎解のように考えていた。

岡田 同右。

水煙抄

黒川紫香選

今治市 野村京子

尼崎市 福田礼子

指切りの女がある日見た踏絵
子と会話鍋がコトコト煮えている
丸い輪を描いてピエロのジョーク好き
瞳を見つめただそれだけのレモンティー
闇の中マツチをつけて鬼女に会う

東予市 小山悠泉

農一すじ無冠の父の背が丸い
夫婦喧嘩妻に味方が多過ぎる
スーパールの餅ですませる小正月
プロポーズせよと背中を風が押し
余白すこし無駄にはすまい春の画布

藤井寺市 赤木和子

泳えてた涙を君の掌に落とす
神さまに背く日もあり朧月
味噌汁のお代りをして仲直り
囚人のように目刺は繋がれて
血圧は正常朝寝がしたいだけ

街に出て風の寒さを確かめる
冬の日の猫を味方に加えよう
いわし屋の隅で男の話など
群集を抜けて自分の顔になる
一人旅女は雨の湖が好き

八尾市 高杉千歩

死後のこと切々綴る落書帳
禁煙パイポ銜えてあせる原稿紙
いじめられっ子になっていただろ六十路繰る
見え透いた嘘へ演技の空涙
ひとり芝居だったいちにち黄昏れる

佐賀県 寺中三枝子

雪しきり逢いたいひとを遠くする
瞳の彩の深さに愛が透けている
せつかな名刺がポケットにいつもある
深いふかい愛が踏み絵をためらわず
視線泳がせ君はさよなら言う気だね

大阪市 清水 康 恵

指切りの数だけ書いた日記帖

好き好きとおしゃべりインコ肩が好き

もうすこし笑える春を一浪に

外野席うわさ話に花が咲く

道化師になつていたのは妻の顔

西宮市 紀 市 郁 栄

絶好調のうちにとどめの手を打とう

単身赴任の運命線がゆれはじめ

告別式の手順くるわす驟雨くる

再起する決め手ひとつを大切に

はなしたくない七十の恋をする

熊本市 大 川 幸 子

全員一致水炊きになる寒い夜

子育てへ忘れかけてた夫がいる

うさ晴らすくもりガラスに馬鹿と書き

再会へ時効の小指うずき出す

乗り過ぎていつしか渦に巻かれてる

熊本市 永 田 俊 子

絶え間なく水湧く自然の律義

反対する母の小さい背に負ける

葬いの家で雨傘もたれ合い

空缶を見ると蹴りたくなる空虚

吠え合つて犬は連帯強くする

熊本市 宇 野 昭 代

定年を待たず退くのが妻不満

子猫捨てた日は母猫の目をそらす

炬燵からのぞいた庭に落のとう

七七忌過ぎたら後妻を切り出され

節くれて働きづめの父の指

久留米市 鶴 久 百万両

想い出をたどる旅なり古都の野火

夢を追う男の背な隙がある

思慕いつか川柳詩人になった寡婦

金魚死ぬショックを春の陽が癒やす

老漁夫と海の戦史を語る浜

富山市 舟 渡 杏 花

ほめことばすんなり聞けぬ冬の耳

間違つた電話の中へ鳩時計

独り占めしたいナースの片えくぼ

繕いを重ねて貞女の貌つくる

ささやきをくすぐる耳朶を持てます

名古屋市 藤 井 高 子

春風のノック待つてる胸の蝶

叱られてみたくて経をあげている

攻めの面敬語に刺が生えている

波長ずれてジョーク不発のまま果てる

足袋底にへんな噂がついてくる

長岡京市 木 本 如 洲

一日が終ると消える窓の彩

踏切りを渡ると朝の顔になる

自販機の酒に気づかぬ妻の留守

シャボン玉明日の童話をしかと抱く
言訳の下手な座布団裏返し

竹原市 信本博子

自画像のバックは花で埋めました
古鏡美人に見えるから好きよ

本当の福は無かった福袋

楽しくてもまだ人生にある未練

わたしにも優しさ見せる野の仏

高槻市 河瀬芳子

威儀正しもの言う夫やお元日

心地よいテレビ疲れも新春の宵

目玉商品ばかり漁っている家計

食傷気味の虎憶面なく続く

床ばなれ出来ぬ五黄の寅の夫

高槻市 笠嶋恵美子

つれ添うて風になりたや春の風

鬼になる覚悟の顔が泣いている

ブレーキの無い自転車よ恋狂い

遠ざかる靴音しばし湯がたぎる

活造り妬心まざまざ箸の先

堺市 矢倉五月

愚痴言いに帰る実家の掘ごたつ

棚一つ吊って天狗の顔になる

パチンコの玉に夫の守り頼む

友の計に夫やさしくなりはじめ

喫茶店なじみでこぶ茶も出してくれ

羽曳野市 吉川寿美
たかが噂に溺れておんなというものは
聞き捨てならぬ噂に握る紙つぶて

佳人には遠く馬齢を積んでいる
石頭叩いて埒があくならば

滋賀県 久保和友

還暦の焦燥感へ冬の星

エチュードやしもやけもなく稚児の五指

六十歳を山小屋に来てホヤを拭く

薄月に雨の他郷は美しい

京都市 松川芳子

結局は我が身大事の御意見で

投げ銭がキラリ光って五十鈴川

来客の靴揃えてる孫が好き

親と子で意地張り合うて母達者

尼崎市 山田保蔵

迷うなら今夜ヒト晩待つてやる

ここだけの話を壁が聞いている

孤児たちも胸いっぱい富士の山人相で押し込められたふとん部屋

尼崎市 丹下玉子

コトコトと七草粥が煮えている

留守番電話声を残して旅で逝く

別荘の番人好きな絵筆もつ

一粒の仁丹嚙んでベルを押す

大津市 安田志津

仏間の灯今日は素直に詫びられる
連用日誌去年の今日を先に読み
出不精と出好きが結構丸く住み
編み棒との仲を不満の万歩計

京都市 森 川 春 子

伊勢海老も鯛も一息入れて箸
お年玉並べて中身改める

パソコンをこなす孫見て年明ける
添え書きの賀状は老いの身を案じ

桜井市 前 山 美恵子

蝶々さん春の足音しませんか
ややこしいことは忘れて春にする

声帯をなくした犬のアヒル声
初節句まだ欲のないケース離

雄踏の町で落ちつき取り戻す
実年とまだまだ活を入れられる

西宮市 松 本 一 郎

身だしなみ若づくりして孫と会う
孫を待つ妻ソワソワとふとん干す

年の瀬の慌しさの外にいる
夫に遠慮する年でなしグラス干す

守口市 結 城 君 子

十二時間ドラマ意地で見終るお正月
血統書つきの犬だが皿なめる

断ち切れと新幹線の窓が言う

大阪市 上 田 柳 影

新米が届き帰省を考える

皿二つあれば吾が家は事足りる

ツアーで行く旅なら耳栓忘れない

熊本市 黒 田 緑

静かさは妻の寝息にある安堵

ひらめきの嵐が過ぎた虚脱感

靴下に急かれて旅の朝を発ち

綺麗ごとならべて見栄をはる弱味

熊本県 高 野 宵 草

中流がひしめき合ってゴミの山

豪華なケーキ離婚の神も来て祝い

お互いに我慢して来た共白髪

掌になじむ僕の茶碗で旅終る 熊本市 北 川 一 進

なぐさめの筈が電話のもらい泣き

豆いくつ食べたと鬼も輪をかこみ

マークには弱い高値を買わされる

宴会の踊り自慢が平社員

岡山県 山 本 玉 恵

貸し借りも無うて二人の歩が揃う

美しい輪の中に母が居て笑う

心を包む紙が透き通って来るこわさ

待つ母になって雨の日風の夜

大阪市 山 田 妙 子

きついことあつけらかと言うてはる

疑いをふつくる為のガラス拭く

カレンター張りかえ部屋がかしこまり
年末に夫婦げんかの姉も来る

吹田市 井上照子

木枯しの道新月に人を恋う

ハッピーエンド知りつつドラマの筋を追う

当り年夢をひろげて書く賀状

揃わないリズムに堪えて夫婦坂

唐津市 相葉あき

御用納め初荷の用意迄も入れ

部屋部屋に白髪残して母は去に

足の裏見せて阿呆に成る踊り

裾野まで来て顔の無い富士に遭い

堺市 小西小雪

コーヒーのかおり漂う父の部屋

中流の暮らし増税おびやかし

電球を替えれば部屋も広くなり

フルコース少し気取って飲むワイン

堺市 桜沢あかり

和解するきっかけ探す昼の月

セールの足を叩いた棒グラフ

運のない椅子にも陽差し伸びてくる

看板を又塗り替えている不況

尼崎市 森安夢之助

山頂でありたけの声出しました

よく笑う奥さん達と旅をした

覚悟ならもう出来ている雪だるま

よくもまあ喋れるもんだ妻の客

兵庫県 脇田米朝

核心にふれると引込む膝小僧

背伸びして外すチャンスのない仮面

ナポレオンと仲よくなったホームバー

酒好きな医者ほどほどに飲めと言う

兵庫県 東浦砥代

色褪せたドレスに恋がまだ残り

逢うて来た余韻がひそと帯にある

踊らない夫になつてしまふ古稀

負けて来た肩へ冷たい故郷の風

岡山県 黒住美穂子

初春に巢立っておくれ千の鶴

元旦も母の部屋より般若経

風ときに慕情をつれて舞いもどる

実るまで愛を確かめ待ちつづけ

唐津市 浜本ちよ

満二歳母の淋しさもう見抜く

片言で母の憂いを慰める

水仙が日に日に伸びてつた枯れる

胃が痛む堪忍袋張りつめて

和歌山市 桜井千秀

相づちに引かれ身の上言いつくし

画廊出た余韻打ち消すクラクション

スクラップ溜まってどうする当てもなし

写経する区切り区切りに出る迷い

尼崎市 吉永伊三郎

孫に似たナースに老いを勞られ

先生を慕いし頃のアルバムよ

あやまちはもうしませんとどこかの碑

爪を切る音びくりと猫のひげ

尼崎市 鈴木良征

三ヶ日庄助さんの真似をする

核除けの絵馬をかける初詣で

人の上に人をつくったお立ち台

犬飼って夫婦の朝を浅くする

尼崎市 児玉歌子

方針も立たぬ訣れで喪が明ける

無い袖は振れぬと妻が素っ気ない

留守の間に嘘が半分バレました

来る来ないそんな女が一人居る

堺市 宮本かりん

正月の余韻夫とボーカーする

相槌を張子の虎が打ってくれ

天井にとどいたパパの肩車

孫の絵がピカソの弟子に見えてくる

竹原市 石原淑子

茶柱に揺れる心を励まされ

春光リタンポボいそいそ花支度

糞虫の不幸バッグに加工され

春や春合格祈願神頼み

鳥取県 土橋はるお

藁沓も来ているジゲの集会所

手の平に忘れぬように書いて出る

茶柱が立って夫婦の仲直り

坊さんがホルモン屋から出て行つた

河内長野市 大西文次

無理やりに飲ませた酒に世話がやけ

何でも聞いてくれそうな仏さん

御静聴感謝眠っておりました

長生きの秘訣を医者になずねられ

鳥取県 羽津川公乃

水澄ましくくる民話語りつぐ

めつきりと出不精になり愚痴がふえ

成仏を願うお経を拾い読み

冬眠の鉢に水やる深なさけ

旭川市 朝倉大柏

相槌を打って女は泣き上戸

雑草の根性お庭で憎まれる

無欲とはいっても年金待ち遠し

ムード派で付き合にくい三次会

鳥取県 さえきやえ

自分史にいくさばかりが幅をとる

白昼夢女は鏡ばかり見る

トリックがひとつ浮かんだしまい風呂

吹雪く夜の別れはいさぎよくしよう

新潟県 高野不二

名刺が切れ退職のタイミング

かぜ引いた妻にやつぱり飯炊かせ
叱られに行くネクタイもよって見る
お年玉出してる顔も満足し

岡山県 千原理恵

雛鳥が鶯そろえ泣いてます

うれしい出会い悲しい別れ冬の天

初笑い忘れて恩師の喪に服す

補聴器をはげまし柳友強く生き

出雲市 小白金房子

年毎に賀状がふえて嬉しい輪

奴舩切れて浮氣の旅に出る

宿題に母の力もためされる

踊りの輪抜けて気儘な子が一人

静岡市 渥美弧舟

吟行の友と弾んだ駅の朝

除夜の鐘聞き元旦の顔となる

三ヶ日折目正しい孫と居る

明日もまた孫と歌おうわらべ唄

吹田市 栗谷春子

初春の酒少し醒ましに初詣で

正月も終わり子供も叱られる

ぬぎ捨てた桜の幹に艶が出る

葉が落ちて成る程と見るさるすべり

弘前市 斎藤島

給料を呉れる机が有難や

子育てが上手な豚で売られない
パンだけを食う白鳥に人がして
火傷した指はコップに漬けておく

八尾市 松下蕉露

火の車廻る会社も年賀状

騙されて騙す手口を覚え込み

雄弁な男が書いた金釘流

騒いでる孫に遺影は笑いかけ

弘前市 真喜内 實

寅年の虎みな吼える初吹雪

それぞれの好きを点して趣味の友

讃美歌にお経と似てる節を聞く

間隔をとって夫婦の貌している

西宮市 秋元 てる

若嫁のはげしい言葉雪近し

ふらんこに仲間はずれがゆられてる

はずれくじ貰いも一度確かめる

代筆の礼状寒し君は病む

貝塚市 池田 寿美子

風花が慕情を遠くへ連れ去りぬ

夢ばかりふくらんでいる春炬燵

花暦信じぬ人も花が好き

人生のルーレットが廻る独り旅

高槻市 笠松 高子

縄のれんぐちを肴に老いふたり

恋の秘薬に副作用がきつい
冬籠り窓と窓とのごあいさつ
悪友がマージャン屋から電話する

広島県 田村新造

どどんがどん 櫓太鼓が春を呼ぶ
酒が好き人が好き今年も暮れる
火祭りの火の粉浴び浴び坂下る
シベリヤのこと唄はれる雪便り

出雲市 河原恵美子

ピエロにも悩みがあつて病んでます
ブライドももう捨てましたはなれ風
突然人のうわさ運んだくもの糸

大阪市 秋田茂

石三つ積んで金魚の墓とする
太陽を欲しがる冬のキリギリス
頑固なまでに天皇陛下の好きな父

米子市 小村てい子

冒険がしたくて傘は白いまま
大根の煮える匂いも真昼時
思い出のリボンを指に巻く少女

岡山県 小林妻子

行く年へ煩惱を消す雪景色
皺くちやの顔で八木節名調子
これでいいのか倅せな屠蘇を酌む

大阪市 田中節子

ワープロが知らない字まで書いてくれ
判で押したような明け暮れ二人きり
道訪うた京の少女のやさしさよ

芦屋市 上田佳秋

今日も無事肩を沈める終い風呂
ルンルンの姑が鍋底磨いてる
吹雪く夜家出した娘が戸を叩く

大阪市 亀井円女

家族の輪餌付の雀が今主役
欲ばりで日替りメニューの夢がある
不協和音でも編曲次第で音は澄む

羽曳野市 麻野幽玄

すぐ汚す軍手なれども干す飯場
どうせ寝込むテレビタイマーセットする
叱つたら後ずさりして泣く小犬

高槻市 芦田静江

牛若の声あどけない能舞台
湧き水に心満たされ月心寺
赤福に春の炭炎え初詣で

守口市 森川まさお

除夜の鐘鳴ったと孫に起される
福相な福娘から笹貫う
常夜灯神の存在信じ切り

寝屋川市 立床晴風

鬼の面外した父の戒顔

反省の度に大人になる気概
四つ折の札がくぐった縄暖簾

尼崎市 佐藤 美代子

住みなれて列車の音で刻を知る
本心を小出しにしているラブレター
鉛筆を無心に削る母を持ち

富田林市 田原 久子

漕ぎ出せば風にまかせる夫婦舟
雪こんこ丹後の里に機之音
男運掴みそこねてまだ独り

富田林市 松本 今日子

少しでも美しくと思うまだ女
美しい字を書くために筆洗う
本当は灯がほしい雪女

鳥取県 太田 幸枝

枯草を束ねて亡母の暖をとり
霜困いしても冬將軍に負け
ひな祭り孫の写真と共に来る

鳥取県 津村 八重子

白壁が歴史を語る城下町
あやまちを素直にわびる目に合う
霜の夜星もちかちか泣いている

泉南市 坂根 流水

冬鳥のうかが湖畔にひとり佇つ
病院を我が家のごとく闊歩する

点滴を受けつつ端唄口ずさむ

富田林市 片岡 智恵子

四季知らぬ美しい花嘘を秘め
松風が響き点前が冴えてくる
美しいワインの色に騙される

豊中市 小畑 よし子

カーテンを開けて独りのパンを焼く
女とは鏡の中で夢を追ひ
熱さまし飲んで二次会について行く

島根県 小田川 智重子

めんどろな事はごめんと席を立ち
ポケットはやり場のない手入れるとこ
お隣のかたぶつダンスの上手いこと

竹原市 岩本 笑子

子等の夢のせてやっこ風あがる
内またをさっさとブーツ追ひ越して
手は二つされど四人の子を育て

今治市 月原 つくし

黙りぐせついて無職の日が続く
つみ重ねやっとな夫婦の息が合い
辻に来て犬が迷わぬ印おく

岡山県 戸田 種子

ポーナスが出たと子からの宅急便
ぬれぎぬをきせられ重い石を持つ
北風が噂の種を消してゆき

榎原市 西 本 保 夫

エリートに椅子取りゲームだつてある
妻の出すアイデア可愛さにじみ出る

何色を出す気か妻の絵具皿

大阪市 堀 口 欣 一

東京に来て忙しい糞を垂れ
ある日わが住む町の番地忘れ

ふるさとへ来た日母校は日曜日

山口県 高 崎 雀 声

無人駅四季折々の花迎え

赤信号左右に車なく待つ子

電線が気になり風はおひられず

唐津市 中 山 ふじ枝

何時までも生きる気でいるブランタ

水子仏若気ですまぬ風車

秋茄子も頂きましたと嫁が言い

唐津市 児 野 今 子

逢い引きの前の食事は落着けず

裏金を積んでも医大出したがり

北国も春は来ますよ露のとう

高槻市 川 島 諷云児

願いてもう泣きません勝手口

叱られて四角に座る膝小僧

誘惑を振り切る嘘に迷いなし

鳥取県 福 田 あや子

赤頭巾父福々と大国相

白足袋を心の晴れるまで洗う

粕汁が好きな夫と寒に入る

大阪市 渡 部 さと美

背伸びして見ても帯にはなれぬひも

スピードの出ている独楽は花模様

喝采を博し華やき廻る独楽

島根県 堀 江 百 代

正月の手料理帰らぬ子の噂

この時とばかりに仲裁買つて出る

ふれあいの若さをもらう若返り

広島市 望 月 はるひこ

反省を持ち帰らせる旅かばん

ワンクッション置けばきれいな虹が見え

中流の面がローンで作られる

岡山県 矢 内 寿恵子

初詣石段走る孫走る

双生児口の軽い子重たい子

ボランティア一日を母として満てり

大阪市 稲 本 凡 子

北風が思い出連れて戸を叩く

手拍子のリズムで一曲歌わされ

友開店一周年

向い風に挑む女の意地があり

尼崎市 野 呂 昌 子

大掃除タンスの隅で金拾う
水だきの湯気の向うの笑い顔
よく効くと煎じぐすりを贈られる

豊中市 辻川慶子

暖かい部屋にインコとシクラメン
首振って妥協せぬ寅家にいる
初春のほんに静かな街の中

茨木市 堀良江

一日分のコーヒー沸かすひとりの日
英国製ひざ掛けに猫丸くなり
盆梅展香り冷たい部屋に居る

愛媛県 石手武

Vサインガッツポーズが鼻につき
呻くより手がない夜の水枕
五線譜からずれた鼻唄うたう妻

唐津市 筒井朴竜

元朝へ配る自転車吐息凍て
折込みの部厚さ拒む扉の隙間
事も無げ雪は深々すべて覆う

唐津市 浜本治幸

嬉しさは電話の声も弾んでる
ご無沙汰のお詫びで届く年賀状
同窓会忘れた顔が酌ぎに来る

指宿市 渡邊伊津志

園児の絵大人の見えぬものを描き

身勝手な話に神様起きて来ず
表には出来ないけれども嫁の知恵

尼崎市 古川幸次郎

独り言月がだまって聞いている
適当に呆けておくのも老いの道
釣糸に掛かった鯉に訳を聞く

吹田市 山田里子

針箱へ春の彩糸欲しくなる
絹糸をとくに忘れた母の指
お体を大事にしてと遠い嫁

新発田市 上鈴木春枝

赴任地の良さだけ書いた年賀状
隣の子だからチラつく親の影
背中から指示の小さな口に負け

唐津市 小峰邦子

二人だけ解る合図の電話ベル
正月の笑顔あなたにキープする
筆不精年賀もダイヤル廻すだけ

倉吉市 田中八太郎

ドライアイスが流れカッブル雲の上
恋に泣くのは女の限らない
樟脳の匂いが亡母を偲ばせる

和歌山市 森三枝子

初春にめでたい音で来る年賀
年賀状人さまざまのトラとなる

年金の財布がゆるむお年玉

富田林市 友 碇 雅 子

雪化粧のように老醜かくせない

美しき人を思いて夜もすがら

迷わずにお子様ランチ孫はとり

兵庫県 野々口 ゆう也

八十の初夢亡父に叱られる

春三日師走の疲れ出初める

下戸なりに美しく乱れてみたい日も

愛媛県 八 塚 三五島

どろんこのズック大物かも知れず

手袋を脱げばあなたが近くなる

指切りの好きな少女のきれいな瞳

富田林市 新 開 千代女

心配をかけてはすまぬと嘘をつく

コップ酒紳士の顔は消えている

好きな服着て出る時は弾んでる

吹田市 西 岡 豊

のっている女に酒を注いでみる

実年の火種煽って町の世話

白足袋がくるりと回る舞扇

青森県 波 た だ お

二人目のおめでたとある年賀状

その人が輝いている表彰式

信仰の岩木の山も人を呑み

孫に語る昔話に祖母がいる

年賀状先ず一枚は母に書き

クラス会カバンに薬入れて行く

青森県 福 士 ト キ

人生を賭けてみようかい男

筆跡は喜寿には見えぬ年賀状

御年賀の晴着の孫を見間違ひ

静岡市 青 柳 金 吾

黒幕に踊らされてるヤジロベ

ほどほどの感謝で暮す老夫婦

捨てかねて偲ぶ昔の虹の色

岡山市 中 嶋 千恵子

吉と出たみくじはそつと胸に抱く

事勿れ主義象牙の印を円う押す

賽の目の裏目で独り旅に出る

大阪市 藤 森 小雅子

梅の花咲くぞ咲くぞと喜ばせ

病みし友ホエミ見せて手を握る

静寂に堪えられなくて声を出す

西宮市 飯 森 泰 世

息子からボーナス貰って水入らず

車窓から見る一コマを画布にのせ

母の味たつぷり盛った三ヶ日

兵庫県 森 脇 和 子

鳥取県 乾 喜 与 志

添え書きにお迎えまだと書いてあり
老いの部屋賀状ひっそり訪れる
猫の目の前でカツオ節を削る

八尾市 鷺見章

腰痛の事も願うた初詣
昼の雨通天閣は未だ灯かぬ
定年を境に妻の目が変わる

出雲市 竹治 ちかし

母と娘の会話が弾む里帰り
里帰り父は語らず側に居り
反対をした顔も居る祝賀会

尼崎市 尾宮弘治

値踏みして婚礼の膳に箸をつけ
母に似た電話の声に惑わされ
賭けごとの嫌いな夫が居て平和

茨木市 井上盛雄

畳踏む安らぎのあるわが家路
語らいのぬくもり炬燵で夫婦酒
自分史を綴る毎日句の日記

藤井寺市 菊地繁男

不意の客その日のリズム狂わせる
千鳥足確かに家路へ向いている
水溜りあると知りつつ踏む不覚

鳥取県 横山房子

風雪に堪えた足跡ドラマめき

雪だるましもやけの手は弾んでる
さらさらと小川に聞いた夢が好き

大阪市 横山為子

年玉で足らぬ望みがデツカすぎ
喜びの眼が開きタルマあわて出し
嫌々に買った切符に義理果し

大阪市 井上白峰

無いよりはましと白髪に櫛入れる
一生を縛るダイヤを指に簪め
子等育ち巣箱に残る老い二人

大阪市 末永芙久枝

大声でカラオケ歌う調子取り
指先のリハビリ兼ねて折り紙を
武者轍虎が生き生き書いてある

尼崎市 小熊江美

肉付面の話は姑にふせておく
札束を拾った夢で怖かった
名案と耳打に来る悪友

呉市 蔵重成人

ほうき星地球の掃除頼まれる
古里の自慢話せぬ村を捨て
妻連れる旅なら長い旅でよし

大阪市 松岡久留美

新築の鉋のひびき辛思う
得難きは不調の時の妻の杖

老人会調子はずれの唄たのし

大阪市 今西静子

犬の目が媚びてるような年の暮

大阪の水にも慣れて舞扇

カーテンをひいて一年生の城

岡山市 松本元江

追悼の御霊へ白き菊の花

追憶の出会い優しき師の温み

雪こんこん主なき庭に降り積る

兵庫県 円増貞子

同じ齡ふと氣になつて書く便り

良い話なん度聞いてもあかず聞く

流れ雲明日は雨かと祖母の私語

米子市 大田みさと

好奇心流れを止めてみたくなる

箸箱の蓋が合わない空しい日

手づくりで贈る小袋夢いっぱい

米子市 宮本佳女男

大部屋の赦し貰えた喜寿の春

点滴の励まし受ける喜寿の春

童心に帰れば解決出来る筈

奈良県 和田萬里

お元日三日坊主の日記書く

正月は月がかわつただけのこと

堺市 山本半銭

離婚した二人それぞれ来る賀状

葉ばたんに春待つ虫がかくれてる

富田林市 池尾登美子

福娘まで戎さん花盛り

味みだけあちこちつまみ地下売場

大阪市 榊本路児

死ぬ時の星はきれいであつてほし

樂焼きに夫婦で寄せ書きするも旅

尼崎市 木下義嗣

粉雪にホームを出れば妻が待ち

ホークでは苦手なランチ箸で喰べ

岡山市 富坂志重

淡雪にあなたと書いて消して見る

病む夫の無理を探しに來た市場

河内長野市 植村喜代

若いからにせ物だつて美しい

バーゲンに女心をゆさぶられ

大阪市 野村八重

あの時の善意が結んだ年賀状

吹く風に調子にのつたやつこ風

西宮市 木村貴代子

水たまり空に浮んでゐる私

神の声聞こえるような山の朝

島根県 喜島ノブ

善人は今大声で話す人

亡夫を偲ぶ

母さんとわたしをいつも呼んだ亡夫

岡山県 池田半仙

半分は惚けた米寿も祝われる
羽布団軽いと思う二三日

島根県 岩田三和

しけるとき母は減法つよい舟
ふきのとう子供と遊ぶ水ぐるま

鳥取県 若林一止

親の欲子は迷惑の塾通い
人が見ているから握手だけにしよ

愛媛県 西山えつ美

赤字線車で陳情に行くおろか
寒がりがこまめに給油してくれる

和歌山県 北山凡太

小銭ある方が払ったコーヒー代
千里往く虎も老いては粗大ゴミ

唐津市 山口高明

君は風男の心弄ぶ
家長たる威厳は月給渡すだけ

佐賀市 米倉彩女

にがいお茶夫の小言と胃に落とす
雪女雪の汚れは口にせず

鳥取県 乾隆風

儲けが跳返るゴム毬を買った

頬匂う少女合格かもしれぬ

岡山県 後安ふさえ

真実の海にゆらいで藻の悩み
カラオケが寺から流れる三ヶ日

堺市 安西カネ

からおけも調子はずれて尚たのし
秋日和ただなんとなく立つ御陵

豊中市 一瀬福一

廻り椅子座れば敵の目も増える
時価とあるメニューに一寸手が出せぬ

守口市 若林市郎

風上げが無くて電線淋しそう
お年玉金額別のポチの色

富田林市 大沢三四子

近頃は美人も寿命が延びました
タンポポは踏まれて明日は強くなり

鳥取県 田村きみ子

停年は淋し職業欄覗き
日曜日の顔で男はデートする

八尾市 椎尾公子

切符又値上りと聞く定期券
嬉しい日も哀しい日も髪洗う癖

藤井寺市 福元みのる

土を踏み大地の呼吸じかにきく
民営をせよとばかりのまた値上げ

松の内来客を待つ孫の顔

調子づき日頃の十八番が先に出る

ハミングを持って子達が帰省する

酒に酔い話に酔って夜が明ける

気位の高い女で騙される

よく弾む同じ位の友が来て

待つことに馴れて吸い殻山に盛る

祝着を脱げば日頃の妻である

補聴器で余生喜ぶほりごたつ

合格に喜ぶ若さ遠慮なさ

久し振り着物着て見る初詣

古都税に黄門様もあらわれず

子の電話はずむ心の音も聞く

成人式帰らぬと言う娘の長電話

その度に味のことなる玉子焼

ラーメン屋本日休業風邪らしい

兵庫県 山崎敏子

鳥取県 西川和子

川西市 野村静雄

鳴門市 八木芳水

大阪府 宮下とし

京都市 小林英子

島根県 難波節江

島根県 菅田かつ子

今治市 山田宝保

乳貰いの姿で大師やを抱き
まだ直しますかと靴屋念を押し

削ること出来ぬ家計薄悲しかり

故郷に残るは山と川のみか

後から肩叩かれる待合所

六段の調べが流れお正月

朝まだき寒い散歩へ犬が呼び

初場所の予想焚火の人だかり

書く人の癖目に浮ぶ年賀状

ベル鳴って預かるだけの御歳暮

初孫が話の腰を折りに来る

一振りが数万円の支度金

始めから調子気にせぬのど自慢

コマーシャル調子の良さに見さされる

キャンパスに光と影が生きている

足なげてやつぱり畳の好きな国

紫のちと派手を着て初詣で

大阪府 山本炉齊

出雲市 小玉満江

高知市 北山竹萌

大阪府 喜多佐津乃

泉佐野市 真崎浪速子

大阪府 宇久はる子

岡山県 伏見すみれ

兵庫県 奥野テル

なつかしい日記の誤字に見る若さ

島根県 坂本雪路

知らぬ間に糸のもつれてゐる対話

運勢はよし虎年へ頑張るぞ

大阪府 多田せい子

ほめてやれば調子にのって歌う孫

つぎつぎと山削られて家となる

八戸市 島田昭治

定年は何か敗軍の将に似て

墓が好き恋しい女が眠るから

益田市 里本たかし

パズルから解いて日曜日をほぐす

元首相の顔がいじめっ子に見える

大和郡山市 岡田寿美礼

シクラメン燃える姿で春を呼ぶ

紅かぶら初冬を飾りふる里に

大阪府 大倉圭介

その電話誰かがとると切れている

家計費を削って酒量減らせない

大阪府 高森文子

娘に孫に伝え置きたいせち料理

万歩計調子合わせて初詣

泉佐野市 大工静子

百円貨拾えばそこは地蔵様

同病は相あわれみて話は尽きず

人並に生きてて送る親の愛

お年玉思わぬ出逢いに無理をして

岡山県 後安江山

吐く息と湯気の白さの大根炊き

我が家は寅が三匹揃い踏み

大阪府 川原章久

虎猫も年始に来たのか上りこみ

門松をバックに撮す晴姿

島根県 園山世似

えびさん残り福でもくださいな

荒れ庭もちよっと見直す雪化粧

富田林市 楠美子

時知らず音ばかり聞く昼下り

急カーブ調子がついて足を折り

大阪市 富岡温子

年の暮れ電話の声に身を案じ

床の間に南天の赤鈴なりに

奈良県 山村有佳

年賀状去年のメンバー皆揃い

松三日早くも虎は気炎上げ

岡山県 杉本伊久栄

海の中一山削り街にする

街角に調子外れの慈善鍋

大阪府 北脇清治

ハレー彗星もしやもしやと空眺め
合格祈願天神さんを梯子する

島根県 森山英子

雪道を転ばぬ声を掛け合つて
降りしきる雪が隣を遠くする

高槻市 大池好古

鉛筆を削る役目はおばあさん
新聞を読んで話の種にする

大阪市 朝田晃世

ビスタカー子供の夢をのせて行く
引受けて調子にのつた誘い舟

岡山県 牧野秀香

乾杯の音頭に親父の眼に涙
くすくすと笑う小声が気にさわる

兵庫県 伊沢午郎

エンジンの調子出すぎて事故起し
御歳暮に頂いた鏝節削らされ

兵庫県 山崎亀男

年賀状去年も友が一人逝き
新年会幹事が先に唄わされ

新宮市 船越正

悪口が本音で建前批判する
駅前の案内板が大きすぎ

豊中市 額田明吉

出初式七色しづく凍りつき

寺藪に虎より人がむらがれり

広島市 花田繁子

お調子に乗りすぎ引くに引けぬ破目
餅つきは男の力の見せどころ

高知県 山下登舟

新築の御幣はためく初日の出
百薬の長と理屈をこねて吞み

和歌山市 三谷周三

飲む程に話題の主は輪が出来る
温泉で手足を伸ばすだけの老い

大阪市 北田秀月

エンピツもよう削らん子にだれがした
都会では何にも削るものが無い

ジュニアの部

枚方市 二宮光子

冬休み正月明けはデブツちやう
貝がらは波をつたえて三ぜんり

枚方市 二宮正彦

お正月おせちだおせちだはよ食べよう
かんげきのお年玉がついにきた

桜井市 前山たかのぶ

いもうとはぼくのせわやくおかあさん
おとうさんといっしょにあるくとしんどいな

桜井市 前山いくみ

わたしはねりんごのほっぺをしています
おかあさんりかちゃんのふくつくつてね

(4歳)

愛染帖

橘高薫風選

大寒をゴホンゴホンと人通る
雪穴の中で地酒が美味くなる
川西市 野村 静雄
ちっぽけな科学にロマン毀される
長谷寺へ牡丹を愛でるだけに行く
尼崎市 西村 かすみ
看板屋二科に通った事も言い
今になり形見の眼鏡合ってくる
笠岡市 木山 遠二
寝たきりに家来のような女房どの
猫はまめなか君はどつたと見舞状
富田林市 岩田 美代
しがみつく過去形の美しい彩に
自分史に重なる重いばたん雪
富田林市 藤田 泰子
熱い吐息が思いと思ふ雪女
潑刺とスキ一の好きな雪女
近江八幡市 前川 千賀子
裸木今朝三十羽居て雀の樹
寂しくて戦さしているのは詩人

一掛ける一が好きです人嫌い
徳ばるる人待ついるすみれ草
和歌山市 西山 幸
愛ゆえの強気弱気を許し合う
忘れたいことは忘れて春を待つ
岡山県 池田 半仙
除夜の鐘虎の咆哮かも知れず
聞く方はとてもシヨックな軽い嘘
尼崎市 春城 武庫坊
杭をうつ水は怒りをためている
神よりも女の言葉信じよう
吹田市 後藤 火鳥
年以上に酔って悔いあり忘年会
古くとも吾が青春の歌がある
豊中市 上田 登志実
娘に家を継がせる方が平和です
筆をおき初鶯に耳すます
大阪市 小出 智子
だからトイレの花は萎れていられない
コップ酒男は今日も幸せだ
岡山県 土居 耕花
ロボットの走った事は聞いてない
伊丹市 樫谷 寿馬
ダイコンの粗煮合宿の猛者囲む
八尾市 松下 蕉露
ボスが居ていじめがあつて養老院
藤井寺市 福元 稔
学歴はないが学習歴がある
米子市 八木 千代
受話器からうつった風邪と思いたく

胸襟を開いた酒は琥珀色
吹田市 西岡 豊
家庭科でカレーを作る賑やかさ
今治市 矢野 佳雲
趣味の会道を説かれてうつたえる
唐津市 仁部 四郎
しよきしよきと米を磨く音楽の水
寝屋川市 岸野 あやめ
ひとり去りめつきり寒いおまごこと
鳥取県 新家 完司
菊人形武蔵はいつも跳んでいる
西宮市 草刈 墮駄
続かない日記憂いが少しある
鳥取県 西村 早苗
水割を覚え男の酔いを知る
大阪市 亀井 円女
なにやらんなじり固き父の朝
弘前市 波多野 五楽庵
間しめたお寺の庭に雪つもる
守口市 森川 まさお
寒椿ばかり真つ赤な安楽死
名古屋市 越村 枯梢
握り箸愛が重荷になつていく
米子市 政岡 日枝子
だれよりも女でいたい紅の櫛
高槻市 笠嶋 恵美子
焼ばっくいをいつも抱えている熟女
鳥取県 福田 あや子
さんげする事もない身でさびし過ぎ
高槻市 河瀬 芳子

初釜へ仕立おろしの顔ばかり

笠岡市 松本忠三

寝たきりの柳師の祈願初詣

高知県 曾我部裕

資料館で逢うどろどろの鉄かぶと

鳥取県 土橋 螢

掌をかざすと牡丹雪になる

岡山市 川端 柳子

小豆がゆコトコト亡母さんいまどこに

西宮市 奥田 みつ子

方円に従わぬ水若さかな

広島市 望月 はるひこ

尾軀骨昔尻つばがあった汗

小松市 小森 靖江

雪霏霏とひとり暮らしをなぐさめる

佐賀県 寺中 三枝子

人妻に還ると深い霧が晴れ

岡山県 小林 妻子

文衛氏を悼む

道しるべなくした籠の鳥たちは

岡山県 山本 玉恵

一語一語寡黙な亡師の語の重み

岡山県 千原 理恵

かくれんぼも帰らない人を待つ

岡山県 松本 元江

師の声が聞こえるような春の風

寝屋川市 宮尾 あいき

独りにも慣れて独りるを思わない

松原市 小池 しげお

コスモスの最後の花は壁に咲く

宝塚市 丸山 よし津

美しく寂しく古いぬ屋敷町

川西市 松本 ただし

ふる里をふたつ背負って四十年

羽曳野市 麻野 幽玄

二人なら二人の温さに和む部屋

鳥取県 さえき やえ

冬の天高々とつく桐のこぶし

岸和田市 芳地 狸村

赴任地に鞆一つの軽支度

島根県 小砂 白汀

甘言につられて開けた玉手箱

仙台市 川村 映輝

甘党の会長辛党氣にくわす

唐津市 浜本 ちよ

姉妹げんか被害者ばかり叱られる

島根県 堀江 芳子

竹踏みのおにぎにさせる雪しきり

米子市 小西 雄々

フォーカスにねらわれるほど出世せず

高石市 浅野 房子

如才ない言葉に本音吐かされる

益田市 里本 たかし

雪になる朝も隣の笑い声

岡山市 井上 柳五郎

ジーパンも洪皮むけた艶を秘め

大阪市 渡部 さと美

年老いてやはり過保護はいやと言ふ

茨木市 堀 良江

誰からも顔寄せられて紅の梅

岡山県 岩道 博友

口数を減らして段々きつい言

岡山県 岩道 博友

喪の家へ賀状に替えた寒見舞

島根県 榎原 秀子

自立する巣箱を母は抱きかかえ

米子市 小村 てい子

慰めの言葉欲しい日髪洗う

岡山県 黒住 美穂子

離婚話グツグツ河豚の肝を煮る

島根県 板垣 夢酔

星空へ競って伸びる杉木立

平田市 久家 代仕男

雪三日白装束の鬼に会う

米子市 青戸 田鶴

脱げばきつと情にもろい鬼の面

岡山県 清水 悠貴子

挨拶を会釈で済ます雪の道

西条市 片上 明水

仏法を逆手にとって京の寺

大阪市 北勝 美

とつときの人に最後に書く年賀

寝屋川市 堀江 光子

お陽さまに愚痴は届かぬ雪積る

島根県 堀江 正朗

振り向けば葛の裏風五十坂

唐津市 筒井 朴竜

出なくても一人二人の敵は居る

唐津市 田口 虹汀

諦めを強いる天寿の言葉尻

唐津市 久保 正敏

吟詠も端唄も唄えぬ喉になり

唐津市 浜本 義美

山口 高明

献金の裏を読んでる達磨の目

愛媛県 石手 武

平松 かすみ

お日様の顔がやさしい水鏡

竹内 寿美子

こんぶ茶をふき乍ら飲む恋疲れ

三宅 ろ亭

三浪は鍊金術を身につける

田中 亜弥

都市砂漠空気が樹々も赤くなる

信本 博子

日の丸はやはりわたしの好きな旗

伊藤 春子

秋の風心の奥でうずくもの

上江洲 勝子

除夜の鐘眠くない子とねむたい子

田中 隆二

人生のバックオーライ効かぬ歳

岸本 木魚

実年と言われ出る顔ひきしめる

原 宵明

女丈夫悲劇なくさんもつている

江口 渡

ゴルフ場の青は自然から遠し

山川 克子

お互いに一歩手前で止めたまま

川島 颯云児

なにげない皮肉脳天唐竹割

相葉 あき

裾野迄来て顔の無い富士に遭い

相葉 あき

和歌山市 山口 三千子

奥田 満女

牽制球夫の策で裏をかく

茂理 高代

ラッシュです駅長さんの白い髪

田中正 坊

霏々と降る夢を積むよに白く降る

田中正 坊

残照の化粧槽に悲歌の舞い

田中正 坊

杭打てば空気の叫ぶ音がする

田中正 坊

初春の絵にひと彩足りぬ絵の具皿

津雲 一

六畳の雑魚寝もたのしき帰省子

月原 つくし

酸欠にならないためのすきま風

さよ子

いやだった祖母そのままにわが姿

朝倉 利義

入院に見栄がさびしい一人部屋

古野 ひで

今一度座り直した除夜の鐘

行天 千代

見送れば同じ思いか振り返る

額田 明吉

初詣で神様より星占い

島田 昭治

無縁塚どんなドラマの人棲むか

村新 造

床の間の虎の絵孫は近寄らず

桜沢 あかり

さりげなく積み残された落ちこぼれ

倉敷市 藤井 春日

定退は近し小唄でも始めよう

兵庫県 脇田 米朝

障子越し日射しに溶けた朝寝坊

守口市 結城 君子

藪こうじ街に見つけた市場籠

弘前市 真喜内 實

耳さとく立てて楽しく老いてます

和泉市 岡井 やすお

でしゃばらず気後れもせぬ老人に

牙ヶ崎市 山上 元孝

過疎学級ストープ囲みいじめない

唐津市 中山 ふじ枝

厨より母娘でハミング早春賦

唐津市 中山 ふじ枝

投句先 千560

豊中市中樫塚三丁目13-15

橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「かばん」 選者 橋高薫風

締切 3月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 3月23日(日) ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 同人吟 —

秀句鑑賞。

— 前月号から —

小出智子

色々あつて師走の喫茶店

岩田美代

複雑な内容をさりげなく詠んで、隙なくまとめられている。苦勞人の一面を覗かせ、その場の情景が手に取るように思われる。この場合、珈琲店でなく喫茶店とされたところが一層味わいを深くして、落ち付いたベテランの作品。

コロンボのコートを軽く見てしまふ

本間満津子

この句を読んだとき、してやられたノと思つた。お眼がわるい作者の集中力か。それにしてもコロンボのよれよれのコートは立派に演技をしている。洞察力の素晴らしさ。

少々は酒も薬と言つたかな

松本忠三

平凡な見付けを非凡なものとしたのは「かな」である。自問自答の末、自身の都合の良いように解釈しようとする人間の弱さをつま

く表現されている。

寒波続々油断のならぬゴルバチョフ

谷垣史好

上層の気温がマイナス四十何度という寒波はシベリヤから押し寄せてくる。折しもテレビの画像はゴルバチョフの厳しい顔を写し出す。その面構えを見て、誰しも寒波続々の思いを深くしたものである。

男ばかりで雨の京都もないものだ

小島蘭幸

冬の京都は底冷えがする、そこへもつてそは降る雨、苦り切っている男たちの顔が手に取るように想像される。「ないものだ」がこの句を引き立てている。下五の大切さを感じる。立喰いのそば通天閣を見てたべる

山下みつる

大阪をこよなく愛している一人であろうか、通天閣回りや、ジャンジャン町が好きな川柳家が多いと聞く。男たちにとって灯台のようなものかもしれない。大きな建物が建つて私の家からは通天閣が見えなくなった。

平泳ぎ見せる油断のならぬ人

大林曲ん手

相手の言葉や動作を「平泳ぎ」と見たところにこの句のポイントがある。これはまさしく男の眼が捕えたものだ。

意気込んで春になればと書く便り

佐藤藤子

春を待つ期待感がリズム良くまとめられている。女性らしい感情の迸りである。いい人はいっぱいいいるが人の妻

田中正坊

誠実であり冗談などお聞きしたことのない作者にこんな句が書けるとは、川柳とは楽しいもの。まだまだ早いのに奥さまを見送られてやがて三年、旅と川柳一筋に生きられ、こんな句を見せ下さるようになってほつとしている。

馬鹿になろうバカになろうと米をとぐ

嘉数兆代賀

一つの思いを畳み込んで意味を深くしている。「米をとぐ」は明日のためのささやかな希望を得ようとする動作でもある。

責任は持たぬ張り子の虎の首

西山幸

張り子の虎の何とも惚けた様子をつましく捉えている。首を振る虎をして「責任は持たぬ」と見たところ確かな川柳の眼だ。

雪が降るから赤いシャツ着てみよう

土橋螢

何日も雪に閉ざされ、雪で苦勞をなされる地方の方には申し訳ないが、やはり雪は人の心を浄化させる。雪が降るとして赤いシャツを着てみたいと思う、男のロマンなのである。

手初めにネクタイの色赤くする

榎本吐来

ネクタイというのはある程度、その人の職業や性格を表わしていると思う。地味な人は余程のことがない限り派手なものには抵抗があるようだ。「手初めに」に意味があつて心の動きを表現している。

◇女性同人アンケート

“男が立派に見えるとき”

担当・樫谷寿馬

西宮市 奥田みつ子

「男が立派に見えるとき」という題を頂いて考えてみると、人が立派に見えるのにあまり男女差はないように思う。

立派に見えるのにもいろいろあるが、やはり仕事でも趣味でも物事に熱中している時が一番美しく立派に見える。特に自信を内に秘めて体当たりしている姿には心打たれる。そして一生懸命してきた事が間違いと気付いた時、または間違いを指摘された時に、悪びれ

ず素直に謝り、訂正することが出来たら立派だと思ふ。その場合、女性より男性の方が出来にくいようだが、それを企まずして出来る男、出来る時には素晴らしいのではないだろうか。

女性は昔から言い訳が多いとされるが、ブライドの高い筈の男性が一言の弁解もせず、潔く謝る時には文句なく拍手を送りたい。

人が立派に見えるためには、自分もまたその立派さを見いだすことの出来る眼と心を養わなければ……。

米子市 林 瑞枝

福寿草の花開く正月三日、かつての教え子達の招きで、同期生会に出席した。34名の50歳というお顔には、かすかに幼な顔が漂い、拍手で迎えて下さったその嬉しさに、「皆様は私の人生の青春でした」と有難うをくり返した。昭和23年に小学校を卒業して、今ではそれぞれ別の分野でお偉いさんになっていて、多彩だが、胸に六年A組の名札を飾ると、一斉に12歳の少年少女に還り、酔う程に、互いに手を握り、抱き合い語り合い、昔話を花を咲かせた。「先生に叱られバケツを持つて佇つ

た」「五人で廊下に坐った」「怠けた罰に雪中を裸足で走った」とからから笑い合うその辛かった思い出は、昇華して懐しさばかり、「先生は僕達のアイドルだから、いつまでも若くて綺麗でいて欲しい」という名刺には東京、大阪、名古屋、神戸に支店を持つ会社取締役とか、男が立派に見えるのは、友情の美しさと胆つ玉の太さを感じた時と思います該如何。

大阪市 西出 楓 楽

もちろん、給料袋を手渡してくれる時の夫。立派というより、それはもう神々しくさへ感じられます。まして、財布に秋が深まり、冬の寒さを感じているとなればなおのことです。その一瞬、ファンファーレが高らかに鳴り響く錯覚におちいり、私はうやうやしくこうべをたれ、両手を高くさし出し、給料袋をおいたいただきます。

夫は真ちゅうねじ製造業の三代目。ちっぽけな会社ですから、給料は銀行振込でなく、明細書もしっかりペン書きです。経営者といっても、好不況の波に一喜一憂しながら、作業着でみんなの先頭に立ち、真っ黒になって

働いています。

これを「家族を養うのは、男として当然の義務」と片づけてよいはずはありません。袋の中味いかにかわからず、せめて態度だけでもおもしろく受取らねばなりません。

「えーっと、次の給料日まであと何日やっとなああー」

米子市 八木 千代

男にくらべて女が劣っていると思いたくないのですが、男の人が立派に見えてしかたありません。たいていの男の人は生れてからずっと風の中で生きてたいへんないくさを凌いで来ていることに違いないからです。痛くてたまらない苦の、それも現在も増えつづけているはずの矢傷に耐えて、はるかなものを追いつける高い樹のような姿へ讃嘆の眼を送らずにいられません。

しかも、風にさらされながら長い戦いで得た蓄積を惜しげもなく後を歩くものたちへ教えようとして下さるとき、そんな深い尊い視線に真正面に向え合えたとき、男って素晴しいなあとの底から思います。

結局、男であれ女であれその人に内蔵され

たものか思いやりまで加わって溢れるとき、男には男の、女には女の美しさが光り輝くのではないのでしょうか。

富田林市 藤田 泰子

私は人とおつきあいする場合、あまり男とか女とか意識したことがなく、世の中には、自分には出来そうもない冒険や、善行、勇気ある行為等々、いつも人様が立派に見え、劣等感に苛まれている私です。それが男の方であっても、女の方であっても、人間として立派だとは思いますが、特別男の方だから、女の方だから立派だと思ったことはありません。

大阪市 津守 柳伸

理容「男まえ」を経営しているちっぽけな店の女主人でございます。父母を早く亡くし四姉妹だけで育ち、男性相手の商売とはいいながら「男」についてはまったくの無知で、今日までまいりました。ユニークなテーマが舞い込みまして、改めて男性を研究しなくてはならなくなりました。私の大好きな句に、

年上と寄り添ってゆく傘の内 麻生路郎

ことさらに雪は女の髪へ来る 岸本水府

夫婦にも約束がある花時計 香川酔々

女性へのいたわりと優しさがほのぼのと伝わって来ます。が「立派に見えるとき」に困

って終うのです。月並みですがやはり頼母しい男性、仕事に燃える情熱的な姿はとても魅力です。女は女らしく男は男の中の「男」であって欲しいのです。男性の皆様、より一層奮闘努力をされまして仕事に家庭にハッスルされますことを切にお願い申し上げます。

尼崎市 奥山 美智子

いつもお正月になると放映される人気映画「男はつらいよ（渥美清主演）」を見て、一人の男の生き方に感動を覚えました。

映画での会話は、聴力障害者の私には全然聞こえません。達者な演技から男のつらさがジーンとしびれるほど伝わってきます。子守姿や市場かごをさげた姿は、つらさを強調させるためでなく、ユーモアを引き立たせるための寸景であって、ほんとうの気持は、ぐっと押さえてあると思います。それが一層見ている人の心を打ちます。「トウさんのよう

「男」がこの地球のどこかに一人ぐらいはいようという感じがしてなりません。どんなつらさにも耐えられるトラさん、こんな人こそ立派な男ではないかと、私はつくづく思います。

男はどっかりとした大樹——頼れる樹であらねばと思います。弱そうに見えていて、みんなから頼られるトラさん、すばらしいですね。私の立場をいつも尊重してくれている主人と、トラさんの姿と影が時おり重なってくるようです。

和歌山市 西山 幸

それは、「寛いところで女をいたわってくれるとき」の一言に尽きると思います。そのためには、何時も男でなければならぬし、男であるという誇りを持つていなければならないません。仕事に根性がなく、いつもだらだらしていて、心身ともにゆとりの無い男性には、女性をいたわる気持などあろう筈がないと言っても反論はないでしょう。

いたわりを受ける女性側にも、これは責任のあることですけれど。

上手にいたわられて、あくまでも男は男、女は女を生きたいものです。

女は弱者です（と私は確信しています）男は、黙って俺に従いてこい。」と言える力と誇りを持った雄々しい存在であって下さい。そして、寛いところで、この弱者を上手にいたわって下さい。

八尾市 宮西 弥生

随分難かしいテーマをいただいたものである。個人差との見解の相違によって、立派さが異なるように思われる。

一個人として男を見た時、立派さにはお眼にかかれないが、むしろ私には可愛い男としてうけとめられるのが当世の男の造形になっている、と。

昨今は、女の方が強くあり過ぎる所以で、いみじくも世の男達がその引き立て役としているのではないだろうか。

私の職場も否、日本社会はまだまだ男の社会である。だとすればやはり男の方がハンディが上になる。

辞書によると、立派は非の打ちどころがなく、完全な形とある。が強い女をどこまでも強い立場に黙認しているのが男である。現代の女性はいくまで出来ぬ。強くならず

たから。つまり「立派とは、寛容な心で相手をエスコート」する男のことであると。

尼崎市 春城 年代

今まで私は、男であり女である以前に人間としての立派さが、たいせつだと思ってきました。勿論、性の違う男と女は人生の大切な潤滑油で、その意味では男女が同一であるとは思っておりませんが。

そんな私がある日、テレビニュースで、大阪大学細胞工学の谷口教授が癌の治療薬の開発で成功しアメリカのハマーシオン賞を受けたことを知りました。この度、立派な賞を頂かれて教授は何か一番うれしく思われたかとのアナウンサーの問いかけに、故郷の有田市に招かれて講演をした際に八十何歳の老婆の質問に対して解りやすく説明をした涙を流してよろこんでくれた、それが一番私にとってうれしいことだったと言われた。その言葉が私の胸を強く打ちました。今世紀において世界的な研究を成し遂げた壮年教授が故郷の一老婆の感激を一番のようこびとされたことに、人間として男としてとても立派な方だと尊敬しました。

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

宮西弥生

人肌の言葉が温い冬の街

藤井高子

真情のある暖かい句である。この句を生かされた「人肌」血の流れ、情けの厚さを素直に受けとめている。凍てついた冬の街でなく常に人間関係には欠かせない言葉を交したく思ふ。

あやまちを消す洗剤を買いにゆく

鶴久百万両

聖人君子では、この世はあまりにも無味乾燥。人間らしくあやまちを犯して救われてこそ人間ではないでしょうか。洗済で汚れが落ちる昨今を実に面白おかしく笑つちやいます。

お茶こぼしてから緊張がほぐれ出し

宇野昭代

新年の初顔合わせの席でしょうか。一瞬緊張の雰囲気が見られた時にお隣りさんが粗相をした。途端に眼と眼が出会って笑いが洩れる、よくある事です、こつした茶目つ気。

いくつになってもほしいですね。
夫の手の中で風など知らずいる

大川幸子

危険な風は知らないでもよいが、世間のいろいろな風を体験してゆくのも二度とない人生に知っておいてもらいたいですね。素適なそんな旦那さまにお会いしたい。
天と地と人を素直に信じたい

井上照子

男ならきつと大物になれそうなの。でも女性でこんな力強い発想に拍手して次の選挙に立候補させてさしあげたい。川柳人は、ややもすると素直でない場合が多い。素直では作句が出来ないのかも。

影法師

尾宮弘治

壮烈な感じの句。人生八十歳と決定づけられている現代。むしろ男性より女性にふさわしいと思ふ。二度と生れて来ない人生を思いきり生きて悔いのない足跡を残す。きつと影法師も迷わず見送ってくれるであらう。

賽銭の音で神さまこちら向く

山田保蔵

えらい世の中になりました。それに何んとユーモアのある句でしょう。人間だけではなかったですね。とうとう神さまにまで。これからは、何を信じて生きたらよいのでしょうか。

あんまり身勝手な神頼みの多過ぎる私達の責任なのかも。

むしろくしゃに蹴りたい石が見つからぬ

脇田米朝
石を蹴って済むむしろくしゃならまだ救われる。悩みを受け止める支えがないばかりに人間の弱さがある。だから身近な者を愛し、人という字のように互いに支え合って生きねばならない。石がなくてももう大丈夫。

運のない手に馴染ませた軍手干す

月原つくし

運のない手と、軍手の関連性はどこにあるのでしょうか。運、不運はあつて当然。運が悪くないでとんでもない。

運のよい人のどことが立派なのでしょう。型だけにとらわれず、考え違いを今すぐに改めて、健康と仕事と家族に恵まれた今を感謝して、このへんで熱燗でも一ぱい如何でしょうか。

雨だれの今日の指揮者はだれですか

門脇晶子

含みのある句ですね。雨だれはショパンの名曲でした。幾星霜を経た作者は、ふと学生時代をなつかしく思い出されたのでしょうか。

作者の胸の内、まだまだあかあかとロマンの灯が。

ポケットの穴つくろえば愛こもる

真喜内 實

折角の成し得た愛。もう決して離してはなりませぬぞ。風も通さぬほどにつくろったポケット。キメ細やかな作者の真情でポケットが燃えない程度にお願いします。

初歩教室

題——種——

阿 萬 萬 的

今月の課題「種」について辞書をくつてみますと、

たね「種」(名) (一)草木のはえるものとなるもの(二)果実のさね。核、(三)動物の発生するものとなるもの(四)ちすじ(五)起り(六)製作の材料(七)準拠すべきものと(八)汁の実とあり、種のついた熟語として、種明かし、種油、種板、種芋、種牛、種馬、種下し、種紙(蚕などの)種変り、種違い(この種は胤の字が本当かも知れませんが)種切れ、種付、種取、種本、種蒔、種物、などが記載されていました。

このほか「しゅ」と読むものの中に種別、種族、種痘、種類、人種、良種、品種、変種、雑種、異種、などがあり大変なものでした。だが川柳のネタとなると手品が多かったようです。その中から

種明しあの手捌きに要る年期 悦子
種明しせぬとわざわざ念押され 周三
種明しするマジックは誰も出来 兼治郎
だがそう簡単にはゆきかねるのでは。

手品師が種明かしする歌老会
子の手品種は判らぬ顔で見る 國雄
金吾

その次に多かったのは元近鉄の鈴木啓示選手
の草魂じやないが、雑草の力強さを詠んだ句がありました。

雑草の種を試すかアスファルト 克子

こぼれ種咲いて見せたよ意地の花 芳水

一粒の種が思わぬ花咲かせ サワ子

陽の恵みこぼれた種がよく育ち 八重子

アワダチ草嫌われながら種こぼす 高代

雑草の種は原爆にもめげず やすお

知らぬ間に花が咲いているこぼれ種 よし津

来春へじつと堪えてるこぼれ種 実男

上五を「来る春へ」と読みたいですね。

誰だったかの句に

「春謳歌して風媒花虫媒花」がありました

風に乗る冒險好きな草の種 里子

タンポポの種に自由な空がある 克子

繁栄を風に任せて飛ぶわた毛 愛子

(独立へ風媒花の種風に乗る)

ふうせんにむすばれ種は青空に 登美子

(風船で善意の種が空を飛ぶ)

また種は私達の暮しに色を添えてくれます。

一坪の農園楽し種を蒔く 明吉

ペランダを一色にする種を蒔く たかし

(一坪の庭花にする種を蒔く)

いつも花ある様に種蒔く妻の庭 保夫

(花の種蒔く時妻にもある若さ)

景品の種が買わせた土と鉢 春枝

川柳塔社常任理事会 (2月1日)

出席者 葉・薫風・紫香・形水・太茂津・敏
柳宏子・萬的・文秋・白溪子・杜的・雀踊子
重人・凡九郎・鬼遊・天笑・笛生・正坊・小路・二三・武庫坊・史好

《議事並に報告事項》

▽新春おめでとう会の日(西尾菜主幹が中島生々庵名誉会長を見舞われ、その近況報告があり、お元気に過ごされているとのこと。
▽故太田良子さんの遺句集が九月発刊を目標に着々準備進行中と薫風氏より報告。
▽一昨年の中国(上海・蘇州・桂林)の旅が好評で、ぜひもう一度との希望に応え、今年の秋、中国旅行を行うことになった。正坊氏よりアウトラインの説明があり、詳細は逐次誌上で発表する。

■3月の常任理事会は1日(土)

お孫さんにせがまれてですか。
封筒に絵も添え入れる花の種 通子
(封筒に絵も添えのこす花の種)
郵便貯金パスデー忘れず花の種 寿美子
(パスデー忘れずくれた花の種)
袋の絵あまりに素適で種を買っ 稔

(袋の絵につられて花の種を買う)

だが種もバイオテクノロジーとかで

種無しのは喜ばれるのは果実だけ

(人間のエゴ種なしの実をつくる)

種なしはどう困るのはどうかも知れぬ

種なしにされてぶどうが泣いている

種のある西瓜の方がうまい気が

(種なしぶどう神様怒るかも知れぬ)

温室アームへ種の独り言

(温室アーム種に自由のない育ち

オートメで蒔いた種から規格品

バイオテクに種を託する新世紀

遺伝子組変え神にそむいた種が出来)

種にもいろいろ…、こんなのも

土のいらぬ種が厨で水を恋い

四季のない造花に種が作れない

(貴公子に似た造花には種がない)

菩提樹の種に教主の徳しるぶ

(菩提樹の種有難き数珠となる)

話の種、噂の種も川柳の題材にはよく上り

ますね。

元船長話の種には困らない

(話の種元船長はよく笑い)

失敗が話の種になっている

(話の種になる失敗は笑うて済み)

話の種持ち寄り仲間の輪が温い

(話の種つきずいりりの火は赤く)

豊

房子

八太郎

新造

豊太

やすお

凡太

穂

春枝

よし津

喜代志

千代女

兼治郎

喋り好き話の種を蒔きに行く

お人好し噂の種を蒔いて行く

もめる種撒きちらかして知らぬ顔

(噂の種撒き散らかしてのお人好し)

刻流れ噂の種が風に舞う

(風媒花噂の種が風に飛ぶ)

大事に温めていたい火種、燃えては困る火

種など世の中はいろいろですね。

スキャンダルなくては困るめしの種

(デッチ上げたネタも交って週刊誌)

まだ燃える火種をもっている熟女

燃える女消える火種を掻き探し

(燃える女に罪な火種が残ってた)

ほのかなる種火守って寡婦に生く

(ほのかなる種火が軽い罪つくる)

お互いに火種をのこす夫婦仲

(少々火種があつてよい夫婦)

はじくられるかも知れぬ種今日も蒔く

(はじくられる期待で火種を埋めて置く)

同級会火種が一寸温くなり

燃え上る火種を抱いて寒椿

ロマンスの種火を抱いて北の宿

許されぬ種が芽をふき痛む傷

貧しくも心の火種暖く

火種は火種でも本当の火種の句も。

書き初めに手あぶり火種掻き廻し

(書き初めに火鉢の火種掻き廻し)

最後はいろいろの種で締め括りましょうか。

凡太

輝月

白峰

寿子

通子

実男

八重子

サワ子

姿洋

房子

金吾

房子

輝月

章久

寿美子

明吉

一つぶの種が家族の目に負けて

幸せも苦勞の種も子が恵み

(苦勞の種も色々あつて子が育ち)

争いの種この世には金があり

大臣の椅子同士討ちの種となり

(大臣の椅子が派閥の種となり)

航空事故種はたしかに蒔いてあり

(航空事故種はたしかに蒔いてあり)

福運の種を貰いに初詣で

良縁へそここ種を蒔いておき

(良縁の種にと写真まいておき)

形変え種類だけ増え同じ菓子

(同じネタ名前を変えただけの菓子)

種切れになったクイズの模様替え

(種切れになったクイズの模様替え)

裏のない孫の仕種に眼を細め

種も仕掛もない鉢巻を父が締め

種明かする迄もない胸の中

執着があつて蒔けない柿の種

一粒の種を私に蒔いた人

わたしの掌に明日を育てる種を播く

種を浸けると村に春の光

題「技」 3月10日締切(5月号発表)

「友達」 4月10日締切(6月号発表)

宛先 〒598

泉佐野市中庄一〇八一九九

阿萬 萬的

豊

方子

昭治

昭治

八太郎

悦子

繁男

周三

露芳

國雄

たかし

保夫

博子

博子

寿子

てる

調子

行吉照路選

言う程に波は静かでない調子
 一気飲み調子にのせた小さい悔
 ライバルの調子出て来た棒グラフ
 調子はずれの三味もまたよし春うら
 父さんが調子よく切る空手形
 調子はずれの孫が一家をかきまわす
 調子よく相槌打って聞き上手
 調子外れもいておもしろい春の宴
 体調を整え初春の酒を酌む
 ペダル踏む調子も上々老いの足
 正調の何処かに寂を秘めており
 調子よく進むと鬼が現われる
 ライバルの調子が僕の胃に疼き
 調子よく開けてしまった玉手箱
 調子取り戻せぬままに休暇明け
 雪のんの民話調子にのるいろり
 ワイパーのリズムではじく雨の詩
 コマーシャルいつも調子がよろしおま
 囑託に調子が出ない定年後
 陣笠も選挙区帰れば名調子
 調子など気にせぬ靴で丸くちび

木魚 義男 山久 正美 恵坊 玉恵 寿美 元江 理恵 勝美 伊津志 規不風 重人 砥代 素身郎 京子 悠泉 美津枝 和友 白峰 文平

二人酒唄う調子のいい夫婦
 本調子になったか三浪鍵の部屋
 真打ちはやはり杜長の名調子
 ジョギング今日の調子を予告する
 胃の調子伺いながら初春の酒
 過信した調子に足をすくわれる
 何んとなく調子合わせて生きてはる
 調子好い話を提げて飲みに来る
 調子よく虎の子すっかり持つてかれ
 舵棒で調子を取った出世舟
 初風が空の高さを調子づく
 調子よく見せ場へ慣れた声が飛ぶ
 何時もとは調子が違う日の気配
 涙ぐむ目を笑わせる名調子
 順調に日々を送って娘は太り
 裏切りの舌へ調子を合わす悔い
 舌二枚ころころ調子のいい男

里風 ふみ 倫子 達子 忠三 弘朗 すみれ 春日 博友 孤舟 芳子 妻子 本蔭棒 七面山 雄々 秋峰 住

カラオケに風呂場の調子が出て来ない
 その調子旗を振る人振らぬ人
 調子づいたオウムは一言多すぎる
 人の和に調子揃えて鳴く雀
 祖父に似た調子良いのが気にかかり

満津子 たけ志 枯梢 蛭 与呂志 古都路 正敏 天 地

検札にパンチの調子腰でとる
 お調子に乗って左遷の星を見る
 火加減の調子に祈るのほり窯

削る

一二三調子つけてる父の朝

波多野五楽庵選

無い袖は振れぬと予算削られる
 削られた虫歯を舌で慰める
 五分五分のときは命を削る時
 値上げせぬかわりに目方削られる
 熟年の知恵を削ってゆく新語
 橋山へ行けと予算を削る国
 悪の芽を削る聖書の語が温い
 削られて敷いたレールが赤く錆び
 削られた箇所が重要だと言うに
 督促状甘い言葉を削りとする
 裏紙を使えと予算削られる
 淋しさは骨身を削る職がない
 原型をとどめぬ迄に削られる
 良心を削ると腹がたざり出す
 毒舌をはいてからでは削れない
 日本の敬語を削るギャルの爪
 世渡りに四隅削って行くうまさ
 削減の旧字で戸籍生きている
 ドラフトがしのぎ削った親友を分け

進 幸一 三五島 夢酔 優 芳子 市朗 軒太楼 忠三 明水 繁男 文平 是子 サチエ 森脇和子 久仁於 公一

石段を丸く削った人の足
これ以上削ると粗が見えてくる
家計簿を削る項目ありません
ささやかな夢です削ることはない
良心を少し削って生きている
削りとする山に何時かは裁かれる
鉄けずる匂いの街で浮き沈み
身を削る思いの過去が二つ三つ
荒削りながら取りえのある男
意地悪な鬼に心を削られる
インフットして家事労働を削ろうか
身を削る思いじゃと言う肥えながら
戸籍から削られ亡兄の如月忌
底辺の稼ぎを削る鬼がいる
ときめきを削って入れる壺がある
削られてゆくのは脛と独楽の芯
言葉の角削ると私の席がある
鉛筆を削ると飢餓が甦える

邦子 克子 博子 さと美 正坊 寿美 いつを 島 暁明 規不風 三枝子 芳水 多賀子 静子 螢 雀踊子 枯梢 忠三 義男 繁子 素身郎 叶 三和 地 人 天

削るのはよそウ民話が消えるから 成人

美しい科白で父の樹を削る 雄々
地球儀を削ると砂になりたがり 軸

裏

木村はじめ 選

裏門はだんだん狭くなりました
裏鬼門叩いて女が逢いに来る
祝宴の裏に置いてる涙壺
裏話札束だけが知っていた
日本の恥部をネオンの裏で知る
人生の裏は知らずに娘は嫁ぎ
極道の靴が知ってる裏通り
裏切りをしないロボット気を許し
仕掛け人裏に在るとは限らない
北風の踏んばりを知る裏通り
裏通り息をひそめて土が生き
二次会へ持って回った裏話
裏づけは妻を裏切る事になり
裏街道行つて故郷恋しがり
裾裏に朱を忍ばせる炎えている
調子よい言葉の裏がひっきり
正直な数字きつちり裏切られ
裏道を歩く男が刻む皺

虹汀 千秀 正敏 雄々 七面山 道子 冬子 克子 和友 露芳 優 鶴汀 博友 芳子 曉明 重人 幸一

紅白へ裏番組も意地を見せ
巢立つ子を裏切者のように見る
裏口で愚痴も一緒にくず屋買い
裏側をきれいに磨く母である
イヤリングだけが知ってる裏話
結ばれた今は時効の裏話
人混みの裏にお寺が並ぶ古都
裏話聞くアンテナは高く上げ
こんな裏持っているとは知らぬ酒
父の裏いつもなってる母の笛
裏話お棺の中で聞いている
裏のない背広正論ばかり言い
人生の裏を覗いた朱い爪
世の中の裏もくぐって来たお札
足の裏六十キロはしんどかろ
寝ころんで日本の裏を観るテレビ
裏面史に消された女の墓がある

悠泉 ちよ 繁男 元江 正坊 たず子 テルミ 輝月 宵明 兼治郎 島 ちかし 博子 かつみ 雀踊子 久仁於 三枝子 洛醉 文平 枯梢 裕 可住 寿美

紅絹裏に母青春の絵を残す 天

1986年

新年おめでとう会

1月15日・大成閣

「虎寅」

宮口笛生選

虎の子の味を鼠は知っている
柔かく踏めと和藤内の虎
三毛猫も虎のポーズで欠伸する
嫁はんの前で吠えたりしない虎
虎の威を借りてゐる奴が髭を持ち
開運の虎が揺れてゐる新春の酔
床の間の虎にポーズを付けている
ふりむくと張り子の虎が追ってくる
虎の尾だけは踏まないことにする
首ばかり振っておれぬ寅の春
檻の虎ストレス貯めた瞳で睨み
五黄虎でゲートボールにはずんでる
虎の威に町の商魂ぶら下り
寅年と聞いて信頼感を持つ
悲しさは猛虎に白い旗がない
関西に重心が寄る虎景気
寅年がさっそくゲストとして呼ばれ
虎だって悔し泣きすることがある
わても寅年妙なところで馬が合い

大八 俊平 トメ子 鬼遊 紫香 メ女 正子 信秋 吸江 吸江 柳宏子 三十四 天笑 いわゑ 吐来 天笑 白溪子 杜的

一徹の父の背中に寅が棲む
中流の虎で毛並をブラシする
熱燗で襖絵の虎酔うてくる
どの虎も負けてはおれぬ年賀状
首を振るふらぬ虎にも意地がある
神農の虎が慌てて首を振る
新春やホワイタイガー見て来よう
オリジナルの虎が一匹だけ売れる
まだ千里走る気はある寝正月
白寿まで寅千頭を倒すだろ
(寅) 獲物狙う虎が走ると風になる
(天) 人間が怖うて火の輪くぐる虎
「窓」 桶高薫風選
地下街に四季が息づく飾り窓
窓あけて主婦の一日始動する
孤児の眼は車窓の富士に釘づけに
病室の窓へ朝日力づく
終電の窓だらしない顔うつる
車窓にお茶置いて女のひとり旅
ライバルの窓はすっかり開いている
窓一つ拭いて成人の日となる
新聞は投書の窓をあけている
お役所の窓口だからつつかれる
かたくなに因習守る歳の窓
窓開けて夫婦で同じ方を見る
すばらしい明日があるよと窓が言う
天窓にハレースイ星輝いて
おへそにも窓があいてる水着ショ―

冬子 紀雄 太茂津 藻介 智恵子 紫香 和友 美津枝 雀踊子 信秋 一郎 金太 トメ子 白溪子 萬的 武庫坊 信秋 登志美 柳宏子 冬平 俊馬 寿馬 文坊 正坊

セレナード窓辺の影を待っている 安藤寿美子
寒気よし社務所の窓も開け放つ 藻介
末席の男がそっと開けた窓 かすみ
刑務所の窓にも白い雪が降る 雀踊子
カーテンが動いた窓に見送られ 幸生
晩年の夫婦の窓に陽が溜まる 年代
深夜営業ねこに浮気の窓がある 鬼遊
(佳) 肘かけて窓に夢二のおんな居る 年代
(佳) もてあます私を捨てる窓がある 花梢
(佳) 窓ぎわにいるから阿呆の面をつけ 大八
(佳) 骨董屋の窓に朝日が美しい 正子
(佳) 書院窓 古今和歌集置いてある みつ子
(人) 窓ばかり気になる暗い青春だ 史好
(地) 相聞歌夕べの窓は詠いよし 栗
(天) 窓越しに命の話軽くする 冬葉

浜田義一郎 監修
八木敬一 校注

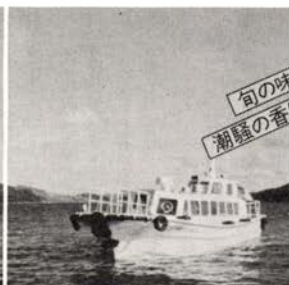
俳風 柳多留 四篇

七百二十句の句解と、わかり易い語釈のついた、本誌の古句研究でおなじみの八木敬一先生の労作の著書です。

■定価 五百六十円

発行所 社会思想社

海族のタカラジマ、 鳥羽《答志島》。



旬の味覚を存分に…
潮騒の香りでおもてなし。



鳥羽随一のフィールドアスレチック。



仲間と自然の中で楽しむバーベキュー。

海水浴、釣り、ウインドサーフィン…
プライベートビーチで、ちょっとリッチに。



幹事さん
ラクラクのご宴会
バックから、ご家族・
少人数さまのプライベート
プランまで、各コース
ご用意いたして
おります。

- 料金のごあんない
- ◆大漁コース…13,000円
- ◆潮騒コース…10,000円
- ◆松籟コース…8,000円

※1泊2食、税・サ込です。※休前日は2,000円増です。
※12月31日～1月4日 4月28日～5月5日 7月20日～8月25日は除く

交通のごあんない

- 大阪ナンバより鳥羽(近鉄特急)……………2時間
- 名古屋より鳥羽(近鉄特急)……………1時間40分
- 伊良湖より伊勢湾フェリー……………60分
- 大阪よりお車で西名阪ー伊勢自動車道を経てー約3時間
(専用駐車場あり)

施設のごあんない

- 全館冷暖房完備 ●大・中・小宴会場、ラウンジ、展望大浴場、
アスレチック、プライベートビーチ、キャンプ場

とっておきの パーソナルアイランド

リゾートホテル



サンビーチ 鳥羽

伊勢志摩国立公園 鳥羽・答志島

三重県鳥羽市桃取町字平石1591番地
鳥羽郵便局私書箱16号

お申込みご予約は ●大阪案内所 ☎06(226)0931 ●ホテル ☎0599(37)3315

柳界展覧

集録・板尾岳人

兼題と選者 各2句

女 高橋 古啓選

罪 久保田 寿界選

母 室田 千尋選

痛む 平山 繁夫選

張る 去来川 巨城選

灯 小松原 爽介選

締切り PM13時 会費 千円

川柳水柳会

★第2回川柳韻社誌上句会

兼題と選者 各2句別紙

姫 森中 恵美子選

夢 堀 豊次選

山 石森 駒久夫選

盗 渡辺 和尾選

雑詠 奥室 数市選

投句先下 915 武生市松森町34

箱 保地 桂水選

深い 中江 一魚選

招く 加藤 翠谷選

気軽 龜山 恭太選

慕う 藤原 みてい選

事前投句 野口 初枝選

才媛 主権 岐阜川柳社

★池田南岳退官・句集「刑

事」発刊記念句会

日・61年3月21日 AM11時30

所・神戸市立水産会館2F

山電垂水駅南へ5分

★番傘いざよい会

3月ひなまつり句会

日・3月9日(日) 13時

所・大阪府立青少年会館

(森ノ宮西へ5分)

記憶「幹齊・さわ子共選

握る「寿界・すみれ共選

情け「潮風・麻子共選

ベンチ「寿・古啓共選

鍵「古則・恵美子共選

各2句 締切り 14時 会費 500円

★句集発刊

木村喜見城遺句集

北陸柳壇の指導者として活

躍。北日本新聞論説委員な

ども務められ、川柳につい

ての鋭い観察も随所に示さ

れている。

逆立ちをして真つ当に見る

世間 喜見城

★人物風土記・老成枯淡の

道「天と地のはざまにふわ

り生かされて 緑之助

路郎の唱えた「人間陶治

の詩」を指針に、厳しい句

業を重ね、麻生路郎門十

哲「のひとりに数えられる

までに。やがて「いずも川

柳会」を組織、会長として

今日まで老成枯淡の道を歩

いている。現川柳協会副理

事長。(1月14日付読売新聞

島根版より)

▽お便り△

■白岩文衛主幹亡き後色々

話し合いました結果、暫く

の間、老齢非才乍ら私が跡

を継ぐ事になりました。

大原川柳社(土居耕花)

■中部読売で詩人の村田治

男氏が「東海の文学界」展

望で「柳宴」の拙文を「人

間が生きて生きた存在してい

る文章だ」とベタホメ。い

い気分です。

(東野大八)

■高知県の川柳部門で文芸

奨励賞の入賞何んとなく暗

い一年でしたが、とても嬉

しくて今年は明るい年にな

りそうです。

(赤川菊野)

■某主幹御夫妻のお達者く

らぶを拝見ビデオにも取り

柳友達にも見せ度々見させ

て載っております。私には

あんなよい顔にはなれませ

ん。(二宗吟平)

■正明は風邪でダウンして

いましたが、やっと治りま

した。雪が30cmも積りまし

た。長靴を履かせて、手を

つないで歩いてもらいまし

たが、大喜び「雪が踏まれ

て、お前は幸せだなアー」

と私は見える、見る事が出

来て幸福だと胸を射られま

した。(堀江芳子)

■60周年記念大会を5月25

日開催と決めました。

(尼 緑之助)

■頭の中が空転するだけの

毎日を送っています。

(仁部四郎)

■南国さつまに来ておりま

す。良いお天気で海はあく

まであおく空のおおきと地

平線一つになっています。

(宮崎シマ子)

▽訂正

■2月号58P(川柳塔賞候
補作品)

清貧の抵抗鍋を光らせる

田原久子とあるは今西静子

の誤り。お詫びします。

本社 二月句会

二月七日(金) 午後六時

メンズフアッションセンター

宮尾あいきさんのおはなしは猫の話。代々

猫までが女系で、女猫はいや雌猫は子猫を産むので増えて困る。それで嫁にやるのが一苦勞、すっかり売れ先が決まるとやれやれだ。

ある時、生まれたばかりの子が皆貰われてすっきりしたと思ったら、母猫の乳がいつまでも出るのが哀れになってくる。それで前に産まれて一匹残っていた、いわば姉猫に「お前、お乳飲んでおやり。」と言ったら、何と乳房にくらいついて飲みだしたのであった。

暖いお話に寒さも吹っ飛ぶ思いだ。出席者88名。月間賞の受賞は、西山幸さん。呼名賞は宮尾あいき、里小路、玉置重人の三氏。遠来の遠山可住、安平次弘道さんありがとう。弘道さんは初出席。

(進行)柳宏子 (受付)年代・冬葉

(記録)射月芳・亜成・山久

出席者・笛生・可住・武庫坊・年代・紀雄
作二郎・惠美子・幸・きみ・春蘭・柳伸・太

茂津・律子・登志代・シマ子・紫香・冬葉・池田寿美子・郁栄・美智子・弘道・一郎・杜的・白溪子・憲祐・勝美・薫風・白兎・金太東雲・史好・栞・幸生・みつ子・岳人・射月芳・文秋・山久・あいき・形水・一二三・智子・節子・勝晴・度・吸江・頂留子・吐来・雄次郎・幹齊・小雅子・亜成・小路・規不風千代三・水客・天笑・凡九郎・隆二・雀踊子狸村・柳影・三十四・三男・たつお・萬的・安藤寿美子・柳宏子・重人・章久・悦郎・英子・正坊・喜風・鬼遊・トメ子・愛論・洋敏はつ絵・いわゑ・蕉露・楓楽・博泉・健司・敏・浩一郎・寿美・寿子

席題「雪」

森中惠美子選

まだ誰も渡っていない橋の雪
雪かきが済むまで喧嘩やめとこう
ベチカ燃え雪は男の歌うたう
想い出があるので雪がなつかしい
ふるさどがとても恋しくなる根雪
三日雪仇の顔で降り積る
駆け落ちが駅を降りたら雪もよい
雪コンコむかし話をのせてくる
屋根の雪故郷捨てたい手でおろし
留守番の静かなと雪の夜
雪とけて隠した嘘がばれそうな
雪降ってアダモの歌の街になる
雪が降り続くキャベツの値があがる
雪しきりなおも晶子の歌が炎え

白溪子 吸江 武庫坊 悦郎 重人 天笑 郁栄 みつ子 一二三 愛論 幸生 楓楽 浩一郎 寿子

負け犬を立ち直らせた春の雪
あの子この子へ編み足す母の雪
そして冬細雪にも刺がある
子供ごころに見た雪が降っている
マツチ売りの少女で寝かす雪の夜
雪あかり駒子にふいに会えそう
なにもかも隠して雪は白く積む
蟹させる雪崩はとうに聞き洩らし
雪明り後姿は見送らぬ
雪もよい語りつくせぬ傷のあと
かまぐらの灯が雪の絵をあたためる
まっ白い雪に種火を埋めておく
喪のあけて雪の降りしく女坂
細雪だるまの髭は濃くなる
美しいけれど悲しい雪もある
暖かい雪しか知らぬ笠地藏
父の忌や遠い島にも雪が降る
欲深い男のかたに雪積る
かまぐらの子供にいじめなどはない
亡き母の速夜速夜に雪が舞う
雪のぬくさと哀しいものを見て育つ
雪解けを待つ平凡な眼にかえる
約束のひととつたつは雪になる

席題「自信」

梶川雄次郎選

抜く自信あつてびったり二位へつけ
自信ない顔並んでるオーディション
自信ある顔ばかりいる受験場
発表を見るまで自信持ちつつけ

白溪子 正坊 鬼遊 洋敏

金毘羅さんの上まで登ってきた自信
晩成を期して自信の亀の足
ある自信背すじ伸ばしている歩幅
自信ない顔へベタベタ塗つてみる 安藤寿美子
辞書ひいて来たのが強いことを言う
横顔は右に自信の片えくば
道頓堀自信過剰と肩組んで
そこそこの自信の顔で子のテスト
空中ブランコゆつくり降りてくる自信
生きてゆく自信再起の杖を引く
白の石握る自信の面構え
ライバルの自信笑顔で手を握り
すばらしい夫をもっている自信
一歩引くゆとりを持っている自信
ロボットに自信つけられては困る
回り道して来た者にある自信
自信もつおとこの背にあるゆとり
すばらしい自信モンローウォークする
ぐつぐつと朝まで寝たという自信
自信過剰の書棚に埃たまつて
落し穴の前でライバル待つ自信
梅咲いて自信過剰になつてくる
リハビリへ明日が見えて来た自信
自信なくして先生が猫を蹴る
黒帯になつてモリモリ湧く自信
自信とは別絵馬も一枚あげて来る
やりましたやれて自信がつきました
五目めし母の自信があたたかい
禁煙の自信たばこに近くいる

智子 寿美子 重人 鬼遊 重人 勝晴 小路 作二郎 一二三 笛生 一二三 浩一郎 吸江 小江 吸江 紀雄 千代三 浩一郎 萬的 憲祐 惠美子 寿美子 律子 千代三 杜的 柳宏子 惠美子 鬼遊

自信とはこんなに的が近く見え
それからは自信過剰がアタになる
手応えを胸で感じている自信
助手席に座り自信をたしなめる
自信過剰のベンがわが身に突きささる
幸せにすると自信たつぷりに言つたのに
子に孫にまだまだ負けぬ腕相撲
兼題「その他」 遠山可住選
その他大勢わたしの積木くすすまい
あす光る星が潜んでいるその他
追伸は無いが其の他が匂う文
ストープの守をしているのはその他
その他は何もいらぬ子の笑顔
神の情けでその他にされる時もある
先ず健康その他は後で考える
黒眼鏡その他の色が見えますか
二次会その他はおでん屋で出合い
騒ぐまいその他でケリが付いている
停年が来てもその他になり切れぬ
其の他大勢だから時どき羽目はすす
その他に別れた訳がたんとある
長男の外はその他にされている
学会会その他で踊る孫を見に
あやまちをその他の欄に書くも冬
にぎりめしその他大勢来て食べる
こわいのはその他の中にある議題
その他から抜きたい杭が叩かれる
犬かきの上手なヤツがいる其の他
杜的 美智子 射月芳 惠美子 たつお あいき 雄次郎 寿子 庸佑 弘生 健司 みつ子 幹齊 三男 幸 白漢子 冬葉 博泉 英子 千代三 吸江 蕉路 作二郎 岳人 弘坊 正道 重人

第九回鳥取県川柳大会

日時 昭和61年3月30日(日) 10時
会場 米子市皆生 皆生温泉会館
お話 東野 大八氏 今村 実氏

兼題

「高い」 橘高 薫風選
「指」 森中惠美子選
「こころ」 片山 巷雨選
「さわやか」 吉田 湯北選
「九」 沢 車楽選
「慕」 森山 盛桜選

席題

2題・各題2句・締切11時30分
会費 千五百円(作品集・軽食呈)

会費

投句八百円(作品集呈・3月20日消印まで小為替希望)

懇親会

宿泊希望申込み締切 3月20日 会費二千元

◇投句・宿泊申込先

〒683 米子市富士見町一三五 小西雄々方 第九回鳥取県川柳大会実行委員会宛

主催 鳥取県川柳作家協会

その他の寺は拝観できる京
エキストラその他に台詞などはない
その他の中にきれいな娘が居る
判らない分はその他で処理しとく
その他は食べぬ蜜の絹の艶
その他大勢そこが私の指定席
契約にその他の項で縛られる
ハンドルの横にその他が独り居る
その他の中で今が黄昏れてゆく
その他大勢の中で気楽に息をする
ガン首を揃えてくれたのは其他
その他のことは触れずに貸してやり
わたしは妻その他のことに疎くいる
その他の兵もやがて騙されたと気づく
石仏のその他の中にある折り
道化師の父もその他に違いない
焼香の列でその他の貌つくる
その他の者同士がコーヒーを飲んで
その他雑費に少うし女の匂いする
抽斗の一つその他の欄を置く
まな板に乗らぬその他のかくれ味

兼題「腕」

内海幸生選

律子 白溪子 杜の 柳宏子 シマ子 三男 小茂津 小路 白兎 柳宏子 凡九郎 柳影 智子 郁栄 惠美子 作二郎 柳伸 白兎 規不風 笛生 可住

腕力を見せたは舞台だけのもの
酔ったふりみせて抱かけてみたい腕
頼り切る一人息子の細い腕
嫁はんの細胞あてにする余生
腕をみがいた仲間が一人さらわれる
愛の鞭打てぬ教師の腕が泣く
利れすぎる腕が墓穴を掘っている
腕貸そと言つて呉れるも上り坂
動揺を押さえる腕組みとは見せず
両腕に飛び込む孤児の泣き笑い
希望退職腕のいいのが辞めてゆき
腕すくで姉ちゃんマンガとり上げる
腕棚に上げてクラブを買い替える
職人の腕なによりの道具箱
黄金の腕といわれてまだ二重
腕組んで太郎と花子ねぎを買つた
たわむれに組んだ腕から炎えはじめ
なまじ腕見込まれている貧乏籤
鬼の腕の話へ京はまだ寒く
腕さきの大工は腰でものを言う
ヒナナスに腕の過去など聴くでない
冬の腕弱きを助けようとせず
行商の父より太い母の腕
絵の中の腕が長くて逃げ出せぬ
腕のよい大工で昼の早いめし
チヨボチヨボの腕前だから自慢する
歓喜天腕のどれもが寒くなる
腕を組むゲーム覚えた喜寿祝
こけそつな時には妻の腕がある

悦郎 小路 あいさ 鬼遊 郁栄 章久 寿美 頂留子 水客 狸村 文秋 楓楽 鬼遊 正坊 岳人 いわゑ 柳宏子 萬的 幹齊 鬼遊 惠美子 岳人 健司 憲祐 柳宏子 作二郎 規不風 はつ絵

七人の句碑除幕記念川柳大会
磯野いさむ・櫻本聰夢・奥田白虎・梶川雄次郎・北川古葉庵・高木幸太郎・西村左久良の句碑完成を記念して左記の通り開催致します。

日時 昭和61年3月2日(日)
 第1部 句碑除幕 11時
 第2部 句会 12時開場
 ところ 東羽衣 新東洋
 送ります。

ところ 小谷城址(堺市豊田一七四八)
 東北高速鉄道「泉ヶ丘駅」10時より
 10時半まで駅から式場までバスでお送ります。

宿題 詩く 玉野可川人選
 視線 歌藤一麦選
 仲間 片岡 湖風選
 噂 西尾 栞選
 石 藪内千代子選
 席題 なし 投句拝辞 各題2句
 切14時

会費 四千元(昼食・記念品呈)

主催 七人の句碑建立委員会
 後援 番傘川 柳本社

腕の立つ男でめつたなと言わす
 敏腕を買われて世間を狭くする
 師の腕に窯出しの壺冷めてくる
 母思ふ祈りの中の千の腕
 森へ行く腕を広げていくくれる

柳宏子 水客 作一郎 惠美子 健司

腕くんで呪むしかない北の海

兼題「認める」

神谷 凡九郎 選

銅像になりホラ吹きが認められ
太陽へ伸びる個性を認め合い
実力が無いのが逆に認められ
自分でもおつちよこちよいは認めてる
朝のパン妻と認めているのだが
長い歴史が認めた一歩また一歩
嘘を嘘と認めるゆとり持つて
人間を認める呱呱の声あがる
力釘どうやらモノになつてきた
母さんにまかすと父は認めてる
敗北を認めた運が向いてくる
学歴は無いが見てんか此の出来を
戸籍課に行けば認めてくれている
認めて暮しの中で縄のれん
公認となればスリルの無い二人
引き金に指かけたまま認めよう
欠点を認め三枚目で通す
認めたら負けだ補聴器など要らん
月末はパートの妻を認めだす
浮気まで認める妻が怖くなり
黙認で繋ぐ親子のモラルの差
努力だけ認め成果に触れてこず
多数決これも時勢か目をつむる
確認をする残高がいつも白
黙認という手もある処世術
認めてる試練へ裏も用意する

幸 生
可 住
小雅子
笛 生
惠美子
水 客
吸 江
太茂津
重 人
柳 影
柳 伸
武庫坊
智 子
悦 郎
三 男
英 子
浩 一郎
き み
幹 齊
洋 敏
吐 来
柳 宏子
勝 美
美智子
杜 的
悦 郎

いずれ認めるあまり追いつめはならぬ
一本の皺を認めることにする
底辺を認める社会は何時の日か
判定ヘリングサイドは静かなり
認めなさい心がかかるくなりますよ
だまされてあげるわたしですむ話
アイデアを認める人まで変えてまい
戸籍では認める夫婦めしを食う
今日もやり過ぐすことと認めてる
あんたはんが認めたさかい帰らない
溜息をついて認めるものがない
幸せになれよ親父もそうだった
認めさせたこの空白はなぜだろう
結局は馬鹿な私でおましたナ

兼題「水」

野村 太茂津 選

水の流れにあしたを自問自答する
ちよろちよろと今おとなしい岩清水
ライバルの恩讐水も流れてる
水がめの水をたやさぬ亡母の唄
シルクロード水コンコンと生きていた
水の合う街に女が待っている
泥水をすすって父は生還す
水のサガやっぱりそつちへ行くのんか
二月の水は少し硬くて瘦せていて
水腹で預金通帳眺めてる
幸せの真中旅の水鏡
水溜りの雲もやっぱり動いてる
井戸水の歴史が母の背にある

郁 栄
幸 生
池田寿美子
頂 留子
憲 祐
三 男
太茂津
節 子
小 路
健 司
白 兎
雀踊子
凡九郎
一 三
幸 一
弘 生
雀踊子
萬 的
規 不風
安藤寿美子
凡九郎
年 代
洋 敏
山 久
杜 的
武庫坊

正直な言葉が水をさしにくる
美しい水の怒りをみた悲劇
水飲んでいる割勘の阿呆らしき
家守る女を継いだ寒の水
さりげなく水がはいれるを待っている
水漏れて空の青さが憎くなる
逃げ水を追いつつ眠ってしまいそ
子の寝顔別れ話を水を差す
神さまの下さる水を売っている
末期の水に少しお酒を入れてやる
夢ひとつ水に流した過去を持つ
十戒を守って水を無駄にせぬ
望郷の一つに井戸の水がある
噴水の裸婦冬の陽はおどけてる
企みがあるので贈る甘い水
火と水の夫婦が掲げるアドバールン
緑日の善哉水を入れ足して
若さとは別に味ある水いらす
水入らずなんと淋しいくらしか
涙腺の弱い女と水いらす
干涸びた心へ母が満ちす水
冬蛭水のにがさを知っている
水澄んで村は益々過疎になる
水の流れる音で女の詩が終る
死に水はきつと夫がしてくる
びっくり水豆が美味しく煮えま
生きてゆくテーマへ廻す水ぐるま
盗泉の水は甘くて胃が疼く

水 客
柳 宏子
雄次郎
可 住
水 客
白 兎
憲 祐
吸 江
鬼 遊
武庫坊
水 客
浩 一郎
幹 齊
作 二郎
楓 楽
楓 楽
蕉 露
愛 論
節 子
柳 伸
幸
雀踊子
隆 二
萬 的
美智子
登志代
幸
太茂津
(清記・楓楽)

老地神壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

にた川柳會

西村

早苗

雪の音きけばサンタの櫓の鈴
時々はきしむ日もある夫婦橋
小走りが師走の風に押されゆく
生き延びて齢に気づかう師走月
話好きお茶入れかえて呼び止める
方向音痴もう振り出しに戻れない
スコップを買えば雪雲遠ざかり
絡ませた指とは別な胸のうち
貨車走る私の愛をのせたまま
底辺で強く育った花もある
天からの声を確かに耳にする
矢印のランプ消えてた非常口
私生活他人は兎角色をつけ
飲み屋へもご用納めの足が向く
生き残る為の握手がまだ疼き
人間性崩さぬ父の冬帽子
二三匹鬼が走ると冬仕度
女の仏へ師走の男愚痴を言う
真剣な眼を逃げようと眼をそらす
また明日になるそんな日がただ続く

菜の花句會

高杉

鬼遊報

凡九郎

神農の虎に新葉ぶらさげる
善人が明日の約束して戻り
有線放送火の用心も過疎の村
ふとん干す出稼ぎの父明日帰る
理髪屋の鏡で咲いた蘭の花
約束の明日が何と待遠し
薬屋で粥と梅干すすめられ
点線で画いた道路はもめている
気にすまい明日はあしたの風の色
いじけてはならぬきつち梅が咲く
くたびれた靴一足が供である
どの絵馬が咲くかは神が知っている
七転八起きの明日は晴れるだろう
一病息災煎じ薬は親ゆすり
咲く花のやがては狂うあざきゆめ
妻の留守クスリを添えた置手紙
一線にとんぐりたちを並ばすな
農薬が効きすぎました死にました
東大阪川柳同好會 齊藤三十四報

蕉露 雀踊子 勝美 シマリ 春蘭 柳安子 射月芳 悦郎 頂留子 柳伸 弥生 健司 美幸 冬葉 幸生 鬼遊 勝美 綾珠 右近 千代子 文秋 恭太 みつ子 慶三 晋吾 美子 春蘭

頭下げるだけとは策のない話
金策に走る男の小さい影
対策が後手後手を行く都市砂漠
お茶にだけ誘うて策のない男
王様に忍耐の字は無用だろ
白い目に耐えてルージュをぐつと引き
鬼瓦耐えてこぼちの屑にされ
三幸川柳教室 桜井 千秀報
祝うべき子が逃けている七五三
肩書きを披露祝電以下同文
お返しは迷ったあげく米にする
ホステスの雪国生れを信じてく
好きと言う一念根雪を踏んで来る
冬の華遠野の里を埋めに来る
雪国へ左遷と知らず子らはしやぎ
雪国で育ちネオンで汚される
雪しんしん女工哀史の残る里
白皚々風に翔る雪おんな
寝すぎた駅員その日の記事になり
布団まで捲られて寝たのたかさ
朝寝した目にやわらかき薔薇のとげ
朝寝から目覚めたママの奮戦記
雲行きが悪くてじつと貝になる
三代の歴史を閉じる京染屋
瞑想にふけつたままで眠りこけ
カーテンを閉じれば孤独身にしみる
閉じこめた筈の噂が歩き出し
京都塔の會 松川 杜の報
柳誌着き無沙汰の友にとつと逢う
髪を梳くすこし傷んだ過去を梳く
文楽を氣にして旧家のボン戦死

三十四 雀踊子 孤舟 弘生 眉水 愛論 喜風 孝子 千秀 英一 忠昭 百合子 重次 隆行 靖子 智水庵 三千子 和子 桂香 当代 愛子 幸子 文子 杜の報 幸村 花村

猫撫で声それが本心かも知れぬ
 古都税へ僧兵もどきの面構え
 ちびちびと飲むぎんなんの翡翠色
 目立たないとところが好きな花もある
 背を向けている真面目が案じられ
 熱砂ふむシルクの道に夢はるか
 レモン切る朝の光が柔かい
 ほどほどの愛トリストとレモンティー
 えびフライレモンの滴にひきしまり
 一切れのレモン手料理温み持つ
 睨んでる上も睨んで夜の冷え
 猫も睨む月も睨んで夜み海女支度
 日焼け止め顔へすり込み海女支度
 かたき役支度部屋ではよい夫婦
 お支度が出来てないので冷やで飲み
 さぼってる蟻はいません冬支度
 川柳ねやがわ 高田 博泉報

敏正 芳代 年子 求芽 水客 英子 紫香 花代子 白漢子 冬子 和友 笛珠 武庫坊 杜的 善信 創吾 山久 吉之助 杜的 鉦平 麗水 波留吉 菜月 藍子 速水 新泉 君章 君子

防衛費何を目安に梓ははずす
 借りに来て目安の甘さ笑われる
 寿司食へるたつた一人の忘年会
 この冬も後継ぎのない炭を焼く
 おそいなあおそいですねえ娘の帰り
 山峡の村でひっそり継ぐ神楽
 重すぎた家のルーツに背き出す
 十二月炬燵が少し邪魔をする
 語りつくす戦の話小さくなる
 焼き芋をタイヤの指が食うている
 中流の目安の一軒やと貰い
 帯解かぬ母が終日居る安堵
 補欠でも子供野球のぞいてる
 先代の目安の単位球いぢがい
 王様を愛していない美女が居る
 だれかれに聞くからさきけぬ良い答
 ます目安たてて考え直します
 脱サラの目安は狂うことばかり
 窯の炎へ命を賭けた彩を追う
 王様の一番嫌いな評論家
 王様が見てもらつてる運命線
 王様の帽子を掛ける針はなし
 王様のクシヤミに国中風邪を引く
 王様に止つた蠅は叩かない
 虎の皮敷く王様はもう居ない
 西宮北口川柳会 奥田みつ子報

昭三 あやめ 三子 光子 かすみ 淳朗 静江 一途 三郎 晴風 博泉 まさお 英壬子 頂留子 凡九郎 鼓城 敬山 小路 覺然坊 柳宏子 紫香 薰風 鬼遊 和友 米朝 年代 嘉矩

荒れた手が焚火を囲む農作業
 エスカレーター美女の一群降りて来る
 コンセント一つ直せぬ世帯主
 お雑煮の餅はゆつくり食べましよう
 新式の機械が故障で困ってる
 幸せは一家総出の餅をつく
 日記帳去年の晦日も風邪をひき
 新曲がはやちビッコすぐに真似
 新しい言葉に老いの耳馴らす
 正月や猫も鯛の身食へあきる
 新しい大人の顔で式へ行く
 新婚を見送る空落粉雪舞う
 新ししつけに馴染み縫い直し
 肝心な事切り出せぬ冬の駅
 雑煮餅母には小さく小さくして
 ほどほどにのせられてみる馬鹿囃子
 佳句地10選 (前月号から) 吉川 寿美選
 今日生きて今日一日の手を洗う 規子
 立話猫が死んだの生れたの 鬼遊
 スイッチで一番こわい核ボタン 小六佳菜子
 かくれんぼおがとくであそんでる 六蔵かおり
 明日の米磨ぐ幸せに気が付かず 紅月
 落し穴僕がはまると考えず 紫香
 ただ生きるだけの苦勞へ風が鳴る 狂虎
 やりくりの毛皮は嘘を聞いている 花梢
 自分許して深い穴から抜け出せぬ 楓楽
 蜂の月人の心が見えてくる 水客

修理するまでもない子の伸びっぷり
終電に間に合うように飲んでいる
カレンダーに途惑いが出来二つ掛け
サスペンスどんどの炎謎を解く
繕って女は情を深くする
ゴムバンドやつと気付いた仕まい風呂
雑煮餅小さくはさんで母の椀
うわさ話が嫌いで塀を修理する
新しい靴は足ぐせまだ知らぬ
新鋭の背は直角に風を切り
焚火の粉散って寒行幕となる
くじ無しの賀状は隅に追いやられ
調律師の顔がだんだん冴えてくる
祭笛五徳ナイフがよく売れる
冬の木温もりもつてすすめ来る
新婚の賀状旧姓書き添えて
新生児窓ごしに見る孫の顔
税務署の前では笑わないうように
プロポジション考えながら餅を焼く
指定されうっかり家もさわれない
工事場の焚火を囲む国なまり
靴だけは新をはかせる母ごころ
亡き妻の磨いてくれた靴がある
私の根気をためす餅をやく
ボタ餅のぬくさに情けがこめてある
今日も又あぶれた顔が寄るとんど
悪い金じやないのに貯金チエックされ
力餅宿場の里に影法師
年明けて新しい面つけ替える
鏡餅背に男は喋らない
留守中に何があったか姑無口

貴代子 武庫坊 半歩 春子 幸子 かすみ 好江 礼子 江美 紀雄 光代 郁栄 正坊 はつ絵 春蘭 紀美子 幽香 いわゑ 暢子 一郎 春江 水声 凡九郎 美幸 散步 みち子 文子 みつ子 萬的 歌子

新調の鞆で春の旅に出る
新しい風が老翁の殻を剥ぐ
修理代が高くつくので捨てました
新入の社員に固い訓辞する
左遷とは思わず男の新天地
修理場に事件の鍵が落ちていた
注目の新人欠伸もままならず
祝福を受けてスヤスヤ新生児
新卒者俄仕込みの生真面目さ
エスカルゴ神妙な顔に女なる
僚船が戻らず涙でする焚火
尼崎いくし川柳会 角野かず子報
中立を守る男で敵ばかり
改札を通ると自由な道がある
古暦女の過去は語らない
隅っこで小さな商談まとめてる
魔がさしてふらふらと出る守備範囲
片隅の暮らした大きな夢を持ち
間口から奥に声かけ用が足り
成り行きをつぶさに見る隅の席
稽古場の隅で大きな夢育つ
隅っこのボーカルフュイス気にかかる
妻一人守った悔いが少しあり
忘年会続く暮れには胃の薬
人間も落葉も隅に寄りたがる
追憶を辿れば師走暮れなすむ
若い二人に暦の答えが氣にくわぬ
怒ってる音まな板が可愛そう
宿六が我が家を素通りしていった
信号を守れと孫に叱られる
恋人の傘に出合った通り雨

静子 文平 良征 新造 求津 志千 博子 百合子 水客 紫香 礼子 定人 伊升 君子 年代 貞子 伊三郎 かず子 はつ絵 美代子 みち子 玉子 水声 牧郎 郁栄 かね子 幸子 保蔵 文夫

師走月心が先に日が暮れる
ボチ袋用意している暮れの姑
運命線のとどこかで雪が降ってくる
暮れてから女戦さの用意する
大阪で泰団子買い旅終わる
いつも通る人が通らぬ寒い風
義理を欠く素通り辻で寒くなり
一度でも妬いてくれる人欲しいのに
向いてきた壁は暦のせいにする
ぶつかった壁に目覚めた暮れの雪
義理だけの顔が居並ぶ通夜の席
守りから攻めに転じて妻謀反
守りぬく妻の座明日の米を研ぐ
結果からも言う薄い唇よ
むらくも川柳会 藤井 明朗報
年玉へ孫の歌まね初笑い
コマーシャル上手に真似て初笑い
お年玉ねらう孫からおめでどう
屠蘇祝う家族よろしく初笑い
祝盃に喜びの笑み入れて飲む
晴れ晴れと祝盃うける夫婦酒
おめでどう母娘抱き合う合格表
三代元気で揃うて初笑い
初笑い出来るロケット作りたい
人生の花道二人で積んだ富
百万の味方を持った母の乳
喜びは囲む家族のあたたかさ
百薬の長はどほどの酒を酌む
喜びがこぼれ落ちます祝い酒
日本晴れ錦飾って郷土入り
祝われて長寿何にも優る富

すえ 歌子 静夢 正一 梨枝 山久 紫香 幸次郎 良征 静江 佳秋 一郎 かすみ 春子 明報 竹乃 信夫 秀子 和幸 文子 峰雪 ゆき子 みどり 蚊声 吉野 百代 富子 翠星 やス子

喜寿祝う晴着姿の母若し

ひい孫の舌のまわらぬお芽出とつ

おめでとつあやかるように梅が咲き

書初めの筆の運びに初笑い

百パーセントOKでないが折れてみせ

お芽出とつ口にするたび改まる

木次土堤百万ドルの花が咲く

講師より百歳の秘訣聞かされる

百万の味方を得たり孫の顔

健やかで何より幸せおめでとつ

おめでとつ攻めにはにかむハネムーン

喜びの電話におどる国説り

富柳会

藤田

子期してた凶報なれども一慌て

煩惱がまだ落けやらぬ雪女

ひとり寝に雪女でも来てほしい

慌ててもどうせ渡れぬ虹の橋

妖しさの中に覗いた母の顔

また元の視野にかえってホッとする

慌ててもしやあない余生の歩に還る

夢を追う男の視野に廻り椅子

女には出せぬ妖しい舞姿

すばらしい話の視野がまだ着い

吾が視野に見渡すかぎりキリン草

男七十せきも慌てもしない日々

視野をひろげると霊柩車に出あう

視野の中にいつも沈めてあるナイフ

失言に気付き慌てて又とちり

視野広き嫁と姑の笑い顔

バックミラー覗いて視野を見失い

よし子

はる代

孝華

武衛

鶏生

延子

巡歩

千里

保子

林蔵

正朗

芳子

泰子報

義雄

莊次

勇

千代女

文子

富美子

美房

文次

花子

美代

花梢

維久子

冬二

森子

富久一

静子

優子

伝説の星妖しくも尾を引く

雲流れカメラの視野を追いかける

そつ言われてみれば妖しい教祖様

実年といわれて視野を広く持ち

人妻の視野に渡れぬ橋がある

川柳大坂

塩満

バンザイを目で聴く窓の新幹線

あきらめの決断つかずクジの列

実年てなんだ僕の年かいな

大レース引き立て役の馬でいる

仏罰をおそれぬ京の泥試合

千鳥足青信号で渡つて

退職の明日は妻とマイペース

人生論各駅停車の窓に居る

湯豆腐が踊ると鬼もよって来る

定年を喜ぶべきか泣くべきか

喜びの酒ならなんぼでも飲むぞ

ことごと湯どうふ民話を語り出す

酔っている時が一番いい男

閉門に閑古鳥鳴く土産店

現役の花道を去る灯が揺れる

最後迄だましてほしい嘘もある

最後にはやつぱり出てくる顔がある

飛車落ちで俺の王将泣い顔

我慢の子最後にキット笑うだろう

王将のブライド捨てて9の九

窓ガラス手で拭いて見る冬の旅

孤児が見るあれが故郷か窓の富士

家庭では俺も王将空威張り

ミツエ

綾子

田中勇

泰津子

敏報

柳弘

みつる

重人

雅果

しげお

三十四

喜醉

洛醉

笑風

醉舟

金太

比呂志

与呂志

鉄心

我勝

一介

虎醉吟

小藪

天平

本蔭棒

河南子

正流

喜楽

哲流

王将も歌にうたわれ街歩く

村田さん王将歌い財をなす

風見鶏アキレス腱がきつとある

川柳化粧槽

植村客遊子報

ハイハイと母は素直に老いている

ポケットにかくして持った鈴が鳴る

へそくりの場所を忘れて妻に聞く

下駄で踏まれただけ初詣でから戻り

盆栽が天まで伸びた夢を見る

花籠を盛れば女の私語となる

万葉の恋うた唄びかるた会

車椅子二つの影は離れない

お隣と視線を止めて遠くいる

晩酌は元気の証止められず

埋もれ火がも一度火花を待っている

虎の威を借りて女一人住む

一生に一度の晴着派手に着る

一言の温みで冴える老いの虹

年金の暮しに満ちた老いの日々

家族会議阿呆になれる妻が居る

寄せ鍋に箸ふれ合つて知る温み

良い事がありそう今朝の紅の着き

医といふ臭の女と喫茶店

川柳藤井寺

赤木

古稀すぎて働く夫の背を送る

曲り角素直に折れて行きちがう

隣からおでんの差入れ湯気立てて

戦後まだけじめをつけに孤児来る

英泉

小柳

敏

岳詩

大鷹

実男

紅月

秋月

越山

葉香

悲子

礎石

永楽

輝月

とし

みつこ

サワ子

みね子

孝栄

まさ子

和子

客遊子

和子報

つや

与呂志

須美

かな女

志洋

吸江

おでんの灯ネオンの隅で生きている
面白いお方でちよつと不真面目で
容疑者の方が元氣な民主主義
けじめなく育てたつけを今かぶる
すき腹におでんが匂う縄のれん
一尾の蟹に手古ずる旅宴

鍋一杯おでんを炊いて留守にする
おでん屋で中曽根さんを肴にし
大根がこんな美味いおでん鍋
定年のけじめに立てる設計図
若夫婦おでんについて目で勘定
衣食住足りてけじめの影うすく

はつきりとけじめをつけて出世せず
駆け落ちも三三九度でけじめつけ
入団か入試かけじめやとつけ
温情にけじめつければ角がたち
妻の留守炬燵の中で除夜の鐘
夜の電話寒さ忘れて声弾む

喜寿ひとり苦吟する夜の雪明り
初恋の人の計を聞く夜の氷雨
しあわせは御陵の日の出借景に
ターミナル赤い羽根売る市の名士
シングルベルお経もまじる大家族

川柳泉尾

吉川

寿美報

ちよつとした出会いが一生共にする
のち餞をなめなめ風邪の交換手
クリスマス父さんケーキ買つて日です
ケーキ食べて終る我が家のクリスマス
クリスマス今日一日のクリスチャン
隠れ里聖夜の雪が浄く舞う
さげて来た筈の手鍋も風化する

作秀

美代子

本蔭樺

ふみ

秋園

哲正

美佐

たかし

治子

正枝

祐二

伴子

義一

繁男

みのる

麻雄

末一

和美

雅美

彩

初枝

清心

昭子

美報

三千代

葉子

寿美

敏

鍋も煮え酔いも廻って本音が
思い出を煮込んだ鍋は捨て切れぬ
おでん鍋屋台で愚痴が煮えたる
わだかまりいつかとけてる鍋の湯気
手鍋下げ戦火のがれた金婚式
老宅の鍋も老化で穴があき

大鍋に煮あふれて里の初春
念入りに掃除したに來ない客
大掃除について心をざんげする
大掃除妻が握つた主導権
掃除機が何を飲んだか二日酔い
Y・F・C川柳会

ランドセル急いで帰つた成績簿
水色のワルツで踊つたひとりごと
賀状こぬ友を氣遣う置炬燵
お年玉一氣に殖える預金高
心齋橋リボンをつけたお買物
春宵一刻三人の子と水割と
みずみずし肌をならべて露天風呂
水に流せぬ古傷があり義理の兄
境内を斜めに馳ける早出の日

豊中もくせい川柳会 田中
初産はどちらでもよい白揃え
年金はそっくり孫の初節句
今日からは妻という名の市場籠
初仕事公園きれいに掃いてあり
初夢はくじが当って飛び起きる
初釜を炊いて華や路地の奥
人生を生きた歩幅は妻が持ち
小走りに歩いて母の百度石
歩調あげゲートボールの入場式

文子

多和子

美子

トミ子

美代子

白水

弘子

淑子

昭子

シメ子

満州子

翠記

房子

よし津

豊平次

たず子

モトエ

紅葉

節子

正坊報

メ女

武庫坊

美幸

春子

明子

洋子

山久

きく子

明吉

喜寿きても歩調の合わぬ妻と住む
急ぐなら歩くとバス停なせ書かぬ
辻の面売りかなしい面を売り残す
おたやんの面つけ何時も丸くいる
もう一人仮面の下にいる私
面つけた背なのこどもが重くなる
大寒の水でザブザブ顔洗う
ライバルに出会いコロケ買いそこね
ちららと春が近いよ淡い雪
年賀状あの人だけはすぐわかる
ご利用があれこれ違つておもしろさ
年一度孫の財布はふくらんだ
猫のヒゲ切つてみようか秋日和
窓開けて病む子に春のよい日和
裸木がのびをしている冬日和

尼崎尾浜川柳会 春城武庫坊報
湯わかしのポットがたぎる新家庭
胃の検査済んでこはれる恵比須顔
念願の結納交した孫の春
名案が浮んで電話したくなり
特等が当る人あり歳の市
火を囲み明治生れの色さんげ
旧友と湯豆腐つくつ嵯峨の里
朝風呂が年金暮らしたの楽しみに
湯がたぎる逃げた男と逢つている
蒸発という名案を思いつく
墓穴掘る名案だったかも知れぬ
名案は女の知恵をもろて来た
食卓に育ち盛りの箸の音
紹介を出来ぬ女を連れてくる

卯の花句会 辻 白溪子報
福一
花村
作二郎
慶子
よし子
紫香
寿美子
満子
房子
登志実
美祿子
博史
隆

正坊
江美
弘治
よつぐ
すみ
昌子
武庫坊
いわお
貞吉
牧郎
歌子
夢之助
十四郎
紫香

峠から見る里の灯は温かく
灯みな消して舞台が回る音
公園に灯がついて子等が去ぬ
父親の心に背く華燭の灯
青春の胸にあかりをつけた人
余生なお灯とめて旅つづく
灯を消すと女の部屋にある匂い
幾千の愛よ港の灯に絶る

自信家の男を騙す灯が点る
手袋を脱いだ握手の温い肌
手袋を外し医師達ホツとする
手袋の指は小銭をまたおとし
手袋の片方で人形が出来上り
手袋の手編みほのかな愛匂う
手袋の穴から福が逃げてゆく
指紋消す手袋だったサスペンス
移り香の手袋拾う終電車
婦警さん白手袋で拳手の札
軍手して草引く母の背がまるく
満足のゴム手袋を脱ぐ手術
除夜の鐘心は無と空となり
越年の準備をいそぐ庭の松
年越せば嫁ぐ娘の晴着縫う
越年の段取りをする店を閉め
越年に肩を寄せ合う沈丁花
神主も巫女も忙しき絵馬作り
流行風邪もらったままで年を越す
越年の街に救急車が吠える
越年へコーヒーが苦い妥協する
越年の夜も静かなり老夫婦
札状が着いて嫁の名やっとなり

よ志子
白溪子
一 郎
静 江
逸

銀行さんボーナス月だけ低姿勢
時は金なり音もなく迫る老い
忘年会けむたい人が横にいる
早すぎるいや遅すぎるに電話やめ
嫁の掌の中に割りだした皿がある
万策が尽きて仰いだ昼の月
大根も寺で食べると中気除け
熊本川柳会

享 子
メ 女
陽露子
暢 子
井 寒
芳 子
多賀子
芳仙報

悪口がひどいと他人が腹を立て
福耳をもつて福祉の世話になり
三猿を守り通した福袋
幸福行きの切符は自分で買いにゆく
福引で声が大い当りくじ
福耳の妻が財布を握りてくる
宣伝の福に財布が瘦せてくる
福の神来なんだままも無事に暮れ
ときおりはわたしに閉口する私
閉口してまんネと話聞かされる
いたずらの孫居て欲しい欲しくない
長電話こちらそれ程閑でなし
朗らかな人一人いる座の空気が
朗らかなクラスでいじめつがい
朗らかにさせるマイクを持っている
朗らかに送りたいのに暗い暮

綾 珠
慶 三
柳 伸
洋 子
章 久
曲 手
雅 風
しんじ
楓 楽
凡 九郎
外 吉
善 信
信 治
柳 宏子
智 子
小 路

鬼 遊
あき子
敏 正
求 芽
花代子
良 太
恵美子
和 友
諷云児
梅 風
萬 的
百合子
さとし
高 子
紫 香
秀 男
善 信
種 子
笑 雪
如 洲
年 代
里 子

爪揚子ごときに歳をはじくられ
さりげなく夫踊らせる笛を吹く
人柄を見るフロントの目が光り
人柄を買われて損な役がつき
言うだけと言って体があたたまり
標的にならずにすんだ順不同
父ちゃん影絵狐と大とだけ
女一人自立に耐えて光る部屋
この辺で酔わねばならぬ義理の酒
やさしさがこわい政治の下心
南大阪川柳会

昭 代
豊
真 吾
丹 青
俊 一
とみの
正道
右 柳
右 柳
滋雀報

悪口がきこえて補聴器をはすす
入社そうそう悪口聞いた化粧室
悪口は決して言わぬ亡母だった
悪口を言えぬ心が美しい
冬の風悪口ばかり告げにくる
カギツに「おかえりなさい」はメモが言い
わが字とはとても思えぬメモであり
メモ一つ届いて会議中止する
婦唱夫随メモの通りの市場籠
内緒ごと残すと怖いメモ用紙
王様の無理簡単に通される
簡単な式へ深くなる誓い
天寿をいと簡単に修羅を言う
簡単に面接が天下り

幸 子
輝 子
三 男
まさ子
柳 宏子
えつ子
とよ子
紫 香
志 津
喜 醉
雀 踊子
武 雄
里 美
豊 太

実年の二字簡単に始めない
引き止めて欲しい家出の荷をつくる
押し入れにもつたいないの荷が増える
花嫁の荷物へご近所する値踏み
父さんの肩に頼りの荷物こぶ
一つ荷を降ろせば次の荷待つ職場

大原川柳社 会長文衛さんを偲ぶ 土居耕花報

面影を句集の中に詩に偲ぶ
その雅号武蔵の里に咲き誇る
合掌の臉に残る師の顔よ
先生と呼ばせて欲しい次の世も
呼びたくも呼ぶ事出来ぬ旅の果て
師の君を慕う手向けの詩悲し
師は星と成つて句会の道しるべ
温顔を慕う手向けの語にむせぶ
今日この日神去りませし師を偲ぶ
ありし日の恩師の笑顔に眼がうるみ
師の影を慕いさまよう迷い鳥
早春の嵐に散った花悼む
恩師逝く只断腸の鐘の音
惜別へあまりに赤い寒椿
昇天の師のあの声が何故聞けぬ
又逢う日までの別れが惜しまれる
蛇の無い船よ流れて何処へ着く
全快の祈り空しく逝き給う
師の温み永遠に輝く星となる
親鳥の羽根の温みを抱いて行く
柳界を揺るがす今日の流れ星
剣聖の里へ文衛の灯が残り
寒椿ボトリ恩師の死を告げる

達子 富子 大輪 利次 十郎 溪水 朝代 悦子 克己 喜美子 こふゆ 幸子 寿恵子 玉恵 辰江 地佳平 妻 子 敏子 巴子 信恵 正己 睦子 元江 理恵 智泉 冲笛 みさえ

初春をこんな悲しい事に会い
サークル樟標 田形 美緒報 耕花
私でも二八頃なら福娘
戎さん今年こそは良い年に
福笹を担ぎ戎の顔になり
えっささん浪花の正月しめくくり
戎さん小切手落とし福を受け
この年になつても福あめ買つて来る
たたくだけたたいて功德せかされる
福笹で埋まる視野に戎さん
御利やぐがあつたら養錢弾みます
去年も縁がおまへなんだ戎さん
えっささんのんまつせとアルミ玉
親子して養錢覗く本戎
福箕の神様男同士なり
川柳塔唐津支部 久保 正敏報 邦子
ふる里に苦しい想いの過去もある
タイミンク小さな見栄でふとく外れ
晩酌を一本減らす酒の税
一枚を残してもみじげえにげえ
出す前に自分で点を付けて見る
蔽らしい噂が怖い手術台
茹南瓜喰つて柚湯の香に浸り
マイホームローンが重いかたつむり
元旦の雪へ決意を書いたおく
雑煮餅いくつ食べると母の声
柿を剥く妻の切っ先胸を指す
倉吉川柳会 渡辺 善吉報 律子
始めてのハートのエースに惑わされ
始めあり終りがあつて大往生
晴ればれと門をくぐつた年賀状
次男

一門の伝説信じ過疎守る
門の中に入る他人を見きわめる
人間を続け始めてから風の旅
書き始め日記のペンに角があり
古都税で門を開けたり閉ざしたり
手始めに張り子の虎とにらめっこ
無意識に頭を下げた寺の門
始めから騙す手品に騙される
歓迎のアーチが好きなお国入り
門くぐつて生き門くぐつて死ぬ僕ら
川柳わかやま 堀端 三男報 柳子
糸切つて自分で重荷背負う風
父と子の呼吸が合つてる風の糸
風糸を妻に任して五十年
やつこ風糸の強さに頼りきり
大風が人間どもを俯瞰する
男なら怒れと風から声がかかる
風上げへ孫と本気で勝負する
ジャンプする椅子の高さに敵がいる
跳ぶときのポーズを思ふ紙の鶴
憎いまで赤が似合つて跳んでいる
跳び超えた壁の向うに壁がある
少年の跳ぶ踏台が朽ちている
跳び越した溝をも一度振りかえる
分別の底で跳ぶ夢見つづける
工程を踏ますに跳んだ椅子の位置
誇らしくママに手渡す通信簿
札束と俺の誇りは換えられぬ
誇らしく孫に囲まれ写される
生きざまをさらす筆にもある誇り
雪ぐにを誇り愚直を良しとする
きみ

柳子 文子 柳子 秋人 碧水 幸苑 御前 独歩 苦句 三男報 狂虎 信秋 信子 豊太 信子 忠雄 登志代 雀踊子 幸子 公子 太茂津 俊平 紫香 雅子 克子 天彦 寿子 子

家中の誇りを背負う父の椅子
悔し涙の中に光っている誇り
遠廻りして来た父にある誇り
誇るもの一つも無いと母は笑み

生きていた母を誇り持つ誇り
凍とした明治の母を持つ誇り
通知簿の小さな誇り探し出す
次に来る波に私を賭けてみる

生きて帰る約束がある波の音
引き際を知っている波はおとなしい
悲しみの砂文字波が消し返す
荒波を越えた男だ信じよう

田高に悲喜こもごも波が立ち
波風をしずめる姑の智恵袋
波が知るふたりでつくる砂の城
波に乗る男と勝負せぬことだ

川柳ささやま
丁寧な女の嘘を嘆き分ける
心ない丁寧と知る言葉尻
丁寧を支える笑みが美しい

年輪に最後の愛に紅を引く
ピタミンの残った方は牛が食べ
ピタミンが効いたかめんどり唄い出し
ピタミンの陰に生きてる明日がある

編針の先まで燃やし愛を編む
枯れても愛の絆でこころ編む
はつれまだつくろえぬま今日を編む
晩年の構図を妻が編み変える

反省をくり返しつつ共白髪

脇田

米朝報

紀久子
柳宏子
紀美女

光代
凡九郎
栄美子

三千代
緑良
正子

桂香
稚代
照子

正博
末広
三枝子

康勝
三男
文平

百合子
ひか平
とみ子

可住
和子
米朝

一盃
テール
ゆう也

富美
越山
はるゑ

落ちついて反省すればやはり負け
言いすぎた言葉しみじみ反省し
川柳後案
井上柳五郎報

初心者の後でクラクションせきたてる
初心者にしては素質褒められる
錆びた釘磨いて初心に返る意気
掌の中に初心の文字を書いてみる

あばら骨晒して野生はまだ媚びず
亡母の苦を一つ剥き二つ剥き骨拾う
反骨の父にもあった掌の温さ
骨のある者から次々左遷され

骨ぬきの鯛をベットにやる平和
国鉄は飼犬二匹に手をきかれ
延命の布石見事な風見鶏
実名の呼び名うれしい粗大ゴミ

落ちて泣き出て泣く紅白歌合戦
降参はすまい男の意地を見せ
ああ言えばこう言う妻に降参し
降参をして脇役で甘んじる

降参をすれば女は面をとり
すんなりと降参されたので不気味
降参ができず火の橋また渡る
四十七士覚悟はよいかの山鹿流

満月へ狸の太鼓聞こえそう
八木節の打棒が冴える樽太鼓
内弁慶のやぶれ太鼓がとまらない
補修した親爺の太鼓の音が狂い

聴衆に尻向けて打つ太鼓
組む足にチラリ女の彩を見せ
目出度い日今日から夫婦永い旅
腕を組み沈思黙考菊日和

やよい
静子
トモ子

哲郎
ともえ
照路

草風
方巳
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

幸好
幸好
幸好

組替えのきかぬバズルのままに昏れ
組紐に編み込む私だけの彩
色褪せた夫婦の筏組直す
あてつけに隣の嫁を褒め上げる

お隣が引き合いに出る妻のくせ
長逗留隣の娘気にかかり
お隣をほろくそに言う聞き合わせ
お隣へ話した噂が舞い戻り

狡猾な男が隣で袖を引き
平井川柳故障知らずの名機関車
父の挽く機関車で一家恙なし
錆ついた機関車還る家がない

機関車に男の行進曲が合う
手作りの歌の中にもドラマあり
わかあゆ川柳会
小砂

菊薫る神話の里に鳩が飛ぶ
名所旧蹟後から神話が作られて
目まいするほど働いてまだ足らず
神々も恋にのぼせた神話あり

ゆきさぶつて見ても大樹はゆるがない
本山が揺れて壇家がゆきぶられ
ブランコにゆきぶられ秋の空
揺さぶれどびくともしない防衛費

我が輩も紙幣にされて目をまわし
老いの果日果便りを書くばかり
目まいする程の愛なら拒まない
一升瓶さげてゆきさぶりに耐えている

ロケットが柏手打つて祈っている
星空の神話地球はまだ若い
ゆきさぶりをテトラポットは受け流し

愛子
美佐保
典子

美智子
吟平
秋月

佐加恵
白龍
柏峯

恒洋
桃風
正一

敬三
白汀報
翠星

ヒデ子
秀穂
悦良

世似
蔵榮
英子

笑子
清泉
かつ子

天痴人
鈴江
民子

恵美子
はるみ
白汀

川柳たけはら

森井

青居報

さかなつりさかなはつれずさむいな
クリスマスツリーをいつかざるかな
クリスマスケーキ食べれるうれしいな
クリスマス大きい大きいケーキ買う
かがみに自分のすがたがみなうつる
すがたがクンクン鳴いてたいてくる
ゴロゴロとよくねむるね猫たちよ
もつちよと寝たおふとんはぐられる
初日の出明日の希望が見えてくる
北風がこたつを離しにくくする
紅葉から急に変わった冬景色
出張の父のカバンにない土産
姉のところへ自分を試す一人旅
お喋りをしようよ友よ戸を開けて
詩が無い街だな昼の六本木
本心を見たくてビデオ巻きもどす
つましく暮して夢の小箱もつ
忙しき逆手に今日は島めぐり
じしたばはすまいどうでも来る夜明け
青春のドラマ演じてみるレター
独身が続くエイズに縁がなし
ボナスが出るものとサンタになる父か
運命へ萌ゆるもの持つ夫婦です
身の上をばりばり湯がたぎり
旅続く句読点など打てぬまま
るすばんはひとりでさみしいな
見たくない自分が見える日のあせり
一つ上やはり違った絵を描く
本当の山が見られる冬がすぎ
コーヒートとショパンの終るまで待とう

小一裕次郎 小二晶 小三晴 小四純 小五由 小六鉄 小六保 中一早 中二昭 中三昭 中六重 中二恵 高一紀 高真弓 青居 純舟 比呂子 敬子 静水 一幸 蘭幸 房子 西合 史子 令子 靖子 政子 淑子

一年の速さと思う子の育ち
旅終えて湯場の女の影残る
嘘をつくことには馴れないから詰り
税金の使われ方が目に余る
幸せの中のうつろにふと気づく
初詣で踏むには惜しい簪の目
めい事へつけてゆく面つつからず
ブラインドを捨てぬ湯につかりすぎ
三割引きの冷凍野菜で彩を盛る
花盗人がやがての愚におちる
シクラメンの早咲きを買った姑の忌や
秋深し唯黙々と薬を切る
一合をふたりでお鍋つき合い
川柳高知
恋一途女危ない橋渡る
口数の少ない父にある威厳
ややこしいものに男の酒肴
仏間あり神棚もありクリスマス
胎動の子とさわやかな初詣
雪舟のねずみ民話に生き残り
表札が威嚇している門構え
表札の裏それぞれにあるドラマ
すれ違い夫婦に白い風が吹く
山伏の吹くほら貝はよく通り
口笛を吹いて密かに友を待つ
となりとも会わず短日共稼ぎ
争いの椅子に疲れた顔があり
分校の椅子一つ減り二つ減り
定年を放さぬ椅子がある未練
城北川柳会
千鳥足間違いもせず我が家へと
神夏磯道子報

白狐 清水 一路 清子 貞子 シゲヨ 康子 博子 臣子 観子 房枝 喜久恵 松風報 千鳥 三吉 功 弘生 節子 菊野 佳風 登舟 竹萌 俊子 幸泉 松風 朱坊 繁子

働いたお陰でのん気に孫の守
借家でも平和な暮しで子と生きる
家路急ぐ一日無事に終えた足
子も孫も出て行き老いが守る家
鍵つ子の母待つ家の灯が点る
2DKせまいながらも一城主
兄よりも高く育ったのもん気者
円高も隠居の身にはよそ事
若い夢生き生き空を飛んで居る
もう古いのん気で居れぬ仕事なり
人形の家の外には氷雨降る
一生に三回転々家を建て
千歳飴大事に持って背で眠る
何事も善意でかえすのん気者
ビル谷間我が家泰然生きて居る
見せかけの呑気を知ってる影法師
兎小屋四季折々に花を植える
手袋をはめて炊事と気儘すぎ
大自然何故これまでに荒れるのか
家を出て気になり出した火の始末
家守の主婦の座狭き台所
気分でも貴族で居たい十二月
木枯しに裸強いられ大銀杏
一年の手しおの大輪切るハサミ
鍵つ子によその家庭の灯が明い
肩寄せてビルの谷間に二三軒
家内安全必死に願う初詣
自作自演愉快なドラマ出来上り
兎小屋でも日照權持つ我が家
歯を入れて益々元氣空いばり
家の中覗いて行った冬の風

亀郎男 市子 陽子 節子 圭子 敏子 千世子 寿美礼 炳子 カネ 午郎 清治 晃世 悟郎 星斗 文子 有佳 佐津乃 白峰 是子 達子 好古 新一郎 新子 婦美子 右近 笑風

一枚の賀状に昔の顔がある
子等巢立ち二人で住めば広い家
人間は皆孤独だと思ふ夜

テキパキと処理する妻が居て呑気
のん気者冬將軍の怒り買う
除草剤声なき声の悲鳴聞く

日の出の赤絵にも文にも書けません
すばらしい今年を惜しむ除夜の鐘

聴障川柳

稲田

豊作報

福の神隣りまで来て腰を据え
耳しいの隣りに神が居てくれる

背伸びせぬ隣り同士のおつき合い
お巡りさん隣りは新婚ピッカピカ

ふと目覚め隣りに妻のいる安堵
お隣りの電化見えてきて愚痴る妻

お隣りも秋刀魚焼いてる夕餉時
世界中となり同士でまん丸く

遠方の身内に勝るお隣りさん
お隣りの美人が嫁ぐ日本髪

慶弔を共に味わう隣り組
余りにも隣りの近いは良し悪しで

差がついて少し不仲になる隣り
サンマ焼く隣りもサンマ焼いてる

川柳塔まつえ新春句会 恒松

しじみ舟かすかに見える霜の朝
悪い事しているように朝の酒

明けて行く朝へ無限の夢がある
疲れなど残らぬ朝をしかと出る

早起きの母につめたい寒の水
ストレスが朝に尾をひく二日酔い

残業のアクビも乗せる朝のバス

静歩
倫子
静子
満津子
弘生
綾珠
道子

紅報
寿美子
渡

妻
愚子
きみえ

吾
芳枝

下り蜘蛛朝から縁起のよい知らせ
初あられ朝の門出に彩をそえ

春の朝心動くも身は寢床
茶柱が朝の動きを軽くする

初春へ上々吉の朝が明け
善人て拝み未完の地図を追う

伎芸天三度も拝む丸い腰
ないしよ事拝む姿で説き伏せる

札拜の男にあつた過去の傷
母と医師拝む気持ちで顔見つめ

狛犬が人の拝みを旁うて
汐汲んで老漁師朝の陽を拝む

拝まれる神にもあつた好・不況
野地蔵も拝めば微笑してくる

ふるさとを捨てた出発だつてある
出発の合図は短かい方がよい

出発点妻の号砲が鳴る
出発の縁起へ梅干があるお皿

出発のベルで別れの顔となり
出発の間際せわしいコンバクト

出発のあれもこれもと荷が重い
出発を明日にひかえて灯をゆらす

出発点すでに兎も亀もいる
鬼ごっこ出発点を見失う

バス停が賑やかになる村芝居
バス停でまた二の足を踏む女

スーパで会ひバス停で又出会ひ
ハンカチにははの匂いがしてならぬ

ハンカチもピンと立ってるめでたい日
ハンカチがいっそ喪服を悲しませ

翠星
みえ
育子
正朗
雄男
多賀子
満江
昭二
静江
友子
代仕男
軒太楼
巡歩
玄範
鶴丸
秀子
ちかし
芳子
美治
三和
与根一
孤呂二
長三
瑞枝
舞吉
荒介
壮樹
叮紅

第9回 鳥取県川柳大会

日時 昭和61年3月30日(日) 9時開場

場所 皆生温泉会館

(国鉄米子駅から皆生行バス)

柳話 東野 大八氏

お話 作家 今村 実氏

兼題 高い 橘高 薫風選

指 森中恵美子選

こころ 片山 巷雨選

さわやか 吉田 湯北選

九 澤 車楽選

慕う 森山 盛桜選

席題 2題 当日発表

各題2句、締切11時30分

会費 千五百円(作品集・軽食)

投句八百円(小為替希望)

懇親会費二千円 写真代八百円

投句先 〒683 米子市富士見町一三五

小西雄々方

鳥取県川柳大会実行委員会宛

知事賞ほか8位まで

呈賞

主催 鳥取県川柳作家協会

3 月 各 地 旬 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土) 午後1時半より 揺れる・誕生・予告	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	9 日(日) 午後1時より ひとり・非常識・招く	和歌山県民文化会館 4 F 中集会室 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
菜 の 花	10日(月) 夕6時より ふところ・好意・突く・和解	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5-4-6 内海幸生
西宮北口	10日(月) 午後1時より 前・広場・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4 枚
川 柳 ねやがわ	16日(日) 午後1時より 躍る・満員・期待	寝屋川市立総合センター1階会議室 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
もくせい 川 柳 会	17日(月) 午後1時半より 鬼・軽い・叩く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
堺川柳会	18日(火) 夕6時より 曇る・屑・唇・草	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
南 大 阪 川 柳 会	19日(水) 夕6時より まっすぐ・見込み・無役・面談	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 午後1時より 言葉尻・雑用・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白溪子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富 柳 会	20日(木) 午後1時より 美人・茶碗・砂	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3-22-18 藤田泰子
南海電鉄 川 柳 部	20日(木) 夕6時より 目標・祝日・ニュース	南海会館ビル内 南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道不動産管理部門課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1 枚
東 大 阪 川柳同好会	22日(土) 夕6時より 送る・迎える・受ける・流れる	東大阪市社会教育センター2F 近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 斉藤三十四 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
駒つなぎ 川 柳 会	24日(月) 夕6時より 紛れる・健康美・窓口・道楽	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 小路

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「頑張る」 藤田 軒太郎 選
 「ムード」 大原 葉香 選
 「損」 中原 諷人 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「しこり」 清水 一保 選
 「値段」 中原 比呂志 選
 「派手」 横地 雅風 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

3月の常任理事会は1日(土)

〒545 定価 五百円 (送料50円)

半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)

昭和六十一年二月二十五日印刷
 昭和六十一年三月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎
 印刷所 藤原 童心社

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
 電話 (三六九) 六九一四番
 振替口座 大阪 813336八番

本社3月句会

日時 三月七日(金) 午後六時
 会場 メンズファッションセンター3階
 東区内本町一丁目 電話 06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「証拠」 西田 柳宏子
 「地図」 藤村 幸女 選
 「選ぶ」 大 路 美幸 選
 「亀」 辻 白溪子 選
 黒川 紫香 選

席題 二題 当日発表
 会費 五百円 各題三句以内厳守

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

4月の兼題 「魅力」 「勉強」
 「誇」 「居」

4月の本社句会は7日(月)

『夜市川柳』募集

第10回 「自分」 大阪 形水 選
 締切 3月31日

第11回 「鼻」 中尾 藻介 選
 締切 4月30日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一
 河内 天笑 方
 堺 川 柳 会

編集後記

三月号は女性特集号として、エッセイ、秀句鑑賞、アンケート等、すべて女性に執筆を願った。川柳群像も三笠しづ子を充てた。

「女性の仲間を誘って川柳人誌上にはじめて婦人欄を作った。楽しい日々であった。」と井上信子女史が述べられておられる。そして、

「あとに続く女性たちと大きな座を組み日はいつであらうか」と将来に希望を託しておられるが、これは、

麻生霞乃女史も同じで、川柳雑誌に婦人友の会を結成誌上の指導もされた。女流進出の著しい昨近、この伝統を生かしたいものだ。

☆別項に紹介の古川柳研究で本誌にお馴染の八木敬一先生の著書「俳風柳多留」四篇が社会思想社から発行された。初篇から五篇まで既刊、各五百六十円と安価だが、内容分り易く、古川柳の理解には格好の本である。一読をお奨めする。☆古い川柳塔を読み返し、

北川春泉、田田古方、若本多志、その他の諸氏の個性のある文章に接すると、現在の同人には、原稿を寄せられることも極めて稀になつてしまったことを痛感する。アンケートの形で、

どんどん書いて頂くように務めているが、随時随意にユニークな原稿を寄せて頂きたい。文章は誰でも書けるのだが、馴れが必要で先ずは机に向かつて書いてみることから始めることだ。

☆文章を書いても投稿するには、勇気という大袈裟だが、思い切りが要る。本社句会へ出席するにもきつかけと勇気が必要だ。二月の例会は寒い夜にもかかわらず八十八名の出席だった。遠山可住、安平次弘道両氏の遠来のご出席は嬉しい限りである。弘道氏は出張を兼ねての初出席。句会後、鬼遊さんも交じえて乾杯、たのしい歓談のひとときを得た。地方の仲間が顔を寄せて下さることの多い親しめる本社句会にした

い。☆青森をはじめ、今年の寒気と降雪は異常であった。北国の皆さんに心からお見舞い申します。(薫)

▼国内線の飛行機全便が禁煙になった。これはスウェーデンの話である。これとは関係なく元月から「私ハ煙草ヲヤメマシタ」。終生こんな大それた決心などする気もなかったのに、自分ながら驚いている。

▼関西新空港計画が漁業補償でもたついている。漁民四千八百人にとって大阪湾・泉州沖は生活の場である。そこに空港が出来るとなれば補償問題が起るのは当然のことである。

▼誰が、何のために、ここへ空港をつくるのか納得のいかないうちに、関西国際空港会社が設立され、竹内社長が交渉の矢面に立たされて難航している。言い出さずが困るのならいいが担ぎ出されて神輿に乗ったやとわれマダムの社長に託つては「社会的生命をかけた」大仕事である。他方、

時の運輸大臣、細田吉蔵代議士は「今の私はその任にない」と、そっけない。

▼民営化問題で現在もめっている国鉄「酷鉄」といふのが、国家経済の大きな負担になっていく赤字責任の所在もあいまいなうちに、何とも奇怪な事件である。

▼奇怪と言え、政府と自民党は、新年度の予算案でまだ出来もしない新幹線の駅舎や駅前広場のために百五十億円を計上している。

▼普通列車では大阪―東京間はおおか大阪―岡山間も乗り換えなしで行くことも出来ない国鉄なのだ(き) ☆入院患者の見舞いに来たらしいおばあさんから声をかけられた。「看護婦さんのおられるところはどこでしようか」。私もその病院は初めてなので、通りすがりの看護婦さんにたずねた。詰所のあり場所はすぐ分り、おばあさんを案内していったその部屋には「ナースステーション」と片仮名で示された表示が小さく出ている。それを見て、何

だか、おかしくなってきた ☆看護婦さんの仕事もコンピューターなど、新しい機器の導入で昔とは随分変わってきていると思う。外からチラと窺った感じでも、私が入院生活を送つて二十年前のふん開気とはまるで違う。そういう意味では、

「詰所」より「ナースステーション」の方が、感覚的には現実により即した表示と言えるかもしれない。

☆しかし「ナースステーション」が看護婦詰所であることを理解できない人も結構いるに相違ないし、もしかして外国人への便宜を考へてのことなら、NURSS TATIONと書くべきで、何れにしても不親切な表示ということになる。

☆この話をしたところ、ある人の曰く「散髪屋がヘアースロン、洋装店がブティック、駅の売店までキオスクと、やたらシャレた名前をつける。みな片仮名が好きなやねん。ヤバな理屈は言わんことです」。それもそうだ……。

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

《投稿規定》

はかき 一枚に三句(一首)以内(川柳・俳句・短歌と明示する。これ)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

《投稿先》

〒552 大阪市北区中之島 電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可

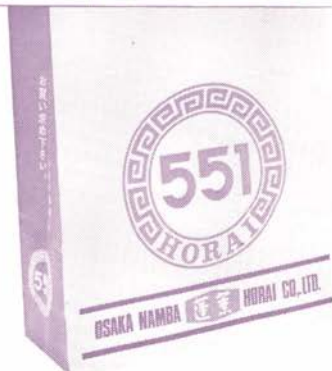
昭和六十一年三月二十五日 印刷

昭和六十一年三月一日発行 (毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻七〇六号 川柳塔 三月号

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ



TEL641-0551